



山梨県立富士山世界遺産センター 研究紀要

世界遺産 富士山

World Heritage Fujisan

第3集 2019

目次

口絵・口絵解説

(論文)

- 林羅山と富士山 ―中世から近世へ― …… 堀川 貴司 7
富士北麓地域の近代俳句の一面
―高浜虚子の山中湖畔滞在をめぐって― …… 高室 有子 15
二つの古道とその変遷 ―ツナ坂越と籠坂越― …… 野村 晋作 23
富士参詣路と溶岩洞穴について
―北口の胎内・精進御穴から
人穴・白糸ノ滝・万野風穴を巡る― …… 村石 眞澄 33

(調査報告)

- 吉田御師・榎田家住宅調査報告 …… 北川 洋 51
船津胎内所在石造物調査報告 …… 船津胎内石造物調査グループ 60
精進御穴所在石造物調査報告 …… 精進御穴石造物調査グループ 79
-



絵葉書「富士見坦ヨリ見タル富士」 明治時代後期

個人蔵



絵葉書「大神坂の富士」 明治時代後期

個人蔵

□絵4



絵葉書「甲州下吉田浅間神社ヨリ見タル富士」 大正時代

個人蔵

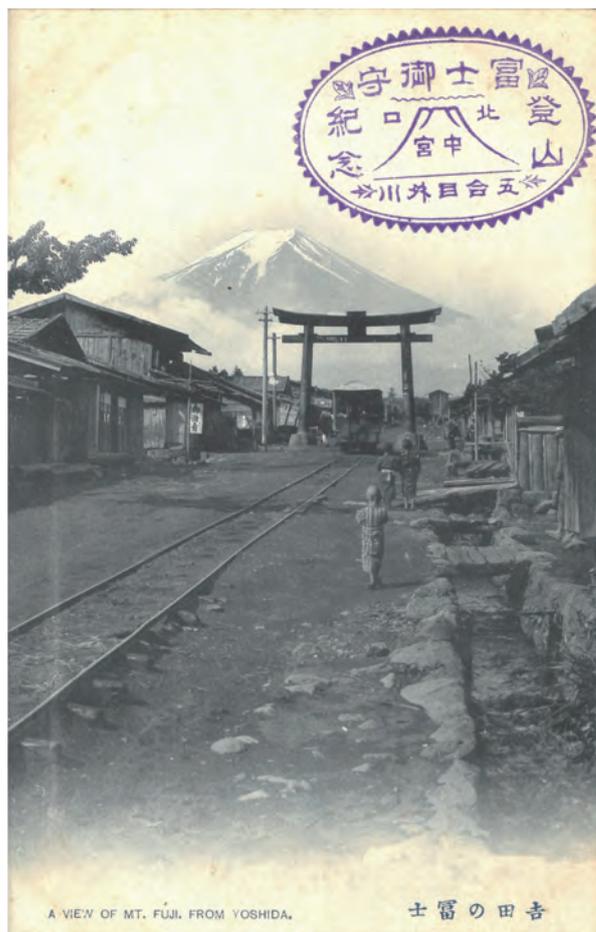
□絵5



絵葉書「甲州下吉田浅間神社ヨリ見タル富士」 大正時代

個人蔵

口絵6



絵葉書「吉田の富士」 大正時代後期

個人蔵

口絵7



絵葉書「富士見橋の富士」 大正時代後期

個人蔵

□絵 8



絵葉書「赤坂ヨリ富士遠望」 大正時代
個人蔵

□絵 9



絵葉書「舟津原ノ富士」 明治41年 (1908)

個人蔵



「父母御胎内」 (「富士一山北口明細御絵図面」より) 嘉永3年(1850)写

個人蔵



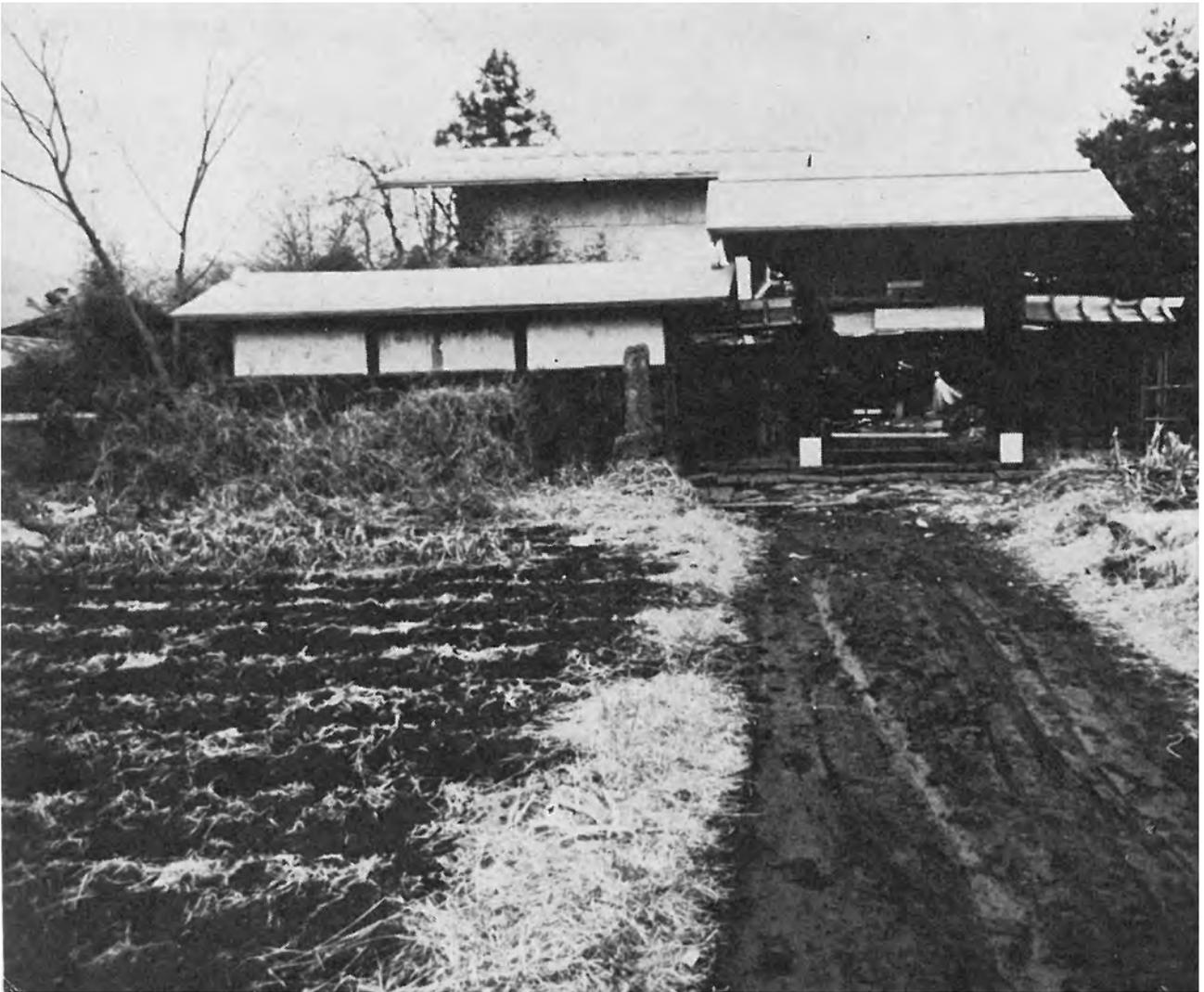
〔参考〕無戸室浅間神社境内(船津胎内)

富士河口湖町船津



精進御穴

富士河口湖町精進



吉田御師・榎田家住宅 1970年頃 故飯島志津夫撮影

富士吉田市上吉田

口絵解説

1 「富士山神宮麓八海略絵図」

宝暦年間（一七五一〜一七六四）頃

個人蔵（版木）

富士山北口の吉田町（富士吉田市上吉田）と富士山神宮（北口浅間社・諏訪社）を基点とする北面からの登山道、および麓八海を描く。上部に三峯の富士、中央に北口浅間社・諏訪社を大きく描き、下部に吉田町と、麓八海（内八海）を配置する。

吉田町の南限はそのまま胎内道へと続き、焼入にあつた胎内（旧胎内）と新胎内（船津胎内）を、それぞれ付属の小屋とともに描いている。旧胎内には鳥居が建つ。

吉田町の入口（北端）の鳥居（金鳥居）前で甲府道に右折し、舟津村（富士河口湖町）の手前で大田和村（鳴沢村大田和）へ道を取ると、人穴（静岡県富士宮市）方面に至る。分岐に「従是人穴道」と注記する。鳴沢村を通過すると精浄穴（精進穴）・精浄湖（精進湖）、本栖湖、やがて人穴に到達する。精進御穴が、十八世紀中頃には内八海巡りとともに、すでに富士信仰の拠点となっていたことがわかる。

2 絵葉書「富士見垣ヨリ見タル富士」

明治時代後期

個人蔵

下吉田新田（下新田、富士吉田市）付近を写す。往還を行く人馬。その左側には一段高く造成された都留馬車鉄道の軌道が見える。富士の高嶺には農鳥が出現

し、田んぼに農夫が犁を入れる。近代になると、富士道は桂川沿いから馬車鉄道の軌道の敷設されたこの道に変更された。

3 絵葉書「大神坂の富士」

明治時代後期

個人蔵

下吉田新田の南限に太神社（伊勢神社）が祭祀される。同神社から望むと、低平な耕地が広がり、収穫を終えて藁ニヨウが積まれる。左手背後には古屋（東町）の家並が連なる。往還は大神坂を上つて下吉田の村中へと向かう。

4 絵葉書「甲州下吉田浅間神社ヨリ見タル富士」

大正時代

個人蔵

宮川橋（富士吉田市下吉田）から富士を望む。富士山の姿から、裏焼とわかる。手前に二本の柳が写る。間に宮川が蛇行し、右岸（実は左岸）に平屋の家並が続く。現在の本町三丁目付近である。柳の立つ場所は小室浅間神社の裏参道にあたり、境内には水辺を好む樹木が繁茂していたが、今では最後の柳の一本も樹齡が尽きて転倒した。左岸には畑地が広がる。右上に「甲斐吉田御旅館芙蓉閣大外河」のスタンプが押捺される。大外河は、御師で近代になると旅館業を営んだ。

5 絵葉書「甲州下吉田浅間神社ヨリ見タル富士」

大正時代

個人蔵

宮川橋上の河畔より撮影する。前号同様、裏焼。社叢の森越に富士を望む。神社参道には欄干のない板橋

が宮川に架かる。家の裏手は畑地に利用される。「富士山撰画」のスタンプが押捺されている。

6 絵葉書「吉田の富士」

大正時代後期

個人蔵

上吉田金鳥居下の通りを写す。道端を子どもが通行する。金鳥居の根元には建札が掲げられることから、御縁年（大正九年（一九二〇））前後に撮影されたものか。富士馬車鉄道と都留馬車鉄道を再編し、中央線の大月駅と登拝拠点の吉田を結ぶ電車が整備された。「富士御守 登山記念 五合目外川」のスタンプが捺されている。

7 絵葉書「富士見橋の富士」

大正時代

個人蔵

吉田橋と富士山を写している。徳堀（間堀川）に吉田橋が架かる。冬場の撮影で、橋詰には茶屋とおぼしき平屋が認められるが、雨戸が閉まる。浅間神社の社頭を通過した道は、この橋を渡って新屋並木へと向かう。背後には浅間神社の森（諏訪森）が続く。八海巡りに向かう道者は、山中湖へはこの道をたどった。

8 絵葉書「赤坂ヨリ富士遠望」

大正時代

個人蔵

吉田から船津へ向かう鎌倉往還の途中を写す。上から着色される。往還面に高さを合わせて茅葺の家が建つ。手前に石垣を積んで高さを調整していることがわかる。

9 絵葉書「舟津原ノ富士」

明治四十一年（一九〇八）

個人蔵

船津の集落より一段上のハラ（原、耕地）から富士を望む。船津原は、山道（船津登山道）に沿った場所か。桑畑に利用されている。農夫が富士を見ている。「北口 戊申之年 御縁年 登山記念」のスタンプが押捺され、撮影年が特定できる。

10 「父母御胎内」〔富士一山北口明細御絵図面〕より

嘉永三年（一八五〇）写

個人蔵

幕末の船津胎内の様子を描いている。手前に剣丸尾を横断する道（胎内道⇨吉田道、吉田通）、中央に御胎内の入口に掛かる建物と付属施設を配し、背後に夏の富士をかぶせている。

吉田から吉田通をたどって三人の道者が到着した。この道は船津へも通じており、河口から中ノ茶屋への近道として用いられた（河口通）。建物は切妻造、石置の板屋根で、真中を御胎内への通路とし、胎内入口の右高所に石仏を安置している。左の間には煎物の釜を据え、右の間には小机を置き、それぞれ男が座っている。右の男の頭上には、紐状のものが下がっている。腹帯だろう。一方、釜ではオマクリ（御海人草）を煎じているのではないだろうか。新生児の胎毒を下すのに用いる乳付けの飲みものである。屋外には手水桶が据えられ、手拭のマネギが下がっている。

現在は胎内入口に無戸室浅間神社の拝殿がある。図に描かれる建物より間口が広く、両側に三尺程度拡張されているとみられる。手水の位置には雨水を集める

コンクリート製の水槽が設置され、手前には赤色の鳥居が建つ。鳥居の左脇の大日如来坐像が、画中にあった石像であろう。

「富士一山北口明細御絵図面」は、麓から頂上まで、吉田口登山道の所要所要を描く。全五八葉。異本に「富士山明細図」がある。^{*1}

^{*1} 個人蔵。「富士山明細図」〔富士吉田市歴史民俗博物館 企画展図録〕（富士吉田市歴史民俗博物館、一九九七年）が全葉をカラー図版で紹介している。

11 精進御穴

富士河口湖町精進

「富士山神宮麓八海略絵図」（口絵1）には、「精進穴」として記載される。十八世紀中頃には、すでに富士行者が寄りつく行場になっていたようである。誓行徳山（門倉政四郎）がこの穴を知ったのは、文政十年（一八二七）のこととされる。天保三年（一八三二）に、この洞穴に入り、断食入定した。全長一一五メートルの横穴で、日洞と呼ばれる。南西方に月洞がある。日洞の周辺に、徳山を顕彰する石塔などが所在する。^{*1} 洞穴に向かい合って「乾徳道場」と称する建物があり、誓行徳山像ほかを祀っている。^{*2}

^{*1} 石造物については、本書収録の「精進御穴所在石造物調査報告」を参照されたい。

^{*2} 岩科小一郎『富士講の歴史』（名著出版、一九八三年）に、慶応元年（一八六五）の造立という木造徳山像の写真が掲載されている。同

像の調査については、他日を期したい。

12 吉田御師・榎田家住宅

一九七〇年頃

富士吉田市上吉田

榎田家に伝わる「由緒書」によると、天正年間（一五七三〜九二）までは山本姓を称する商人の系譜を引く家であったという。元龜三年（一五七二）の「吉田宿屋敷割帳」^{*1} などによると、ここには別の御師が居住しており、榎田氏がこの屋敷に入ったのは宝暦年間（一七五一〜六四）のことと考えられる。中門の奥に近世初期に遡る古い住宅（主屋）が遺存する。富士信仰を考える上からも重要な古家といえる。^{*2}

^{*1} 『山梨県史』（資料編4）（山梨県、一九九九年）ほかに翻刻。同書は、「刑部家文書」として採録（一四八六号）。

^{*2} 本書収録の北川洋「吉田御師・榎田家住宅調査報告」を参照されたい。

序

富士山が世界文化遺産に登録されて、ほどなく六年が経過しようとしております。「信仰の対象」及び「芸術の源泉」として、その価値が広く世界に認められ登録に至ったことを思いおこし、心を新たにいたしております。

山梨県立富士山世界遺産センターは、富士山の普遍的価値をわかりやすくお伝えすることを目的として、平成二八年六月に開館いたしました。おかげさまで、昨年一月には、入館者（南館・北館のべ人数）が一〇〇万人に達しました。開館三年足らずのうちに、このように多くの皆さまにご来館たまわりましたことに対し、改めて御礼申し上げる次第です。

山梨県では、遺産登録に先立つ平成二〇年度に山梨県富士山総合学術調査研究委員会を組織し、富士山の有する価値について調査研究を開始しました。当センターは、開館とともに前記研究委員会の事務局を担うところとなり、「山麓の巡礼路の特定」という遺産登録時に世界遺産委員会から提起された課題に鋭意取り組んでおります。今年度は、ここ数年の吉田口登山道にかかわる調査活動のなかで得られた成果を知っていただくために、「吉田口登山道と御中道」（上期）ならびに「吉田口登山道の騷ヶ馬場と流鏑馬」（下期）と題する企画展を開催いたしました。ことに下期の展示におきましては、平成二九年九月に県の無形民俗文化財に指定された「下吉田の流鏑馬祭」を執行する小室浅間神社（富士吉田市下吉田）の関係者各位の全面的な協力を得ることができました。このように富士山麓にお住いの皆さま方と交流を深めるなかで、さらなる富士山の価値の発信に努めていきたいと考えております。そうした意味からも、本誌前号（第二集）で取り上げた川口御師・本庄家住宅（北川洋氏調査）が富士河口湖町の有形文化財に指定されたことは、喜ばしいかぎりです。

さて、本研究報告には、総合学術調査研究委員会文学部会の研究成果二篇、昨年二月に山中湖村で開催した公開発表会にともなう研究成果に加え、今年度実施した諸調査の成果を盛り込みました。山麓に分布する溶岩洞穴（船津胎内・精進御穴）の信仰実態およびこれらに通じる道に関する調査で成果があがっております。また、建造物調査では吉田御師・横田家住宅を取り上げました。

本書の刊行を機に、なおいっそう多くの皆さまが富士山の信仰や歴史に興味・関心をお寄せいただくことを祈念申し上げます。末筆ながら、本書掲載の調査研究活動に対し、御協力をたまわりました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成三一年三月

山梨県立富士山世界遺産センター 所長 秋道 智彌

凡 例

- ・本書は、平成三十年度における、富士山総合学術調査研究委員会による調査・研究の成果をまとめたものである。
- ・本書の編集は、山梨県立富士山世界遺産センター調査研究スタッフ（堀内亨・堀内眞・根岸崇典）が行った。
- ・本書をまとめるにあたり、資料調査や資料掲載にかかわり、次の機関や各位に御協力をたまわった。
 - 北口御師団、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会、国立公文書館、都留市、富士河口湖町教育委員会、富士河口湖町精進区、富士河口湖町フィールドセンター、ミュージアム都留、山梨県立図書館、山梨県立博物館
 - 飯島栄子、伊藤忠正、伊藤昌光、佐藤法子、杉本悠樹、中村章彦、中村和行、中村力、横田但人

（敬称略、五十音順）

第一部
論
文

林羅山と富士山 — 中世から近世へ —

堀川 貴司

はじめに

林羅山（一五八三—一六五七、名、信勝。法名、道春。羅山と号する）といえは、徳川家康から家綱まで四代の將軍に仕え、江戸時代の文教政策に深く関与したと、また、儒学のみならず、歴史・文学・神道など多方面の著作があることなどが知られている。徒然草注釈書『野槌』や『丙辰紀行』『本朝神社考』などは早くに刊行され、仮名草子など同時代の文学にも影響を与えた。五山文学における富士山の表象を一通り見渡した次に見るべきは、五山文学と近世漢文学の橋渡しをした羅山であろうと考え、その著作に現れた富士山を取り上げて分析していきたい。

一 略年譜（今回の内容に関わる事項のみを挙げた）

天正十一年（一五八三） 一歳 京都四条新町の町家に生まれる。
文禄 四年（一五九五） 一三歳 元服、建仁寺大統院に入り古澗慈稽に漢学を学ぶ。
慶長 二年（一五九七） 一五歳 周囲の説得に反して、出家せず建仁寺を出る。
建仁寺の英甫永雄、博士家の舟橋秀賢、商人・学者の角倉素庵らと交流。
慶長 九年（一六〇四） 二二歳 藤原惺窩と初対面、本格的に儒学を学ぶ。
慶長 十年（一六〇五） 二三歳 徳川家康と二条城において初対面。
慶長十二年（一六〇七） 二五歳 三月に駿府下向、家康と対面、四月に江戸に移り秀忠に兵書等を進講、翌月帰京。この年家康の命により剃髪、名を道春とする。
翌年からは家康に書庫管理を任せられ、書籍収集・文書執筆・駿河版（金属活字による印刷）出版など、多方面における活動に関わる。その間、駿府に在住し

ながら、しばしば江戸・京都にも出かける。

元和 二年（一六一六） 三四歳 家康死去にともない蔵書を幕府・御三家に分割、江戸下向後京都に戻る。↓『丙辰紀行』

元和 四年（一六一八） 三六歳 江戸神田に邸を賜る。

寛永 七年（一六三〇） 四八歳 江戸上野（忍岡）に学校用地を賜る。

寛永十五年（一六三八） 五六歳 この年から正保二年の間に『本朝神社考』執筆（正保二年（一六四五）にはダイジェスト版『神社考詳節』刊行）。

寛永二十年（一六四三） 六一歳 後光明天皇即位のため上洛する幕臣に随従。

↓『癸未紀行』 またこの年『本朝地理志略』を著す。

明暦 三年（一六五七） 七五歳 明暦の大火で神田邸全焼。その五日後没。

二 初めての富士山（慶長十二年三月）

京都で生まれ育った羅山が初めて富士山を見たのは最初の駿府下向の時である。師の古澗慈稽の送別詩には（『文集』巻六八・随筆四）^③、

士峰元是小蓬萊（富士山はもと小蓬萊）仙人の住む別世界

四序看花雪作堆（四季を通じて花が咲き、雪も積もっている）

絶境雖奇何及洛（そんな素晴らしい場所とはいえ、やはり京都には及ばない）

縦逢徐福早帰来（もし徐福に逢えたとしても、すぐに帰ってきなさい）

とある。それに答えた羅山の次韻詩は次の通り。内容から見て、駿府に着いてから送ったものか。第一・二・四句末の韻字を踏襲する。

曾聞海外有蓬萊（蓬萊とは東の海上にあると聞いていましたが）

富士巍然邪馬堆（まさかヤマトの国にそびえ立つ富士山がそれだとは）

雪似出東山上月（雪は東山の上に昇る月のようであり）

白鵬疑是鶴飛來（シラキジはまるで鶴が飛んできたかのようです）

富士山には古来いろいろな伝説が語られているため、仙境に喩えるのは自然な発想である。古潤詩では特に、秦の始皇帝の命令によって不老不死の薬を捜して渡海した徐福が富士山一帯に定住し、その子孫が今も秦氏として暮らしている、という徐福伝説の一つを用いている。第四句の表現は、南北朝時代の禪僧絶海中津が明に留学し、初代皇帝洪武帝に謁見して、その命によって熊野三山を詠んだ詩「熊野峰前徐福の祠、満山の葉草雨余に肥ゆ、只今海上は波濤穏やかなり、万里の好風須く早く帰るべし」（熊野の山のおもとは徐福を祀る祠があります。彼が求めた葉草は豊かな雨によく育っています。今は陛下の威光によって海も安全ですから、もし彼が今生きていたなら、その薬を届けるためにすぐ帰ってくるべきでしょう）をも踏まえている。同じ徐福伝説ということで、場所の違いをあえて無視して利用したものである。

これに対して羅山は、まさに仙境としての富士山を実見し、雪の白さを東山の月に喩えることで、京都の風景にも劣らない美しさだ、と古潤詩の第三句に返している。「白鵬」は中国の山中に住む全身白いキジの仲間。これは元代から明代にかけて活躍した学者・詩人宋濂（一三一〇～八一）が詠んだ「賦日東曲」（日本を詠む詩）（注（1）後者論考参照）という連作一〇首の第三首「層霄に絶入す富士の岩、蟠根直ちに圧す三州の間、六月の雪花素蠶を翻す、何処の深林に白鵬を覓めん」（富士山の頂きの岩は高い空の果てまで伸び、ふもとは古木の根のように駿河・伊豆・相模の三国をがっしりと押さえつけている、真夏の六月でも白い綿毛のように雪の花が舞う、深い林の中にいるシラキジもそれに紛れて捜しよ

うがない）に出てくるため、あえて言及しているが、日本にはいない鳥であり、仙境には鶴のほうがふさわしいので、このような言い方になったものである。

角倉素庵からも詩を贈られ、これにも「富士山の風景が好いとはいっても、早く帰ってきて京都の春の花を見て下さい」という同様の表現があり、羅山は徐福伝説や宋濂の「六月の雪」を踏まえた次韻詩を作っている。

他に、祖博なる人物（禪僧か）からの送別詩では、「帰ってきたら富士山の雪の話聞かせてもらい、炎天下の狭い我が家でせめて半日でものんびりしたいものだ」と述べているのに対し、「こちらは大忙しだ」と答えている。

また紀行文「東行日録」（『文集』巻二二）では、田子の浦を通った時、赤人の万葉集歌を思い起こし、富士山を詠んだ和歌は少なくないが、やはり赤人歌が抜群で、その景色を見ながら歌を口ずさめば言うことはない、と述べる。

三 駿河から見た富士山（慶長十七年前後）

駿府在住中、しばしば京都の知友と詩文のやりとりをしている。そのなかで富士山に言及する例がある。

呈惺窩先生并歌（惺窩先生に呈す并びに歌）（『文集』巻二、十六年）

方今在駿、而朝朝暮暮仰看富士山与雲不斉。僕何其幸哉。東西之遠遊如此矣。

……於山則見富士峰之秀出……於人則見先生、不亦快乎……「いくちよといわうところをするがなるふしのくすりをもとめまくほし」

（今私は駿府にいて、朝な夕な雲よりも高く聳える富士山を仰ぎ見えています。何と幸せなことでしょうか。東西に遠く旅するとはこのようなことなのです。

……（水、河、野それぞれの第一の名所を列挙し）山においては富士山の秀でた姿を見ること、……人においては先生にお会いすること、何とうれいことでしょうか……「いついつまでもお元気でお祈りする心は、ここ駿河の富士の名のとおり不死の薬を探し求めたいと思うほどです」

実景の富士と、『竹取物語』以来の富士に不死とを併せて描く。

答宗嗣叟（宗嗣叟に答ふ）（『文集』巻三、十七年）

忽迎春陽、牽稚松于三保、采嫩菜於廬原。温風吹土峯之雪、煙霞映淺間之桜。
……山部赤人詠富士、都良香記富士、古既有人、叟其無意乎

（いつのまにか新春を迎えて、三保の松原で子の日の松を引き、庵原で若菜を摘みました。春風が富士山の雪の上に吹き、霞が浅間神社の桜に映えています。……赤人が富士山を詠み、良香が「富士山記」を著したように、古くからこの山を詩文に描いた人はいます。ご老人もいかがですか）

「宗嗣」は近年その伝記が明らかになった儒者・蔵書家篠屋宗嗣（二五五六？～一六二五）。羅山は若い頃から交流があった。ここでも『万葉集』『本朝文粹』『富士山記』を収める」といった日本の古典が二人の共通の教養として言及される。

答祖博（祖博に答ふ）その二（『文集』巻三）（同じ頃か）

北則仰看富士山、六月雪花翻素霧

（北方を仰ぎ見ると、富士山が真夏の六月でも白い綿毛のような雪の花を降らせています）

先に引用した宋濂の詩の一句をそのまま用いて富士山を描いている。

四 『丙辰紀行』と石川文山詩

『丙辰紀行』は元和二年（一六一六）丙辰十一月に、江戸から京都への旅行を和文体で叙述したもの。名所や宿場ごとに歴史・伝説や現状を述べ、漢詩を詠んでいる。「富士山」はなかでも長文で（句読点や送り仮名を補う）、

富士山の名、ひとり我朝に鳴るのみならず、遠く中華まできこゆ。赤人が歌

は万葉にのせ、都良香が記は文粹に見へたり。徐福菓をたづねてこの山に

とゞまり是を蓬萊山と名づくる事は、義楚六帖にあらはし、「六月雪花翻素

霧、何所深林覓白鷗」といへるは、宋濂が曲にあらすや。加之（しかのみならず）、

羽客積流の此山に跡を残す事は、役処士がはじめて攀躋しより以来、

空海円珍岩石をきざみて仏軀を彫るもの、山上におほかり。白衣天女の形を

あらはし、浅間大神の跡を垂れます。誠に我が朝無双の名山なり。近代

叢林の詩僧、この山を題せし中に、「富士千仞雪峻嶒、幾度思登病未能、送

汝錫飛三伏裏、帰来分我一壺氷」といへるは信義堂なり。「大地撮来無寸土、

当空還見此山成、海濶纔浸半辺影、多少漁舟載雪行」といへるは乾峰なり。「絶

頂雪残春夏秋、暮煙一抹画眉修、吾疑上有望夫石、不耐閑愁独白頭」といへ

るは岩惟肖なり。「六月雲間積雪新、東遊未踏玉嶙峋、画師今有移山力、一

洗京塵（鹿を改める）困暑人」といへるは惺瑞岩也。「富士峰高宇宙間、崔

嵬豈独冠東関、唯応白日青天好、雪裡看山不識山」といへるは彦希世なり。

「富士耳聞身未遊、画図相對興（興を改める）悠々、東関千里吟鞍上、晴

雪趣人三五州」といへるは沅南江なり。「五須弥外有須弥、呼作士峰呼是誰、

六月雪飛寒徹骨、擘開芥子欲藏之」といへるは沢天隱なり。「莫言北関隔東関、

富士朝々如対顔、四海一家皆帝力、千秋白雪御前山」といへるは三横川なり。

「士峰秀出海之東、名在景濂詩句中、若把白鷗論白雪、扶桑六十一雕籠」と

いへるは九万里なり。「天台四万八千丈、若在吾邦立下風」といへるは瑾雪

嶺なり。工拙は具眼の人の知る事なれば、書きならべてをき侍るなり。其外

騷人墨客の詠じもらせるはあるまじきや。此比人の作れるとて、「青天忽

見素羅笠、檐中十五州」といふ句を聞はんべるぞめづらしきや。我輩の今

更口をひらかむ事は、人の涎を舐て事あたらしきやうなれど、さりとていは

ざらんも、懶墮のおそれあれば、聊申つゞけ侍る。かの「不与浮雲齊」とい

へるは此たかきにや。「嵌空太始雪」とあるは此雪にや。衆山之蒨蕪なるを
 するは、此山にのぼりての事にや。天下をすこしきに歩する人もあるべきに
 や。「蓮花は卑く、崆峒は薄し」といへるも。此山に対しての事にや。

と、都良香「富士山記」、『義楚六帖』（一〇世紀の中国の僧による百科事典）に
 見える徐福伝説、宋濂詩、役行者伝説等に触れた後、五山文学のなかで詠まれた
 富士山詩を一〇首列挙、「工拙は具眼の人の知る事なれば、書きならべてをき侍
 るなり」として評価を避けている。順に作者名と出典を挙げると、義堂周信（『空
 華集』巻四「病中苦熱贈昌諍游富士山」）・乾峰士曇（『乾峰和尚語録』巻四「富
 士山并序」）・惟肖得石（『東海瓊華集』「武衛扇面富士」）、「中華若木詩抄」にもあり）
 瑞岩龍惺（不明）、「翰林五鳳集」巻五十四・本朝名句部「扇面富士」）・希世靈彦（『村
 庵藁』上「扇面富士」）・南江宗沅（『漁庵小藁』「扇面富士」）・天隱龍沢（別集に
 見えず、『北斗集』「画富士峰」）・横川景三（『補庵京華統集』「応制詩三首（その
 一）富士山」）・万里集九（不明、後述する『士峰録』巻四には「読宋景濂富士山
 詩」の題で収める。なお、花園大学国際禅学研究所「電子達磨#2」所収『雪叟
 詩集』には後半二句が三益永因の作として収められている））・雪嶺永瑾（『梅溪稿』
 「富士峰図」）である。元和八年に完成した五山詩の集大成『翰林五鳳集』には、
 瑞岩のところ記したように、本朝名区部という日本の名所を詠んだ詩を集めた
 部門があり、富士山詩も多く見られるが、羅山はそれ以前に独力で五山詩の別集・
 総集からこれだけの作品を収集したことになる。
 「青天」云々の詩は作者不明、「不与浮雲齊」は「古詩十九首」その五（『文選』
 などに収める漢代の詩）の「上与浮雲齊」をもじり、「嵌空太始雪」は杜甫の「鉄
 堂峽」の「嵌空太始雪」、蓮花は「云々も杜甫「青陽峽」の「東笑蓮花卑、北知
 崆峒薄」を引いたものである。

最後に自作を載せる。

一山高出衆峯巔（他の山々からは飛び抜けて高い頂きを持ち）
 炎裡雪氷雲上煙（炎熱の夏にも雪や氷を保ち、雲の上まで煙を昇らせる）
 大古若同仁者樂（「仁者は山を樂しむ」という孔子の言葉に従って）
 蓬萊何必覓神仙（私も富士山を樂しめば、海外に蓬萊仙境を求める必要もな
 くなる）

『論語』の言葉を利用しているところは工夫があるが、他は常套表現である。
 これに対して奇抜な発想で知られるのが次の詩である。

富士山 石川丈山（『覆醬集』巻上⁽⁵⁾）

仙客來遊雲外巔（仙人が雲の上に聳える頂きにやってきたり）

神龍栖老洞中淵（その頂きにある深い池には古くから龍が住んでいたりする）

雪如紈素煙如柄（雪は真つ白な絹、立ち上る煙は柄のようだ）

白扇倒懸東海天（これは白扇を日本の空高くから吊り下げたものに違いない）

元和九年（一六二三）初めかあるいはその直前頃の作と推定される、富士山を
 詠む漢詩で最も著名なものである。前半は羅山同様、これまでの富士山伝説を踏
 まえた表現だが、第二句には羅山詩より神秘性が感じられる。眼目は後半二句で、
 扇子を天から吊り下げる、という比喻で富士山の形象を表現したもの。五山文学
 では扇面に描かれることも多かった富士山自体を扇面に喩える、という飛躍した
 発想が素晴らしい（注（一）前者論考でも述べた）。なお、これまで漢詩では詠ま
 れてこなかった噴煙を詠むことについては、和歌の影響かという指摘もある。⁽⁶⁾

この詩については丈山・羅山の往復書簡のなかで言及がある。丈山は「前日お
 伝えした富士山の詩は、口から出任せのものです。もし御批評頂ければ幸いです。
 本心をお隠しにならず、添削して頂きたく存じます」と述べ（『新編覆醬統集』
 卷一〇）、羅山は「前回お示しになった富士山の詩、最近の人びとの作品に比べ

ると見事なできばえです(原文「稍や奇巧を覚ゆ」)。昔の人は物を描く方法を知っていましたし、特にこの山は歴代の詩人たちがテーマとしたことが非常に多いものなので、他のものに比べると詩に描きにくいところを、このようにお作りになるとは素晴らしい。ご要望ですので朱筆で批評を書きますが、御作意を誤解しているかもしれませんのであしからず」と答えた(『文集』巻六)。

このように羅山も評価しているが、先に引いた『丙辰紀行』に言及されていた近年の人の作という「青天忽見素羅笠、檐中十五州」(七言と五言になっているので、後半に脱落があるか)は、扇子ならぬ笠に富士山を喩え、「青い空に忽然と白い薄絹を張った笠が姿を現した、その縁のなかに周囲の一五カ国がすっぽり収まる」と詠む(「素羅」は「そら(空)」との掛詞になっているか)。神聖かつ広大な富士山を、日用卑近の道具に見立てる、という点では共通性がある。これが丈山の作のヒントになった可能性もあるか。

なお、ここでいう「素羅笠」は南宋の詩人楊万里が朝顔(牽牛花)を詠んだ詩に見える語で、羅山の子鶯峰が「衣笠石記」『鶯峰文集』巻一四で「富士雪衣覆素羅笠」と述べているのが他の用例として唯一管見に入った。

五 江戸のランドマークとしての富士

寛永年間の羅山は、今後の幕府にとって必要な、和漢さまざまな文献の知識を集大成するような著作を手がけている。そのなかに富士山関係の記述もある。

『本朝神社考』の「富士山」では、都良香「富士山記」および「(富士浅間)縁起」を引いて浅間神社の由来を述べ、『吾妻鏡』によって人穴の伝説を、『義楚六帖』によって徐福の伝説を記している。「神社考詳節」はそのダイジェストだが、孝霊天皇五年に、琵琶湖と富士山が同時に出現したという別伝を加えている(『文集』巻二十五・孝霊天皇論に詳しい)。「本朝地理志略」(『文集』巻六一)でも都良香・徐福伝説のほか、宋濂詩にも触れる。

寛永二十年九月十六日に江戸を出発した時の紀行『癸未紀行』でも富士山を詠

む。二首とも掲げる。

海東仰見富岩巔(東海道で富士山の頂上を仰ぎ見ると)

三五州中煙景鮮(一五カ国のどこからでも靄のなかに鮮やかにその姿が浮かぶ)
嶺上織衣神女手(きつと山頂では神女の手によって衣を織られているのだ)

雲如錦繡雪如綿(錦の如き雲がかり真綿の如き雪が積もっているのだから)

第一首は丈山詩同様、後半二句が比喩表現、しかも第四句の「○○如○○如○○」という構成は丈山の第三句を模倣する。

富士峯高不可跂(富士山はあまりに高すぎて上まで見渡せないほどだが)

四望一覽衆山卑(逆に山頂からは周囲の山々が低いことが一覽できるだろう)

麓根遠遶豆相駿(麓は伊豆・相模・駿河にまで広がり)

地跡久伝倭笠支(名所として日本・インド・中国まで伝わっている)

秋雪詩成夢得眼(唐の詩人劉禹錫が詠んだ「秋雪」が目前にあり)

黛煙粧尽太真眉(楊貴妃の化粧し終わった眉のような煙がたなびく)

世間何物大於此(この世の中、これより大きな物はあるだろうか)

試把秋毫欲比之(私の貧しい筆力でどうにか何かに喩えてみたいものだが)

第二首は七言律詩である。第五・六句の比喩に工夫がある。劉禹錫(字を夢得という)の詩は長安の南にある終南山を詠んだ「終南秋雪」、楊貴妃(別称を太真)は白居易「長恨歌」などで歌われる絶世の美人である。第八句は、秋毫(秋に生える動物の毛)という微小な物と比べてみようか、というユーモラスな意味と、秋毫(その毛で作った筆)を揮って詩を作り、何かに例えてみよう、という謙遜の意味とが二重になったものである。

さらに、江戸に居を構えた大名との交流も盛んになり、その屋敷や庭、そこか

らの眺望を詩文に詠む、という機会も増えてくる。

佐久間親衛校尉別墅十景（佐久間実勝の別荘から見た風景、寛永十年作）のうち「士峰夏雪」（『詩集』巻九）

白雪高深士嶺頭（白雪が高く深く積もる富士山の頂上）

春過夏到不漸流（春が過ぎ夏が来ても溶けて流れて尽きることがない）

上天銀扇跳顛倒（天上から銀の扇が飛んできて逆さまに落ちたのか）

一柄風涼十五州（その一本で一五カ国に涼風を送っている）

後半二句では丈山詩の比喩をそのまま利用している。

多景楼記（浅草にあった堀田正盛の別荘の楼閣、寛永十六年作、『文集』巻一六）

環楼皆景也。……西顧、則天涯箱根照千里之月、雲間士峯含太始之雪。

（楼閣の周りは皆素晴らしい風景だ。……西のほうを振り返れば、空の彼方に箱根が遠く月に照らされ、雲間からは富士山の万年雪が見える）

おそらく同じ時に詠んだ詩では、「浪花相似たり初秋の雪、西嶺東呉一亭に入る」

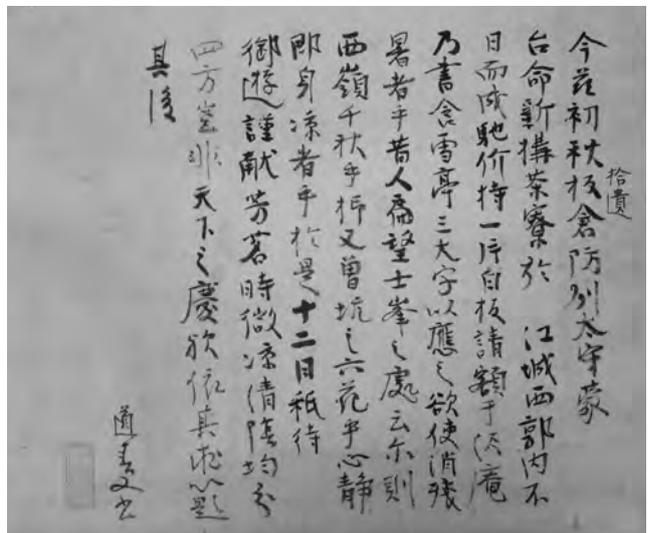
（巻九「己卯七月朔日赴堀田加賀守正盛江亭賦二絶」その一）とあり、西に見える富士山と、東に見える隅田川を往来する舟を描いている。これは杜甫の「絶句」

の「窓含西嶺千秋雪、門泊東呉万里船」を踏まえたもので、羅山周辺ではこの「西嶺」

を富士山の別称として用いる詩を多く作っているが、早く太田道灌が江戸城内に作った静勝軒や含雪亭という建物を詠む五山僧の詩に、同様の表現が見えている。

富士山の東に位置する江戸だからこそ使える表現として、注意すべきである。

同様の例が他にもある。板倉重宗が將軍の命で江戸の西側に茶室を建て、沢庵宗彭に依頼して「含雪亭」という扁額を揮毫してもらい、そこに將軍の御成があった。



林羅山白筆題含雪亭并跋

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵

た。それを記念して羅山に詩を求めたのに応じた「題含雪亭并跋（含雪亭に題す並びに跋）」（同年作、『詩集』巻九）にも「昔人士峯を望む処に扁して爾云ふときは西嶺千秋か」とあって、道灌（昔人）に倣った命名であること、それが杜甫の詩を踏まえたものであることを述べる。

他にも、次のような例

がある。

阿部豊州太守別業記并詩（浅草にあった阿部忠秋の別荘、同年作、同）
今此別墅在浅草河辺……对士峯之白鷗

（今この別荘は浅草川のほとりにあり……富士山のシラキジのような雪が見える）

宋濂詩の表現を用いている。

さらに、上野の丘にあった自らの塾弘文院からの眺望を詠んだものもある。

武州州学十二景（寛永十年頃作）のうち「士峯晴雪」（『詩集』巻九）

東国雲間建雪宮（東国の雲の間に雪の宮殿が建てられた）

仰瞻士嶽聳蒼穹（その富士山が青空にそびえ立つのを仰ぎ見る）

煙風万仞六花落（煙と霧のなかにそそり立ち、雪を降らせる）
盛夏蔭涼桑域中（真夏でもこの日本に涼しさをもたらしてくれる）

「武州州学十二景」の全体は、上野東照宮・江戸城・不忍池・下谷・湯島天神・港の船舶・武蔵野・浅草・筑波山・隅田川・富士山・房総の山々となっており、遠望としては北の筑波、東の房総、南の富士山が入っている。⁽⁸⁾

おわりに

そもそも京都生まれの羅山において、交流のあった文化人たち同様、富士山は和歌や五山文学等、過去の文学作品や絵画によって得た知識のみの存在であった。それを見出す機会が初めて訪れた慶長十二年の送別詩のやりとりには恰好の題材であったらう。

駿河滞在中は毎日のように目にする存在となり、実感を以て知人にその素晴らしさを伝えるとともに、家康の蔵書という当時日本一の図書館を自由に使える立場となったことを利用して、日本古典における富士山についても十分な知識を得たことであろう。それらがその後の著作に生かされている。なお、言及しなかったが、京都の公家とも、時々漢詩のやりとりをしていて、そこで富士山が話題になることがあったり、画賛詩を依頼されたりしたこともあった。

江戸定住以降は、大名たちの庭園の借景、あるいは「瀟湘八景」を元祖とする、八・十二といった数字で特定の場所からの眺望をセットにして、その命名と詠詩とを依頼されることがあり、その過程で富士山が江戸のランドマークとしての地位を確立していったものであろう。

なお、かつて羅山の門人で、羅山が京都を離れた後は藤原惺窩に師事した菅得庵（一五八一～一六二八）が寛永元年に編んだ『士峰録』という本がある。⁽⁹⁾ 全六巻で、第一巻は勅撰集その他の和歌、第二巻は『詞林采葉集』の富士山の部分、『古今和歌集』仮名序、『竹取物語』全文、第三巻は都良香「富士山記」および羅山・

得庵・惺窩の詩文、第四巻は五山僧の詩、第五巻は『吾妻鏡』の関連記事、第六巻は中国文献に見える記事や来日した中国人の詩文を収める。第四巻に五山文学の作品があることは、注(1)論考の時には気づかず、参照していなかった。先述のように、現在翻刻で見られる万里集九の『梅花無尺蔵』（五山文学新集および続群書類従）にはない作品が『丙辰紀行』と本書の両方に収められていることは、この時期の羅山周辺における五山文学受容を考える上でも重要な文献であることを示唆するものと言えよう。

このように羅山は、前代からの文学的遺産を引き継ぎつつも、新たに生まれた江戸という政治・文化の中心地において、いち早く富士山の文化的な意味付けを行った先駆者として位置づけられるだろう。

註

(1) 堀川貴司「漢詩文に描かれた富士山―五山文学を中心に―」（山梨県富士山総合学術調査研究委員会編『富士山 山梨県富士山総合学術調査研究報告書2』、二〇一六年）、およびその改稿「五山文学における富士山の表象」（中国社会科学院歴史研究所・日本東方学会・黄河文明伝承与現代文明建設河南省協同创新中心編『第九届中日学者中国古代史論壇文集』河南大学出版社、二〇一八年）で概観した。前者資料編には五山における作品を管見の範囲で網羅した。

(2) 伝記事項は、主に鈴木健一『林羅山年譜稿』（ベリかん社、一九九九年）を参照した。

(3) 林羅山の詩文は『林羅山文集』・『同詩集』（ベリかん社、一九七九年復刊）に、紀行文『丙辰紀行』『癸未紀行』は『紀行日本漢詩』一（汲古書院、一九九一年）所収影印に、『本朝神社考』『神社考詳節』は『神道大系』論説篇二〇（藤原惺窩・林羅山）（神道大系編纂会、一九八八年）所収翻刻による。

(4) 長坂成行『篠屋宗禰とその周縁』（汲古書院、二〇一七年）。羅山との交流も詳細に述べられている。

(5) 石川丈山『覆醬集』『新編覆醬続集』は『詩集日本漢詩』一（汲古書院、一九八七年）所収影印により、解釈等は上野洋三注『石川丈山 元政』（江戸詩人選集）一、岩波書店、一九九一年）を参照した。

- (6) 久保田淳『富士山の文学』（文春新書、二〇〇四年、改訂版角川ソフィア文庫、二〇一三年）。
- (7) 池澤一郎「江戸漢詩における富士山詠の展開」（『江戸文人論―大田南畝を中心に―』汲古書院、二〇〇〇年）に太田道灌のことも含めて詳しい指摘がある。
- (8) 慶安元年には狩野派による絵巻が作られ、現在江戸東京博物館所蔵。門脇むつみ「林羅山の題画文学と美術史―武州州学十二景図巻―跋を読む」（『国文学解釈と鑑賞』七五―八二〇一〇年八月）参照。また、富士と筑波とをセットとする風景の型については、井田太郎「富士筑波という型の成立と展開」（『国華』一三一五、二〇〇五・五）や人間文化研究機構連携展示図録『都市を描く―京都と江戸―』（国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館、二〇一二年）に詳しい。
- (9) 延宝六年（一六七八）一〇月菅原由益および年記のないその弟梅所土師洞雲の跋文があり、校訂刊行について触れるので、その頃の刊行と見られる。卷一末に「二条新町書林吉野屋宗兵衛」の刊記がある。国立国会図書館他の所蔵があり、信州大学附属図書館の「近世日本山岳関係データベース」によって卷二までの画像が閲覧できる。

【付記】 本稿は、二〇一八年一〇月八日（月）山梨県立文学館において開催された山梨県富士山総合学術調査研究会文学部会研究会における口頭発表に基づき加筆したものである。席上有益なご指摘を賜った部会メンバーの方々に感謝申し上げます。

富士北麓地域の近代俳句の一面 — 高浜虚子の山中湖畔滞在をめぐって —

高室 有子

はじめに

高浜虚子（一八七四～一九五九年）は、明治後半から大正・昭和にかけて活躍した近代俳句史を代表する俳人である。富士北麓地域とは、六十代を過ぎていた昭和十二年（一九三七）から最晩年の昭和三十二年（一九五七）にかけて、深い結びつきが生まれた。ほぼ毎年、一時中断した年はあるものの、夏から初秋の季節を山中湖畔に滞在したのである。この間、富士山麓の自然と山荘での生活から題材を得た多くの俳句や随筆を発表し、同時に、地元富士吉田や山中の俳人たちと、句会を通じての交友をもった。その関係は、虚子と共に訪れた「ホトトギス」の中心俳人たちへも広がり、深川正一郎、富安風生らを指導者と仰ぐ句会がいくつか生まれ、その活動は虚子歿後も続いた。虚子の来訪と滞在を契機として、この地域における近代俳句の地盤が築かれたと言える。

本稿ではまず、虚子来訪前後の富士北麓地域の俳句界の状況を概観し、次に山中湖畔滞在中の虚子の動向、地域の俳人たちとの接点を辿ってみたい。

一 虚子の来訪以前の岳麓俳壇 — 明治から昭和初期にかけて —

近世広く行われた俳文芸は、本県においても他の地方俳壇と同様、宗匠と呼ばれる指導者のもとに農民・商人層を中心とする愛好者たちが集まり、日常生活に密着して行われていた。明治の時代を迎えると、それまでの流れを「旧派」「月並」と批判した正岡子規の提唱する俳句革新運動、所謂新派と称される運動がおこり、明治三十年代から山梨県にも入ってくる。

そのさきがけとしてあげられるのが、明治三十三年（一九〇〇）に谷村（都留市）

で創設された新派の句会「白雛会」であろう。「ホトトギス」第三巻第九号（一九〇〇年七月）の各地句会報欄には、会の創設を堀内柳南が知らせる次の記述がある。

●白雛会（甲斐谷村）

甲斐の地月並者流多く未だ嘗て新派俳句を聞かず 爰に白雛会を起して新派の先鞭をつけんとす即ち彼岸中日桂川の畔、柳南舎に其初声を挙げたりき

（堀内柳南）

この記述に続いて「虎田」「はら」「柳南」三名の俳句が一句ずつ三句、掲載されている。

白雛会の中心的な存在と目されるのが堀内柳南である。柳南は秋田村（北杜市長坂町）出身で、当時は谷村小学校で教鞭をとっていた。県内各地の小学校に勤務するかたわら、同世代の青年たちと図り、子規の唱える俳句と短歌の革新運動を広める活動を進めていた。

「白雛会」が発足した翌年の明治三十四年（一九〇一）、子規晩年の門弟であった新免一五坊（岡山県生まれ）が加わった。一五坊（一八七九～一九四一年）は岡山県の生まれ、本名睦之介。十九歳で根岸の正岡子規庵を訪ね入門、子規を囲む句会に参加した。医学を志していた一五坊は、明治三十四年、南都留郡明見村（富士吉田市）の永島医院へ移り住み、以後四年の間に谷村、忍野と、富士北麓の地域を移りながら、柳南たちと合流して文学活動にいそしんだ。⁽¹⁾

明治三十五年（一九〇二）八月、柳南らと図り甲府市で「山梨文学大会」を開催、明治三十七年（一九〇四）年八月には雑誌「白雛」創刊の発起人の一人となって

いる。この間の一五坊のエピソードとして、桂川でとれた山女を病床の子規に贈ったことが知られている。子規は当時、新聞「日本」に連載中の「病牀六尺」に「おくられしものくさぐさ」として次の長歌を発表して、一五坊の好意に応えた。

やまめ三尾は甲州の一五坊より

なまよみの かひのやまめは ぬばたまの 夜ぶりのあみに 三つ入りぬ

その三つみなを わにおくりこし

このように当時、明治の新しい文芸運動がいち早く岳麓の地に芽吹こうとしていた。そのグループの中には、柳南や一五坊のほか、後に飯田蛇笏の「雲母」に加わる古屋夢拙、伊藤左千夫の「アララギ」に加わっていく神奈桃村らがあり、彼らは俳句と短歌というジャンルを横断して活動の範囲を広げ、その後の山梨における文芸活動を担っていった。

しかし、一五坊は明治三十八年に山梨を去り、以後、文学史から姿を消す。柳南も谷村を離れ、谷村、明見の地域に白雛会を継承する俳人や結社の流れを追うことは出来なくなり、その後の富士北麓地域の俳句界の様相を詳らかにすることは難しい。少し時を経た昭和初年の頃の様子を推測する手がかりとなる一文が、雑誌『都留公論』第六号（一九六一年六月、都留公論社）巻末掲載の鈴木芦洲「岳麓俳壇史2 ―岳麓俳句角力協会の頃―」である。少し長いが引用しておきたい。

昭和初期の岳麓俳壇は所謂蕉風俳句が盛んであつて、その指導者に三人の宗匠を揚げる事が出来る。

神岳窓三籟、珠彩庵綾雪、珠径庵欣来

此の内、神岳窓、珠径庵の二人は既に他界してしまつたが一人、珠彩庵勝侯綾雪翁は今なほ老の身を静かに養つて明見の里に籠っている。

（中略）

句会は、触目、折句、冠付け、角力 即興、互選と色々句作の方法が持ち出され会は四時間から五時間に及ぶ事が度々あつた。選は殆んど宗匠の選にして、入選三句、秀句五句、佳句十句が選ばれ入選三句には選者の選評がなされ、賞品が贈られた。

昭和三年頃岳麓俳句角力協会が生れ、広く募集して毎月発表誌も出し年経るにつれ北不二吟社（旧新屋敷今の曙町）白糸吟社（上暮地）等も生れて愈々盛んになつた。

ここで芦洲は、「昭和初期の岳麓俳壇」の中心を芭蕉の俳風を継ぐという意の「蕉風俳句」として紹介しているが、これは、前述した柳南や一五坊らの新派俳句運動の立場から見ると対極の、「旧派」「月並」と呼ばれた一派となる。「月並俳諧」は、様々な趣向を取り入れた句会で、宗匠の選に入つて賞品や景品を獲得することを目指して競い合うのがその特徴で、芦洲の紹介する句会の内容に一致する。

つまり、ここには前述の一五坊や柳南らの新派俳句運動の反映は見られず、むしろ近世以来、この土地で行われてきた宗匠たちの俳諧の伝統が、昭和の初年にも根強く継承されていた様子がうかがわれる。「岳麓俳句角力協会」という団体や、地域の句会（新屋敷は富士吉田市下吉田、上暮地も富士吉田上暮地）が生まれていたのも、その一端と言える。

ところで、「岳麓俳壇史2」に先立つ「岳麓俳壇史1」は、『都留公論』創刊号（一九五九年一月、都留公論社）に「概観的展望」と副題をそえ、渡辺青楓が昭和初期の岳麓の各俳句会の状況を紹介しているので、概略を以下に整理しておきたい。補足として、『富士吉田市史』（行政編・下巻）掲載の記述も加えた。²⁾主に句会の名称とその指導者、そこに参加していた北麓地域の俳人たちの順で示す。

○「ホトトギス」投稿者 高浜虚子、柏崎夢香（虚子門、「山彦」主宰）門。

柏木緑節・柏木白雨の父子

緑節は昭和六年頃、白雨は昭和十二年から虚子の「ホトトギス」へ投句。緑節は昭和十三年、虚子門下の柏崎夢香の「山彦」へも入会。

○大富士会 — 指導は伊豆の古見豆人（「大富士」主宰）。昭和九年「大富士会」吉田支部として発足。

住吉宵雨、渡辺騷人、浅間柳葉、森田游水他。

のち、渡辺竹童、渡辺七星、小川貝人、加々美鏡水、濁川自足他。

○新蕎麦会 — 指導は高浜虚子、のち深川正二郎（虚子門、「冬扇」主宰）。昭和十五年発足。

宮下傳奇、柏木緑節、柏木白雨、広瀬芦松、広瀬香葉、森田游水、渡辺騷人。

のち、林頼二、横田檜底道、浅間柳葉、さらに、戦中参加として勝俣泰亨、広瀬海星、刑部たけみ、山本琴嶺、滝藤啓子、宮下れい香、桑原機月。

○月の江会 指導は深川正一郎、富安風生（虚子門、「若葉」主宰）。昭和二十二年発足。

刑部たけみ、渡辺青楓、山本琴嶺、田辺高草、白須汀水、荒井窓風、渡辺機染、

高橋吉隆、水越絹児、宮野絹風、奥脇絹恵、柏木去孔、宮下麓生、宮下時雨、

浅井泰太郎、千葉光春等。

これに新蕎麦会・富士桜会俳人が合流。鈴木芦洲、刑部青柿、前田琦鳥ら。

○湖明見会 指導は伊藤柏翠（虚子門、「花鳥」主宰）。

勝俣泰亨、勝俣のぼる、広瀬芦松。

○大明見会 指導は柏崎夢香。

桑原機月、柏木白雨ほか。

○富士桜会 柏木白雨がおこす。

以上だが、青楓が本稿を執筆した昭和三十四年当時には、「月の江会」を除くこれらの句会は小規模となっていた由である。続いて以下は、『富士吉田市史』（行

政編・下巻）より抽出。

○岳麓冬扇会 指導は深川正一郎。

女性のみの句会。加藤晴子ほか。

○山梨若葉会 指導は富安風生、加倉井秋。昭和三十二年発足。

前記「月の江会」を発展的解消し改名。山本琴嶺ほか。

○岳麓ホトトギス会 指導は深川正二郎、伊藤柏翠、高浜虚子、高浜年尾ら。昭和十八年小明見青年団の「小明見俳句会」として発足。

「新蕎麦会」にも流れを通じ、昭和二十八年、改名。勝俣泰亨ほか。「小明見俳句会」と「湖明見会」が一致するものかどうか不明。

このように、虚子の系統、「ホトトギス」派によって、この地域の句会が広がっていた様子がわかる。複数の句会に横断して在籍している俳人も多い。また青楓は、「この岳麓に、所謂、月並と称する俳句が（特に吉田に於て）影の薄くなつたのは、割合最近であるらしい」と述べ、「それは、現役？ の人達の中にも、この門を経た人が少なからずあるからである」と記している。同じ意味のことは、「岳麓俳壇史2」で芦洲も、昭和初期の旧派の三人の宗匠たちの名を並べたあとで、次のように記述している。

当時の句会によく顔を見せ盛んに句を吐いた人にして現岳麓俳壇に於て尚活躍している人の内先づ第一に宮下伝奇（旧竜虎）氏をあげなければならぬ。次にあげられる人に森田游水（旧箋来）、渡辺騷人（旧綾風）、浅間柳葉、の三人がある。当時の句会は中年以上の人が多くその中に斯かる青年が加わっていたのであるが、……（以下略）

宮下伝奇、森田游水、渡辺騷人、浅間柳葉ともに、昭和十五年に虚子を迎えて

発足する「新蕎麦会」の主要なメンバーである。

以上をまとめると、富士北麓地域においては、明治三十年代半ば、新免一五坊や堀内柳南ら外部から訪れた人々による新派の俳句運動が一時おこったが、定着するまでに至らず、しばらくは所謂「旧派」「月並」の宗匠たちによる流れが続いた。

昭和六年から「ホトトギス」に投句していた柏木緑節・白雨父子もいたが、それは「当時新派とた、かれつゝも、その孤高を貫いて」（『岳麓俳壇史1』）と言われるような少数派であった。実質的に「ホトトギス」の流れが定着したのは、「新蕎麦会」発足の昭和十五年以降と言えるが、その後の「ホトトギス」派のめざましい浸透の背景には、旧来この地に根づいていた月並俳諧の地盤があったことが大きかったと思われる。青年時代に月並句会で鍛えられた人々が、虚子たち「ホトトギス」俳人たちを速やかに受け入れていったことが、その後の岳麓俳壇の広がりを作った契機であったと考えられる。

二 虚子の山中湖畔の滞在 — 戦前 —

虚子年譜によると、富士北麓地域への最初の訪問は、大正六年（一九一七）。『国民新聞』が「富士を背景とせる避暑地的遊覧地」を募集し、一位に選ばれた河口湖と、同じ山梨県内の日野春・増富について記事を書くことを依頼されたためであった。この時は境川村（笛吹市）在住の飯田蛇笏が案内役をつとめ、虚子との旅の思い出を随想に記している。³この時虚子が残した句に「吉田町」の前書きを付けた

富士を真向に見て夕着く駅涼し

の一句が残っている。富士を眼前にした富士吉田の町の印象が「真向に見て」という語に端的に表されている。

それから二十年を経た昭和十二年（一九三七）以降の山中湖畔滞在については、

これを迎えた明見の柏木白雨や、富士山麓の文芸史を追った内藤成雄の著述などに詳しい。⁴ここでは、これを参考にしつつ、「ホトトギス」掲載の虚子の随筆と俳句作品の記事を中心にその足跡を追ってみる。虚子は、当時「句日記」と称して日々の句作を「ホトトギス」に連載しており、日付と共に滞在場所などを明らかにする前書きが付されている。

まず、山中湖畔滞在が始まった頃のことを虚子自身が記した随想が三つあげられる。

- ① 「選集を選びしよりの山の秋」（『ホトトギス』一九四三年一〇月一日）
- ② 「下り山往来」（『ホトトギス』一九四〇年一〇月一日掲載の特集「俳諧新涼」の一篇）
- ③ 「楊柳」（同誌掲載）

この内①は「私が富士山麓の山中湖畔に行きはじめてのは昭和十二年の初秋からであった。」の一文に始まり、この随筆発表時の昭和十八年秋までの経過が記されている。年次で追うと次のとおりである。

昭和十二年（一九三七）

八月、山中湖畔、ニューグランドホテル滞在。『ホトトギス雑詠選集』春の部の選を行う。

昭和十三年（一九三八）

八月、改造社より『ホトトギス雑詠選集』春の部刊行。山中湖畔旭日丘に、男爵新田義美夫妻（三女宵子夫妻）の別荘「霞霧山荘」があり、隣の一間に逗留。

『ホトトギス雑詠選集』夏の部の選を行う。

昭和十四年（一九三九）

八月下旬、山中ホテル滞在、『ホトトギス雑詠選集』夏の部の選を行う。

昭和十五年（一九四〇）

一月、『ホトトギス雑詠選集』夏の部刊行。

山中湖畔下り山に山荘を作る。『ホトトギス雑詠選集』秋の部選を行う。

七月十二日、宮下善龍が電気工事に来たことをきっかけに句会が開かれ「新蕎麦会」と虚子が命名。宮下善龍には請われて「伝奇」と俳号を命名。句会には柏木緑節・白雨父子、森田遊水、渡辺騒人らが参加。

七月二十六日、自動車で御殿場に降り鎌倉へ帰宅。八月二日、二度目の山中湖。

八月八日、鎌倉へ帰る。十八日、箱根経由で三度目の山中湖。二十四日、赤富士を見た朝、鎌倉へ帰る。二十七日、四度目の山中湖。二十九日帰宅。

昭和十六年（一九四一）

八月、『ホトトギス雑詠選集』秋の部刊行。山中湖山荘滞在し、冬の部の選。

その後御殿場へ下り、箱根へ。

昭和十七年（一九四二）

八月、山中湖畔滞在。『ホトトギス雑詠選集』冬の部の選を完了。冬、山荘が陸軍演習の照明弾によって焼失。

昭和十八年（一九四三）

六月、『ホトトギス雑詠選集』冬の部刊行。

八月、焼失した山荘の隣地の小屋を修復して滞在。新蕎麦会で句碑建立の発議がでて「選集を選びしよりの山の秋」の句を詠む。

昭和十九年（一九四四）

八月、山中湖山荘滞在。五日、「選集を」句碑の除幕式。

すなわち、虚子の山中湖畔滞在の始まりは、『ホトトギス雑詠選集』編集の仕事のためであった。『ホトトギス雑詠選集』は、主宰誌「ホトトギス」の「雑詠」欄（全国から投稿される俳句を虚子が選を行い、優秀作から順に掲載する）の過去の作品を再度選抜し、春夏秋冬の季題別に分類して刊行したアンソロジー。

山中湖畔は避暑を兼ねつつ集中して行う仕事の適地として選んだ地だった。鎌倉の自宅からは虚子がよく滞在した箱根、そこから籠坂峠を越えた先が山中湖畔の下り山別荘地であったという交通移動の利便性もあったと思われる。当時、

富士山麓は観光地としての開発が進み、富士箱根国立公園が指定され、山中湖南岸の旭日丘、下り山は別荘地として開かれていた。始めはホテルでの滞在だった虚子が、昭和十五年に下り山に山荘を持ったのも、継続した滞在を見据えてのことだったろう。

前掲の略年譜、昭和十五年の項には特に頻繁な往復の様子を記したが、これは同年七月二十二日から八月末日の間を日誌風に記録した随筆②「下り山往来」から抄出した。これによると、虚子は鎌倉の自宅から、御殿場経由で山中湖畔の山荘へ計四回往復した。鎌倉―御殿場は鉄道を用い、御殿場からは車を利用した。山中湖畔の山荘には、虚子の妻や長女真下真砂子、旭日丘に山荘「霞霧山荘」を持つ新田義美男爵・宵子（三女）夫妻、長男高浜年尾、次女星野立子一家らが入れ替わり立ち替わり訪れている。

虚子の日常は、『ホトトギス雑詠選集』秋の部の選と散歩であったが、旭日丘に山荘のある「ホトトギス」俳人の赤星水竹居（虎杖荘をもつ）や佐藤肋骨、徳富蘇峰、画家の近藤浩一路らとも往来している。

七月二十二日の項には、山荘についての描写がある。

山中の下り山の這入口にすぐ藁屋が目に入る。そこが私達の這入る家なのである。

（中略）

富士山が現はな姿を西側の軒一杯にはみ出させてをり、湖水も全面を東側の廊下の下に見せてをる。

この山荘は二年後に不慮の事故で焼失するが、虚子は改めて翌年昭和十八年夏、隣接地に小屋を修復して滞在を始めた。その時の心境を「大きな富士山が目前に現れて来ること、高原の爽やかさが忘れられないためであった。」（「選集を

選みしよりの山の秋」と短く記したところに、晩年を迎えつつある虚子にこの地が慕わしい場所になっていったことをうかがわせる。そこにはまた、対人間の交友も生まれていた。昭和十五年、宮下善竜の訪問をきっかけに、下吉田・山中の俳人たちが虚子の指導を仰ぐ句会「新蕎麦会」が発足している。やがて人々の発意で山荘の傍らに建てられた句碑に虚子が刻んだ句は、

選集を選みしよりの山の秋

六年がかりで行った『ホトトギス雑詠選集』の仕事を振り返り、秋を迎えた山中の風光に心寄せた一句となっている。

もう一つの随筆③「楊柳」は、山中湖畔別荘地「下り山」周辺の植生の特性を語り、一本の楊柳の太木について口述したもの。富士の溶岩流の地層では樹木の生育が難しいため別荘地には庭木というものがほとんどなく、下り山では自生する落葉松がまばらにあるばかりだが、その中にある樹齢六百年とも言われる楊柳の太木に関心を寄せている。

富士山麓の雷霆の轟く中に、又、雪解の流れが本流をなして傾斜を下るそばに、静かにその生を保つて今日まで来たものであらう。其他春霞、秋霧、夏の霖雨、冬の積雪、その雪が解けて一時に高山植物の花が咲き、落葉松林に雑多の小鳥が集つて、それから日本全国に散らばるといふ、其沢山の小鳥の往来、又、夏の末からりんりと響きわたつてある虫の音、其等の中に、独り淋しく生を続けて来たものであらう。

これを書いた時、虚子は山荘を建てたばかりで、滞在も夏から初秋の頃に限られていた。土地の人からの見聞もあっただろうが、岳麓の自然を遠い歳月の彼方に把握する虚子の観察力と洞察力に注目したい。虚子にとってこの地は、こうし

た大きな自然の運行、生命の営みへと思いを馳せる場所でもあったと思われる。虚子は山荘を「老柳山荘」また「楊柳荘」と名付けて親しんだ。

三 戦後の虚子と岳麓地域の関わり

虚子の山荘滞在は、昭和二十年の太平洋戦争終戦の年は記録がない。昭和二十一年（一九四六）に早くも全国各地で「ホトトギス」六百号を記念する俳句会が開催され、文芸への熱意が戦後の各地に興っていたことをうかがわせるが、山梨の地でも下部と下吉田で俳句大会が開催され、虚子の来甲が再開する。以下、虚子の逝去までの虚子の動向を追ってみる。

昭和二十一年（一九四六）

八月三十日、下部温泉湯元ホテルに入り、ホトトギス六百号記念俳句会に出席。

八月三十一日、御坂峠を越えて産屋ヶ崎トンネルで小説家の中村星湖に会い芭蕉の「雲霧の」句碑を見る。明見の柏木白雨宅一泊。

九月一日、下吉田の月江寺で山梨ホトトギス会主催六百号記念山梨俳句会開催。

一三四名出席。深川正一郎の大会記（「ホトトギス」一九四七年七月）によると、虚子は新蕎麦会の発足を振り返って挨拶。また、赤星水竹居の旭日丘の虎杖荘を受け継いだ深川正一郎が、新蕎麦会を指導するようになったと語る。

九月二日、山中湖畔山荘に立ち寄つた後、そのまま帰京。深川の随筆「吉田文庫」（「ホトトギス」第六百号、一九四六年十二月）によると、この時の句会終了後、

月江寺駅近くに地元俳人達が設けた文庫（月江寺駅手前左側にあり、隣が旅館松風荘）に虚子と深川が宿泊。翌日虚子が「吉田文庫」と命名、用意された額に揮毫したという。

昭和二十二年（一九四七） 関連記事なし。

昭和二十三年（一九四八）

十一月、下部温泉湯元ホテル、「裸子」句碑の除幕式に出席後、明見の柏木白

雨宅泊。この年から柏木白雨依頼により富安風生指導の「月の江句会」発足。

昭和二十四年（一九四九）

七月二十七日、吉田の俳人たちが、鎌倉の虚子宅を訪問。

昭和二十五年（一九五〇） 関連記事なし。

昭和二十六年（一九五一）

七月二十六日～八月二日、山中湖畔山荘に七年ぶりに滞在。以後再び、毎夏を

山荘に訪れる。この年から、夏季「ホトトギス」若手の勉強句会を山荘で開催。

東京・京都などから多数の参加者が集まり、虚子も多作する。七月二十九日には、

新蕎麦会有志合同稽古会。

八月一日、吉田連中、山中連中と句会。

八月二日午後、自動車にて鎌倉へ帰る。

昭和二十七年（一九五二）

七月二十五日、富士吉田市月江寺にて山梨ほととぎす俳句大会に出席。虚子は

か九二名。その後、八月一日まで山中湖山荘滞在。

二十九日、河口湖畔に中村星湖を訪う。

昭和二十八年（一九五三）

七月二十一日より二十七日まで、山荘に滞在、句謡会、草樹会、新蕎麦会、稽

古会に出席、多作。

昭和二十九年（一九五四） 関連記事なし。

昭和三十年（一九五五） 関連記事なし。

昭和三十一年（一九五六）

七月二十七日～八月二日。山荘滞在。句謡会、草樹会、上海すみれ会、地元句

会に出席。

昭和三十二年（一九五七） 最後の岳麓滞在か。

七月二十九日～八月四日、地元句会、草笛会、句謡会、草樹会、上海すみれ会、

稽古会に出席。

昭和三十三年（一九五八）

四月十三日、「裸子」百号記念大会出席のため身延訪問。

とある停車場富士の裾野で竹の秋

対岸の菜の花富士の大河かな

以降、「句日記」に「富士」の語句が詠み込まれた句、山中山荘訪問・滞在の

記述はなし。

昭和三十四年（一九五九）

四月一日、脳出血で倒れる。八日、死去。八十五歳。

昭和二十一年の「ホトトギス」六百号記念の俳句大会、二十三年の来訪をはさ



高浜虚子位牌

富士吉田市明見地区の寺院に祀られる。同寺では、虚子の33回忌にあたる平成3年（1991）頃まで、忌日に合わせて、句会と法要が営まれていた。



西方寺（富士吉田市小見見）

んで、昭和二十六年には山中湖山荘の滞在が再開される。戦後の山荘滞在中では、右に見えるとおりに盛んに句会が催される。これについては、虚子が「山廬」（「ホトトギス」一九五三年一月）と題した短文に、経緯が記されている。これによると、戦中の混乱で山中湖の山荘は（文中、虚子は「山廬」と呼ぶ）、雨露に朽ちていることと思いついていた。戦後、「ホトトギス」の若い俳人たちの会、「新人会」（東京）と「春菜会」（京都）から、虚子とその娘の俳人星野立子を囲む合同句会の申し入れがあり、夏期の勉強会として鎌倉で行った。翌年は暑さを避けて、山中湖畔の山荘で開くこととし、近所の別荘を宿泊地として、集合した。やがて勉強会の話が広まり、さらに他の句会（句謡会、草樹会、地元の句会など）が加わるようになった、という。

つまり、戦後の山荘滞在中は、「避暑の為めではなくて、若い諸君等のお相手をして俳句会をするため」といい、句会が終わるとすぐに山を下りると述べている。本稿はじめに記した、戦後の富士北麓地域の「ホトトギス」系の句会の創設と広がり、こうした東京ほか県外から訪れる「ホトトギス」俳人たちとの切磋琢磨の内に醸成されたものとも考えられるだろう。

最後に、本稿では詳細は記せないが、戦後の岳麓滞在中に作られた虚子の句は膨大な数にのぼる。昭和二十六年は八十句、昭和二十七年六十句、昭和二十八年七十一句、昭和三十一年七十四句、昭和三十二年五十四句を数える。戦前の山荘滞在中の作として拾えるのは年に十句前後であったのと比較すると、格段の差である。一方その内容・句風に、戦前・戦後で大きな違いは見出すことは出来ない。たとえば、

目のあたり夏雲起る夏の荘
（昭和十二年）

高原や神鳴る坂にバス迅し
（昭和十五年）

暗やみの中に富士あり羽蟻の夜
（同年）

羽すこし欠けて壁に居山の蝶
（昭和十九年）

珍しき夏の蝶とぶ山の庵
（昭和二十六年）

老柳はなきが如くにありにけり
（昭和二十七年）

夏草にわれ立つ富士の裾野かな
（昭和二十八年）

一貫して、泰然と自然に向き合う作者の姿勢が見出されるだろう。作句の素材には虚子が親しんできた岳麓の自然風物である落葉松、柳、虎杖、芒、山葡萄などの植物や、山の蝶、蟻、時鳥、郭公などの鳥や虫、また稲妻や霧などの気象現象、さらに山荘の暮らした「浴衣干す」などが季題として繰り返し詠まれている。句会での作なので、「題詠」としてこれらの季題が出されたことも推測されるが、それらを切り取る虚子の目は、実景をそのままメモにとつていくような、気負いのない姿勢が感じられる。

最晩年、最後の山中滞在中の年の昭和三十二年の作に次の句がある。

こゝに小さき避暑の山廬のある故に

山ほとゝぎす百句虎杖の花百句

富士の自然と人と、虚子との関わりを象徴する作と思われる。

註

(1) 新免一五坊の足跡については、内藤成雄『富士北麓と文人たち』（一九八六年、ぎょうせい）に詳しい。

(2) 『富士吉田市史』（行政編・下巻）（富士吉田市役所、一九七九年）第四章「芸術・芸能」のうち第七節「文学」。

(3) 飯田蛇笏「高浜虚子先生を偲ぶ」（『俳句』昭和三四年五月（虚子追悼号））。

(4) 柏木白雨「やまなしの文芸戦後史」（『岳ろくの俳句』（山梨日日新聞）一九七二年五月二一日（六月二七日））。

二つの古道とその変遷 — ツナ坂越と籠坂越 —

野村 晋作

はじめに

標高一〇〇〇メートルを越える高所に位置する山中湖村（山梨県）は、古くから甲斐・相模・駿河の三国が交わる交通の要衝にあり、周囲を山々に囲まれたいわば山岳村落としての歴史を歩んできた。そのため、外部との交通には峠越えを必要とすることから、「峠」は山中湖村において切り離すことのできない地形といえる。

外界を隔てる峰々の鞍部に作られた（鞍部を活かした）「峠」は、そこを利用しようとする人間の意思を反映し、「峠」を越えた人の交流、物資の移動、文化・宗教・病気等の伝播を促進した。ゆえに「峠」は村落の成立・展開にも大きく影響し、今日に続く山中湖村の誕生もまた、「峠」の存在と密接不可分な関係に基づいている。

さらには地域的特性の一つとして、「峠」には信仰の対象である富士登拝における、巡礼路としての役割りを見出すことができる。それは登山口のある富士北麓（山梨県側）と南麓（静岡県側）を結び、あるいは内八湖に数えられる山中湖への経路としてであり、例えば村内で見つかった「鯉奉納碑」は、現埼玉県寄居町の丸正講が享和元年（一八〇一）に山中湖で行なった鯉の奉納を今に伝え、富士五湖最古の魚類放流記録として、富士山信仰における山中湖の歴史を物語っている。

第一部 論 文

このような富士山を中心とする宗教観や精神性は、世界文化遺産としての富士山の保全とも深く関わっており、平成二十八年（二〇一六）五月に公表された国連教育科学文化機関（ユネスコ）の諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモ

ス）の意見書では、山麓部分の巡礼路の特定を課題に挙げ、日本側にその対応を求めている。これを受け、山梨・静岡両県による調査研究が進むなか、山中湖村内も前述の立地や由緒・位置づけから、巡礼路を特定すべき対象地域の一つになっている。しかしながら、明確な巡礼路の特定につながる文献史料は管見の限り皆無であり、他の地域同様その特定は困難を極めるものの、限られた情報を手掛かりに推測し、明らかにしていかなければならないのが現状である。

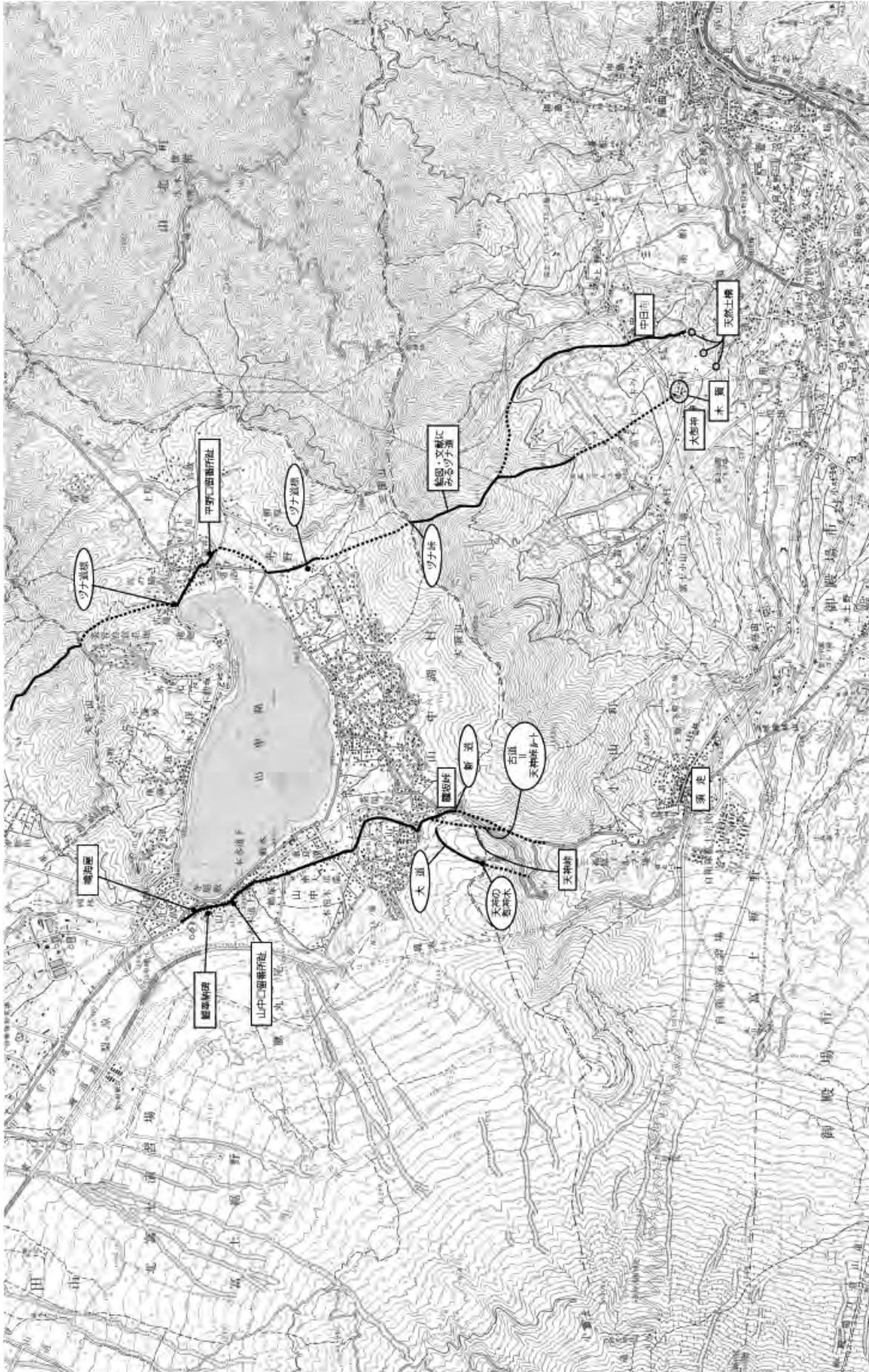
そこで小稿では、現行自治体としての山中湖村に至る他国（県）からの古道について、絵図・古記録を頼りに、①存在の把握（名称やルート）、②大まかな使用時期と変遷、について検討を行ない、富士山巡礼路としての山中湖村通行とその道筋を探ってみたい。

一 「ツナ坂越」

（一）近代における「籠坂峠」の認識

山中湖村は日本有数の避暑地として前身の中野村時代より開発が進み、その結果、多くの名士が夏季を愉しむ一大別荘地の観をなす。明治〓昭和にかけて、ジャーナリスト・歴史家として活躍した言論人徳富蘇峰もまた、その一人である。^①蘇峰が書き残した『山水随縁記』には、道筋に関する次の記述がある。^②

（前略）浅間神社を一拝して、馬車を更へて行く。坂路の急なるに加へて、却て馬車は勇ましく馳せ上れり。此れより所謂の駕籠坂峠にかゝる。此の峠は、西富岳の大嶽に起りて、甲斐駿河の堺をなし、一の分水嶺たり。（中略）古は加古坂に作る。是れ鎌倉時代よりの街道にして（中略）峠に至れば、富岳と相對し、握手は悪るか、接吻もしかね間敷程也。峠を下れば、山中湖は



※国土地理院発行 1/50,000 地形図「山中湖」をもとに作成

眼下にあり。(後略)

右は、大正二年(一九一三)八月に書かれたものであり、須走(静岡県小山町)から籠坂峠(静岡県小山町・山梨県山中湖村)を越え山中湖に至る道中を描写した回想部分である。この時点における籠坂峠は、須走(及び方面)―山中湖(厳密には山中地区及び方面)間の主要交通路として使用され、なおかつ鎌倉時代よりの街道とする認識がなされており、近代以降、籠坂峠を越えるルート(以下、籠坂越)が中世以来の主要道として認識され定着し、一般化していた様子がうかがえる。⁽³⁾

(二)籠坂越以前の古道「ヅナ坂越」の存在

文化十一年(一八一四)十一月に完成した「甲斐国志」には、前述した籠坂越以前の古道である「ヅナ越」(以下、ヅナ坂越、いわゆるヅナ道)の記述が見受けられる。⁽⁴⁾

(前略) (筆者註、榎木山より) 二十町許ニシテヅナ山ニ至ル、此ヨリ駿州日向村へ越坂路アリ、升降二里、此道古ハ専往來セルニヤ、古道ノ跡存シテ広道アリシト見ユ、⁽²⁾ 永禄十一年(戊辰)十一月三日、武田信玄平野村ニ与シ朱印曰、甲駿両国之通路不自由之間、如本栖之地下人等諸役御赦免之旨被仰出者也トアルハ、即此ヅナ越ノコトナリ、平野ノ南山足ニ関所ノ趾アリ、⁽³⁾ 是古ノ往還路ニシテ加古坂ヨリハ攀易シト見ユ、土人曰、古ハ加古坂峻路ニシテ攀ガタカリシガ、宝永四年富士山爆火時砂礫吹オロシテ谷ヲ埋メ、平地ノ如ナレリ、故ニ通路開テ往來自在ニナリシヨリ、ヅナ坂自ラ通行スル者ナシト云、(後略)

右によればヅナ坂越は、甲斐国平野村(山中湖村)と駿河国日向村(中日向村、静岡県小山町)間を結ぶ峠越えのルートであり、「甲斐国志」に記された時点では未だ「古道跡」が残されていたことが知れる(傍線部①)。文中に登場する武田の朱印とは、山中湖村内平野地区に建つ海雲山寿徳寺に保管され、現在村指定文化財(書跡)となっている「武田家印判状」を指す。武田軍では駿河攻めを行

うにあたり、軍用道として既存のヅナ坂越の整備を永禄十一年(一五六八)の段階で地元へ命じており(傍線部②)、元亀二年(二五七二)の駿河国深沢城攻めに際してはこのヅナ坂越を行軍し進攻している。⁽⁵⁾

このようにヅナ坂越は、籠坂越以前の主要道(「古ノ往還路」)であり、さらには軍用道として使用されていた。その最たる理由は当時にあつては籠坂越よりも通行し易かつた点にあつたが、宝永四年(一七〇七)の富士山噴火を機にそれまで峻路であつた籠坂越の地形に変化が生じ、「平地ノ如ク」なつたことで籠坂越の通行が増え、反対にそれまでのヅナ坂越の通行は減少し、やがて自然衰退していったという(傍線部③)。

こうした変化は、噴火前後の中日向村における飼育馬数にも表れている。すなわち、噴火前の貞享四年(一六八七)には一四戸で三五疋を飼育していたのが、噴火後の延享二年(一七四五)には九疋に減少し、以降この数を維持していく。⁽⁶⁾

噴火に伴う砂降りがヅナ坂越の機能に与えた影響を考える上で、この馬数の変化は看過できない。

以上のことから、「甲斐国志」が完成した文化十一年の時点では、籠坂越が主要道として扱われており、一方のヅナ坂越はそれ以前の「古ノ往還路」として認識され、意識的に書



【絵図①】元禄15年(1702)12月「甲斐国絵図 甲斐国高都合并色分目録」
公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会所蔵

き分けられていることが読みとれる。⁽⁷⁾

（三）描かれた「ツナ坂越」

此所嶺通国境

平野村ヨリ駿河大御神村之枝木賀村迄式里拾五町余

此所ヨリ山中村出口道迄之間山国境不相知⁽⁸⁾

右は、元禄十五年（一七〇二）十二月制作の【絵図①】「甲斐国絵図 甲斐国高

都合并色分目録」に描き込まれた道筋に添えられた一文である。これによれば、

当時平野村から「駿河大御神村之枝木賀村」を結ぶ二里一五町余の道が存在して

いたことがわかる。ここに登場した「木賀村」とは、「紀賀（野）」と漢字を変え

て現在も小山町内に残る旧大御神村の字名をいう。延宝五年（一六七七）八月に

作られた鑑帳「御厨領大御神村」には、「一、薪伐申山、東ハ中日向境よりづな道・

野山・つのとりのり・あらしば・大洞」との記述がある。すなわち、延宝五年八月の

時点においては、平野村からのツナ坂越は中日向村と大御神村の境目に下り出て

おり【絵図②】⁽⁹⁾、薪伐りの際に大御神村民によって利用されていたことがわかる。

このことから、前掲の国絵図に描かれた道筋はツナ坂越と考えるといいだろう。な

お、宝永噴火後の村鑑からは前記の薪伐りに関する記述がみられなくなることか

ら、先の中日向村での飼育馬数の例と同じく、噴火によるツナ坂越利用の衰退を

物語る変化といえる。

このほか国絵図に

は、山中村（山中湖村）

から須走村に至る籠坂

越の記載もあり、噴火

前のこの時期において

通行量は別としても、

ツナ坂・籠坂の両道が

並存し併用されていた



【絵図②】貞享3年（1686）4月「大御神村絵図」
（『小山町史』第3巻〔近世資料編Ⅱ〕より）

ことが指摘できる。

国絵図はその後天保九年（一八三八）にも制作されており、左の一文とともに「須

奈峠」の名称表記が登場する【絵図③】⁽¹⁰⁾。

此所峯通国境

平野村ヨリ駿河国木賀迄二里拾五町余

此所ヨリ山中村出口道迄之間山国境不相知

名称表記は過去の国絵図（正保版・元禄版）にはみられず、ツナ坂越の存在が

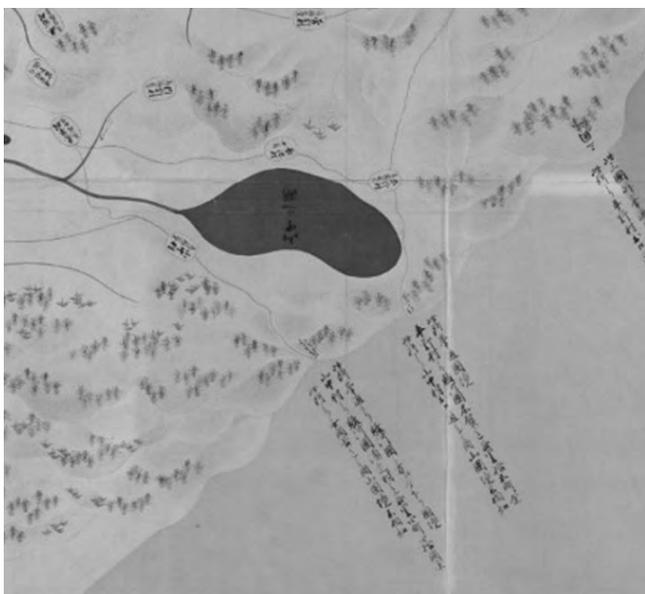
噴火から約一三〇年を経た天保九年に至っても依然として認識されていたことを

表している。このことは、「甲斐国志」が記す宝永噴火によるその後の自然衰退や、

中日向・大御神両村で確認し得た変化にみる凋落傾向と相反する感じを受ける。

この一種の違和感について、他の絵図ではどのように描かれているのか確認して

みたい。



【絵図③】天保9年（1838）「天保国絵図 甲斐国」
国立公文書館所蔵

【絵図④】は文化

三年（一八〇六）に

作られた「平野村絵

図」である。絵図上

部には「ツナコへ」

の表記とともに「駿

州中日向へ出」る道

が描かれている。本

絵図は、「古道」と

新道（現用道）、「古

番屋」といった表記

や、平野村の「古屋」

からの村落移転が描

き分けられるなど、



【絵図④】文化3年(1806)「平野村絵図」〔森嶋家文書〕

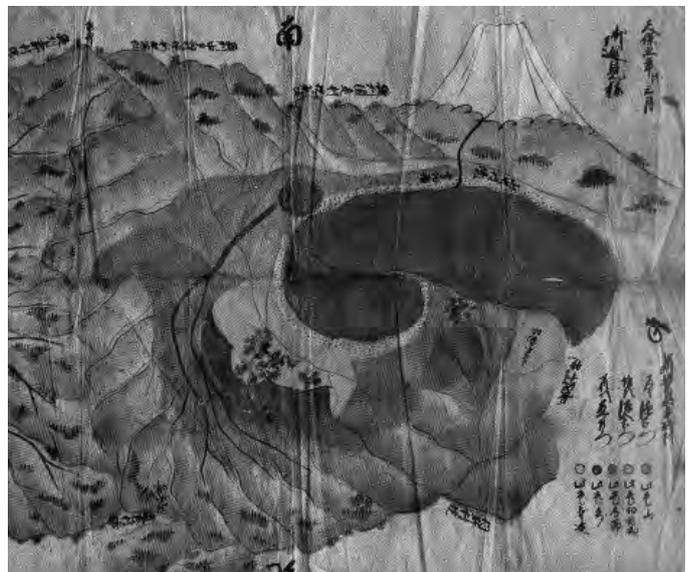
都留市所蔵

一枚に年代変遷が表現された絵図となつている。こうした特徴を踏まえ再度「ツナコへ」に注目すると、「古道」の注記がなされていないことから、当時において現用道として活用されていた可能性が極めて高い。また前掲の国絵図と同様、須走村に至る籠坂越の記載もあることから、両道の並存・併用がみてとれる。

天保五年(一八三四)の【絵図⑤】¹³⁾でも両道の並存・併用が確認できるほか、何本もの枝道が描き込まれており、実際には本道に接続する幾筋もの道が拓かれていたことがわかる。

このように、近世に作製された他の絵図においてもツナ坂越は描かれており、【絵図③】のみが例外的なわけではなかったことがいえる(但し、後述するとおり全ての絵図に一貫して描かれ続けたわけではない)。

このほか、これまで掲出してきた諸絵図とは異なる表現がなされた絵図がある。それが近世における富士北麓周辺地域の交通路を描いた文久三年(一八六三)十月の【絵図⑥】¹⁴⁾である。山中村と平野村間に峠越えを示す道が二筋描かれており、明神峠(静岡県小山町)越とツナ坂越と考えられる。注目すべきは絵図上部の平



【絵図⑤】天保5年(1834)3月「平野村絵図」

〔山中湖村史〕第2巻より

野集落部分に描かれた湖水にせり出す斜線のような印(しるし)である。下部山中集落にも同様の印が確認でき、同地点に明治初期まで存在した山中口留番所の南側には、付属構造物として人の通行を遮る「ヤライ」(矢来)が設けられていたという¹⁵⁾。このことから絵図中二箇

所に描かれた斜線のような印は、この矢来を表していると考えられる。

平野口留番所について前掲の「甲斐国志」では、「関所ノ趾」と表現され¹⁶⁾、既使用されなくなっている様子を伝えており、また取り上げる自治体史や郷土誌等でも、史料の根拠の明示を欠きながらも、享保年間(一七一六〜一七三六)に廃止されたとする考えが定着している。しかしながら本絵図情報を無視しなければ、平野口留番所は幕末期まで何らかのかたちで存在していたとの見方ができる。その場合の理由として、元禄十六年(一七〇三)の地震災害(いわゆる元禄地震)による平野村の村落移転(古屋↓荒井)に合わせた番所移転、あるいはツナ坂越の衰退と籠坂越への往還機能の変遷に伴う何らかの番所移転等が考えられる。

(四)「ツナ坂越」の現在

「三国山・パノラマ台ハイキングコース」上に「ズナ坂峠」の標識(三国山と榎木山間)が建っている(写真①)。想定されるツナ坂越は、この標識をハイ

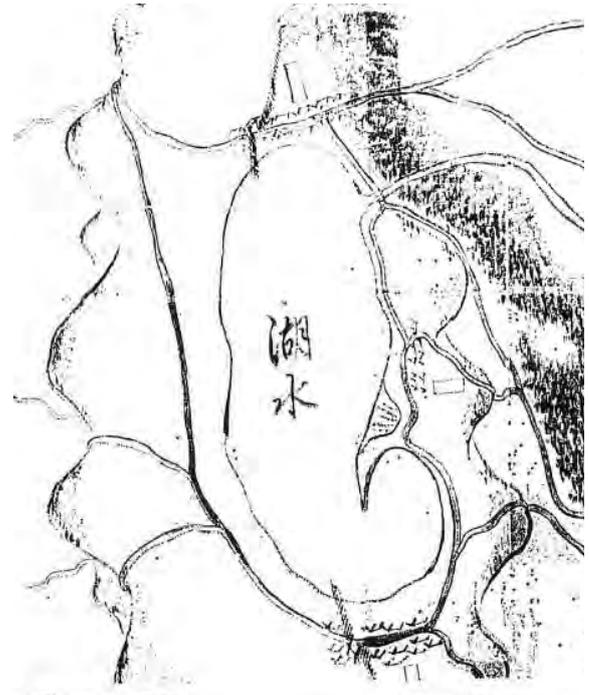


【写真①】「ズナ坂峠」の標識

(2016年 筆者撮影)

頂部から小山町側（南東）の想定経路部分については、別にハイキングコースが小山町によって部分整備されているもの（但し、現在は崩落のため通行禁止）、富士スピードウェイ等の大規模開発により痕跡は破壊されている。一方の山中湖村側（北西）の推定経路部分については、一切整備されておらず、こちらも別荘地開発や砂防ダム建設等によりやはり痕跡は失われている。但し、山中湖村側に関しては現地踏査の結果から一部道跡とお

キングコースに垂直に近い角度で交差するようにして、現在の山中湖村と小山町間を走っていたと考えられる。



【絵図⑥】文久3年（1863）10月
「〔徳川時代富士北麓周辺交通路〕
（『山中村の歴史』上巻より）」



【写真②】ズナ坂越とおぼしき道跡
(2016年 筆者撮影)



【写真③】ズナ坂越を示す道標
(2017年 筆者撮影)

ぼしき道筋を確認することができた^①（【写真②】）。また、村内二箇所（平野保育所付近・東放学園付近）にはズナ坂越を示す道標が残されている^②（【写真③】）。

（五）小括

「甲斐国志」にて宝永噴火を契機に自然衰退し、籠坂越以前の古道と位置付けられたズナ坂越であったが、噴火から一〇〇年以上を経た文化・天保期、さらには幕末期の絵図にも描かれるなど、今日に続く籠坂越が主要道として定着するなかで並存し、継続（ないし復旧）して使用されていた様子がみえてきた。すなわちズナ坂越はあくまでも衰退したのであり、そのことが廃道に直結するかといえはそうではなかった、ということがいえる。

なお、現状ではズナ坂越と推定されるいくつかの道跡の内、どの道筋がいつの時代に使われたものなのかを一筋々々特定することは困難である。

また、前述したように山中^{さんちゅう}にかかる部分についてはそのほとんどが未整備であり、かつ整備部分も現在崩落し通行止めとなっている。地形的難所に加え、野生動物が息息し、またその捕獲器（罟）も点在していることから、極めて危険である。整備された所定のハイキングコースから逸れて分け入る行為はくれぐれもしない



【絵図⑦】文政8年（1825）「甲斐国絵図」
山梨県立博物館所蔵〔甲州文庫〕



【絵図⑧】天保13年（1842）「懷宝 甲斐国絵図 完」
山梨県立博物館所蔵

でいただきたい。

二 近世における「籠坂越」

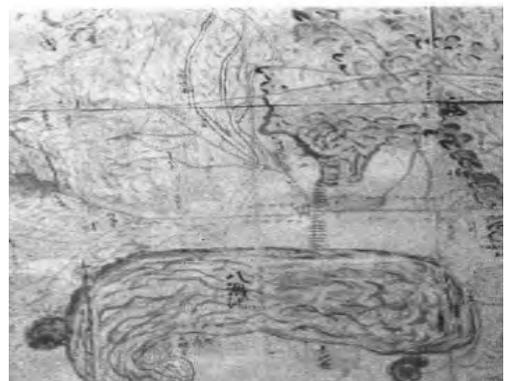
(一) 駿河国須走村村鑑にみる記載

宝永噴火以前の貞享三年（一六八六）四月に記された「一御国替被遊候諸事書上下帳」には、左の記述がある。¹⁹⁾

一、秋元但馬守様御領分郡内領山中村迄道法式里、但シ籠坂峠迄ハ三拾五町四拾七間、則籠坂峠大分二くづれ申候時分、又ハ御公儀様衆御通り被遊候節は、在々より人足入次第二被下候（後略）

噴火以前に既に籠坂越が山中村―須走村間を結ぶ交通路として確立していたことがわかる。また、須走村では山崩れ等への整備対応を請け負っており、砂降りの影響で谷が埋められ緩やかになる以前の籠坂越が、「甲斐国志」がいうようにに険峻であったことをうかがわせる。

(二) 描かれた「籠坂越」



【絵図⑨】年末詳（近世）「山中村関係の各道と番所」
（『山中村の歴史』上巻より）



【絵図⑩】年末詳（近世）「山中村番所位置図」
（『山中村の歴史』上巻より）

【絵図⑦】²⁰⁾は文政八年（一八二五）、【絵図⑧】²¹⁾は天保十三年（一八四二）にそれぞれ描かれた「甲斐国絵図」の山中湖部分である。近世に描かれたこの二枚には籠坂峠と山中村、そして集落手前には番所と思われる構造物が描かれる一方で、ヅナ坂越と平野集落が描かれなくなっている。

続く【絵図⑨】²²⁾・【絵図⑩】²³⁾は近世の山中村と番所を描いたものであり、既述した「ヤライ」（矢来）や道との位置関係等が詳細に描かれている。これらの絵図からは、近世には往還としての籠坂峠―山中村ルート（＝籠坂越）が確立し、それに伴う番所機能の充実や山中村落の発展をみてとることができる。

近世に作られた各種の絵図を通観した際、「ヅナ坂越―平野村」・「籠坂越―山中村」がそれぞれ一組のものとして描かれており、両組を併記する場合と後者のみを表記する場合とに大別することができる。言い換えれば、前者のみを表記して後者を描かない例は皆無に等しい（【表】参照）。こうした描かれ方の傾向からは、駿河国から甲斐国に至るルートとして、「須走発―籠坂經由―山中行」が定着し、反対に近世以前の「中日向（大御神）発―ツナ坂經由―平野行」は地元民の生活・

生業の道としての利用に限定縮小されていったと考えるのが自然である。

三 近代における「籠坂峠」

馬車鉄道の敷設と国道の開通により、籠坂峠を通る交通は左のような変遷をたどり今日に至る。

- ・明治三十三年（一九〇〇）九月二十一日
都留馬車鉄道、下吉田―籠坂峠間、開業
- ・明治三十四年十二月九日
御殿場馬車鉄道、須走―籠坂間、開業 ↓ 都留馬車鉄道に連絡

作製年月	地図名	ヅナ		籠坂		備考
		通筋	記述	通筋	記述	
正保年間(1644~48)	正保国絵図 甲斐国	×	×	○	(須走へ)	柳沢文庫所蔵
元禄15年(1702)	元禄国絵図 甲斐国	○	(木質へ)	○	(須走へ)	柳沢文庫所蔵
宝暦6年(1756)	甲斐国絵図	×	×	○	(須走へ)	山梨県立博物館所蔵
寛政11年(1799)	甲斐四郡国絵図井村々高附	×	×	○	(須走へ)	山梨県立博物館所蔵
文化3年(1806)	平野村絵図	○	ツナコへ	○	(須走へ)	都留市所蔵 森嶋家文書
文化9年(1812)	甲斐国絵図	×	×	○	籠坂峠	山梨県立博物館所蔵
文政8年(1825)	甲斐国絵図	×	×	○	カゴ坂	山梨県立図書館所蔵
文政10年(1827)	駿河国地図	×	×	○	籠坂峠	静岡県立図書館所蔵
天保5年(1834)3月	平野村絵図	○	(中日向村通)	○	籠坂	『山中湖村史』
天保9年(1838)	天保国絵図 甲斐国	○	須奈峠	○	籠坂峠	国立公文書館所蔵
天保9年(1838)	天保国絵図 駿河国	○	つな峠	○	籠坂峠	国立公文書館所蔵
天保13年(1842)	懷宝 甲斐国絵図 完	×	×	○	カゴ坂	山梨県立博物館所蔵
文久3年(1863)10月	〔徳川時代富士北麓 周辺交通路〕	○	×	○	×	『山中村の歴史』上巻
慶応4年(1868)7月	大御神村絵図	○	×	—	—	『小山町史』
近世	甲斐国絵図	×	×	○	×	山梨県立博物館所蔵
近世	甲斐国絵図	×	×	○	(須走へ)	山梨県立博物館所蔵
近世	須走村絵図	—	—	○	かこ坂峠	『小山町史』
近世	伊能大図(色彩図)	×	×	○	籠坂峠	国土地理院HP
明治9年(1876)	山梨県新図	×	×	○	カゴ坂	山梨県立博物館所蔵
明治16年(1883)	甲斐国誌附図	×	×	×	×	山梨県立博物館所蔵
明治31年(1898)	甲斐国全図	×	×	○	加古坂	山梨県立図書館所蔵
明治32年(1899)	山梨県全図	×	×	○	籠坂峠	山梨県立図書館所蔵
明治38年(1905)	山梨県全図	×	×	○	加古坂	山梨県立図書館所蔵
明治40年(1907)	最新調査山梨県全図	×	×	○	籠坂峠	山梨県立図書館所蔵
大正14年(1925)	山中湖村図	×	×	○	籠坂峠	大日本帝国陸地測量部
昭和5年(1930)	山中湖村図	×	×	○	籠坂峠	大日本帝国陸地測量部
昭和27年(1952)	山梨県総合開発計画図	×	×	○	籠坂峠	山梨県立図書館所蔵
昭和31年(1956)	山梨県管内全図	×	×	○	籠坂峠	山梨県立図書館所蔵

【表】絵図にみる2つの古道とその表現

・明治三十六年九月十一日

都留馬車鉄道、籠坂峠―静岡県境間、開業

・大正七年（一九一八）二月十九日

御殿場馬車鉄道、須走―籠坂間、廃止

・大正十年七月

都留馬車鉄道、上吉田（金鳥居上）―籠坂峠―静岡県境間を坂本諏訪松ほか四名に譲渡

・同年七月三十一日

都留馬車鉄道、籠坂峠―静岡県境間、廃止

・昭和二年（一九二七）十一月五日

都留馬車鉄道、上吉田（金鳥居上）―籠坂峠間、廃止

・昭和二十八年（一九五三）五月十八日

二級国道一三八号、富士吉田―小田原線指定施行

明治、昭和初期、籠坂峠における馬車鉄道の敷設・営業は、籠坂峠が近世以来の主要交通道であるとの認識に基づき整備・利用されたことは明らかであり、またそうした整備が、周囲に籠坂峠が主要交通道であることを再度認識させ、利用を促すことにもつながった。このほか山中湖村内の交通路に関しては、富士急行の前身である富士山麓電気鉄道株式会社による、大正末期以降に展開をみる山中湖周辺の観光開発と整備事業が大きい。²³⁾

明治以降の絵図においてヅナ坂越はばったりと描かれなくなる。近世以来の籠坂越がベースにあり継承される一方で、近代交通においてヅナ坂越は完全に失われ、忘れ去られていくのであった（表【参照】）。

まとめにかえて

以上、小稿で確認し得たことをまとめると次のとおりである。

一、今日に続く籠坂越の前身として、小山―平野間を結ぶヅナ坂越が存在し、「古

ノ往還路」として機能していた。

二、その後、宝永噴火を機にそれまでのヅナ坂越から籠坂越へと、主要道としての往還機能が移る。但し、そのことが前者の廢道を意味するわけでは決してなく、前者を描き込んだ近世絵図の存在から、ヅナ坂越は依然として認識され使用されていたとの推測が成り立つ。すなわち、用途や通行量は異なれども近代を迎えるまでの長期にわたって両道は並存していたのである。

三、往還機能の変遷理由としては、①噴火物の堆積による籠坂峠一帯の地形変化、②噴火によるヅナ坂越の被害、③噴火前の元禄地震による旧平野村の被災と村落移転、④山中村落の発展、の四つが考えられる。

四、享保期での廃止が定説化する平野の口留番所であるが、絵図からは幕末期まで存続していた可能性がみえてきた。

富士登拝と巡礼路の関わりについて、例えば近世後期の「富士山道知留辺」では、「江戸より富士山道」として日本橋（東京都中央区）↓足柄峠（神奈川県南足柄市・静岡県小山町）↓竹ノ下（静岡県小山町）↓須走↓かこ坂峠↓関所・山中↓新屋（富士吉田市）と紹介する⁽²⁵⁾。あるいは明治期の小田原（神奈川県小田原市）東講の巡礼行程記録では、吉田口と須走口の登下山に際し旧山中村を通過して籠坂越を利用している⁽²⁶⁾。こうした行程は、小稿で確認したとおり宝永噴火以降、主要道の機能がヅナ坂越から籠坂越に移ったことに因っており、それ以前においてはヅナ坂越が巡礼路としても用いられていたと考えられる。また、機能が籠坂越に移った後も、道としての機能は依然有していた可能性からすれば（絵図におけるヅナ坂越や平野口留番所の記載）、少なからず籠坂越が主流の近世においても引続きヅナ坂を越える巡礼者がいたとしても不思議ではなく、またそうした考えは排除すべきではないだろう。このことから、現山中湖村内の巡礼路としては籠坂越だけでなく、今では失われたヅナ坂越についても対象に加えた今後の特定作業が俟たれる。

このほか、巡礼路との絡みからいえば小稿では紙幅の都合上触れることができ

なかったものの、かつて村内に存在していたとされる「山中口登山道」の特定もまた重要な作業として残されている。同登山道をめぐるといくつかの事柄については、改めて別稿を期すことにしたい。

依然未確定で多分に推測の域を出ない小稿に対し、大方よりの叱声を糧として引続き村内巡礼路の特定に努めてまいりたい。

註

- (1) 村内には蘇峰の業績と山中湖との関わりを伝える「山中湖文学の森 徳富蘇峰館」が建つ。
- (2) 徳富猪一郎『山水隨縁記』（民友社、一九一四年）、一二五～一二六ページ。
- (3) 地誌類はもちろん、大正～昭和初期にかけての書籍にはこうした認識の記述が目立つとともに、通行風景写真が掲載されるなど、実際の使用や当時の道路状況を可視的に確認することができる（騎乗団記録部編『快馬嘶く富士裾野の一周』至誠堂書店、一九二七年）。
- (4) 「加古坂」の項（卷三七）。『大日本地誌大系』（全五巻、雄山閣、一九六八～八二年）に拠った。
- (5) 小山町史編さん専門委員会編『小山町史』第三卷（近世資料編Ⅱ）（小山町、一九九四年）、八八ページ。
- (6) 同右。
- (7) このような認識に基づき考えた場合に、『山梨県史』では弘安五年（二二八二）の日蓮聖人一行の、河口（富士河口湖町）↓呉地（富士吉田市暮地）↓竹下（静岡県小山町竹之下）という旅程について、承平七年（九三七）噴火によって流出した剣丸尾第一溶岩流を迂回したためとしているが（山梨県編『山梨県史』通史編二「中世」〈山梨県、二〇〇七年〉、一二四～一二五ページ）、これは旅程を籠坂越と考えた場合の違和感であり、ヅナ坂越だと考えれば自然な行程である。
- (8) 「甲斐国絵図 甲斐国高都合并色分目録」（公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会所蔵）。
- (9) 前掲『小山町史』第三卷（近世資料編Ⅱ）、二二五ページ。
- (10) 同右、九五ページ。
- (11) 「天保国絵図 甲斐国」（国立公文書館所蔵、特0830001）。
- (12) 「森嶋家文書」（都留市所蔵）。
- (13) 「平野村絵図」（山中湖村史編集委員会編『山中湖村史』第二卷〈山中湖村史編集委員会、一九七七年〉、口絵）。

- (14) 「徳川時代富士北麓周辺交通路」(山中村の歴史編纂委員会編『山中村の歴史』上巻(浅間神社有地入会権擁護委員会、一九九六年)、口絵)。
- (15) 丸茂正穂編『南都留郡郷土誌』(南都留郡連合教育会、一九三八年)、一三一ページ。現在その痕跡は失われ、往時の姿を想像することはできないものの、同書が刊行された時点では「現に「ヤライ」の跡尚遺存す」と記され、残されていた様子である。また口留番所の機能等については、山中湖村史編纂委員会編『山中湖村史』第一巻(山中湖村史編纂委員会、一九七九年)、二五三ページ以降に詳しい。
- (16) 前掲「加古坂」の項(巻三七)。
- (17) 渡邊稔・野村晋作「日蓮や信玄が通った古道「ツナ道」の現地調査を開始しました」(企画まちづくり課編『広報やまなか』四二二号(山中湖村役場、二〇一七年)所載)、「ツナ道」経路を調査」(『山梨日日新聞』二〇一七年二月二十六日付朝刊)。
- (18) 但し、経年劣化による表面の摩耗が著しいほか、位置に関しても移動している可能性が極めて高い。
- (19) 前掲『小山町史』第三巻(近世資料編Ⅱ)、二四六ページ。
- (20) 「甲斐国絵図」(山梨県立博物館所蔵「甲州文庫」、歴・2005-003-005678)。
- (21) 「懷宝 甲斐国絵図 完」(山梨県立博物館所蔵、歴・2005-000-000043)。
- (22) 前掲『山中村の歴史』上巻、口絵。
- (23) 同右。
- (24) 山中湖村史編纂委員会編『山中湖村史』第四巻(山中湖村史編纂委員会、一九九二年)、山村順次「観光地の形成過程と機能」(御茶の水書房、一九九四年)。
- (25) 松園梅彦編、万延元年(一八六〇)刊。『富士吉田市史』史料編第五卷(近世Ⅲ)(富士吉田市、一九九七年)史料三〇。
- (26) 「東登山日記簿」(夏目家所蔵、小林謙光「東講「東登山日記簿」(万延元年)に見る富士登拝、中道巡り及び八海巡り(解説と考察)」(『富士山文化研究』第六号、二〇〇五年)。

【付記】 小稿は、平成三十年二月十日に開催された「山梨県富士山総合学術調査研究シンポジウム―富士山の災害と参詣路の変遷―」での報告の一部を成稿したものである。報告以前の現地踏査の段階より、特に渡邊稔氏・堀内真氏には多くのことをご教示いただいた。また当日の報告では、山梨県立富士山世界遺産センターの職員や他の報告者の方々のお世話にあずかるとともに、聴衆からの貴重なご意見やご質問を賜った。そして、小稿をまとめる

にあたっては、掲出画像を所蔵される各機関よりそのご許可をいただいた。末筆ながらここにすべての関係各位に対し深甚なる謝意を表す次第である。

富士参詣路と溶岩洞穴について

— 北口の胎内・精進御穴から人穴・白糸ノ滝・万野風穴を巡る —

村石 眞澄

はじめに

富士山の山内・山麓に点在する信仰拠点と、それらを相互につなぐ道筋を明らかにすることは、世界遺産登録時に世界遺産委員会から提起された課題の一つである。北面から西面にかけて流下した剣丸尾溶岩や青木ヶ原丸尾溶岩、このほか南西面を被覆する溶岩が生成した洞穴のなかには、信仰の対象となったものが少なくない。こうした信仰の場として利用された洞穴や、それらをつなぐ道について検討することは、ユネスコ世界遺産センターへ保全状況報告書を提出するための基礎的な作業として、必要不可欠なものと考えられる。

剣丸尾には、焼入やけいりに存在した胎内（旧胎内、富士河口湖町）、船津胎内（同町）、吉田胎内（富士吉田市）などが存在する。一方、青木ヶ原丸尾には、竜宮（竜宮洞穴とも、富士河口湖町）、精進穴（信仰上は「精進御穴」という、同町）などがある。本稿では、船津胎内、精進穴、コンノウジ（神野路）に沿った信仰の場（氷池など）、さらには甲斐・駿河国境（山梨・静岡県境）を越えた先にある人穴・白糸ノ滝（ともに静岡県富士宮市）を結ぶ主要な道筋について検討していく。なお、神野路は「甲斐国志」が「今此道大田和ヨリ西南富士山ヲ経テ駿州上井出及び人穴へ出、此間七里余人家ナシ」と記述する要路で、「判立場」¹⁾で駿河と国境を接している。

人穴は、早くも鎌倉時代の初頭の文献資料に登場する。「吾妻鏡」の建仁三年（一一〇三）六月三日条は、新田忠常主従六名が探索し、古老がここは浅間大菩薩の御在所だと語ったと記し、当時すでに人穴が神聖視されていたことが知られる。降って江戸時代初期には、富士講の祖、長谷川角行がこの穴で修行したとし

て、その後継者たちが元祖の霊地として崇敬するようになった。また船津胎内は、内部が人間の胎内に擬せられ、潜ることで清らかな心身を持って生まれ変わることでできる場所と考えられ、多くの富士講中が参詣に訪れる信仰の拠点となっていた。胎内潜のための「御胎内」である。

船津胎内をはじめ、その信仰を再編した吉田胎内や精進御穴、人穴、白糸ノ滝、万野風穴などには、富士講行者などにより建てられた石造物が残るほか、こうした場合は、富士登拝の模様を綴った記録類でも、しばしば言及されている。今回は、現地踏査により確認した古道や石造物を文献資料と照合し、信仰の道筋を地図上に重ねて示すことで、新たな図を作成した。

基礎データに用いたのは、明治二十二年（一八八七・八八）の測量に基づく二万分の一地形図である（以下、明治二万地形図とする）²⁾。大縮尺で精度が高く、かつ最も古いものとして、これに補正を加えて使用した³⁾。当然ながら、明治二万地形図は測量誤差を含んでいるため、古道の詳細な検討を行うにあたり、必要に応じて一メートルメッシュ精度で計測したレーザー測量データから作成した赤色立体地図を併せて判読し確認した。また、現地踏査ではハンディGPSを利用し、石造物や古道の位置情報を記録し地理情報システム（GIS）⁴⁾で照合し検討を加えた。

一 北面の胎内

北面の溶岩樹型洞穴（胎内）は、少なくとも三転している。最初の胎内は、延宝八年（一六八〇）の「月旺御身拔」（富士講曼荼羅）⁴⁾に「躰内」と記載されるもので、瓢箪根野ひょうたんこんのに所在した（◇1）。第二次大戦後にダイナマイトで爆破され、

その痕跡は今では確認できないという。⁵⁾ また、焼入(船津胎内の上)で長谷川角行が胎内を発見し、次いで延宝元年、村上光清の父七左衛門が、登拝の折に現在の船津胎内より大きな胎内を発見し、浅間明神誕生の地として同明神を勧請したとの伝承もあるという。⁶⁾ このほか、寛文九年(一六六九)の秋元氏による検地の際の文書には、「胎内」の字名が見られるという。⁷⁾

この最初の胎内のおおよその位置を示すのが、津屋弘達作成の富士火山地質図である。剣丸尾溶岩流の一部が半島状に突き出していて、この箇所に「ヤケイリの出丸尾」と記入されている。⁸⁾ 溶岩が枝分かれして突出した結果、溶岩本流と「ヤケイリの出丸尾」に挟まれた部分は、上からみると奥に向かって細くなり丸みを帯び瓢箪状となっている(図1)。ここは剣丸尾溶岩流が及ばず開墾可能な根野(壘野)として認識されていたため、瓢箪根野と呼ばれたのではないかと⁹⁾。

二番目の胎内は、国指定天然記念物の「船津胎内樹型」(◇2)で、食行身緑の直弟子高田(藤井)藤四郎によって、発見され開かれたものである。近世に富士講行者の多くが胎内潜をしたのはこの胎内である。明治六年(一八七三)に船津胎内の管理をめぐる船津村と丸藤講社との交渉に關わる文書では、藤四郎が宝暦二年(一七五二)に船津胎内を発見したと記され、整備されたのはこれ以降のこと¹⁰⁾という。

三番目の胎内は、明治時代になって吉田口登山道により近いところで発見され開かれた胎内である。「新胎内」と呼ばれ、現在では「吉田胎内樹型」の名で国の天然記念物に指定されている(◇3)。これに対して、二番目の船津胎内は「旧胎内」と称される。

二 船津胎内

(一) 河口から胎内へ

江戸を起点とする甲州道中が整備されるまでは、信州方面から関東へ向かうには、甲府盆地から御坂峠を越え、吉田を経由する鎌倉街道が主要な道筋であった。

病身の日蓮や時宗の二祖他阿真教も、御坂を越え富士北麓から相模を目指している。このときに、峠直下の河口を必ず通過することになる。江戸時代以降も、甲府盆地をはじめ、北関東や信州からの道者はこの道を利用して¹¹⁾いる。

河口から徒歩もしくは渡船で河口湖南岸の船津(◇9)に至る。十九世紀前期成立の駿河の地誌「駿河国新風土記」は、船津に発する「北口の正面の道」が廃絶したのち、船津胎内から御膳場、三つ穴を経て小御岳に至り、吉田口の五合目に通じるルートがあったと記すが、¹²⁾「甲斐国志」にはこの道に関する記述はなく、はつきりしない。河口の御師本庄邦久家に伝来した「富士登山導者人別改帳」(天保十二年(一八四一))は、ひと夏のうちに河口を経由して富士山へ登拝した道者の書上である。計一七六二人の道者は、「胎内通り」「吉田通り」に二分されている。¹³⁾ 船津から吉田へ出て吉田口登山道をたどる経路(吉田通り)とは別に、吉田ではなく船津胎内を経由するルート(胎内通り)があったことがわかる。胎内へ参詣した道者は、「遊興」(中ノ茶屋、◇8)で同登山道に合流したとみられる。天保年間には、河口から山頂を目指す道者にとって、胎内が重要な参詣場所となっていたことは疑いない。

(二) 胎内への参詣 — 参詣は登拝の前か後か —

胎内参詣は、吉田口からの登拝と併せて実施されることが多い。しかし、旅程はさまざまであった。

① 登拝前日の胎内参詣

最初に、天保十二年に富士山へ詣でた立川講の「富士道中日記帳」を見よう。¹³⁾ 川崎宿(川崎市川崎区)の大先達西川伊右衛門以下二十余名の一行は、六月二十九日に谷村(都留市)を立ち、小沼(西桂町)の身祿堂、阿栖池(明見湖、富士吉田市)、御胎内に詣でた後、御師宅へ投宿している。明見湖から胎内への途次、御師宅で一休したか否かは判然としない。

同十四年に登拝した江戸深川(江東区)の商家の隠居某(号を松露園礎山)は、七月十二日の午後、御師外川能登守宅に到着した(◇4)。一休したところへ、

先着していた講中の一行が胎内詣を終えて帰宿したと記録する。⁽¹⁴⁾

② 登拝途上での胎内参詣

天保三年、駒木野（東京都八王子市）の大先達八行真開率いる十一人の一行（うち三名は女性）は、食行身禄入定の地烏帽子岩（富士山七合五勺）を指摘した。同年は、享保十八年（一七三三）の身禄入定からちよと百年目にあたっていた。吉田御師菊屋に一泊した一行は、「御たいない」（御胎内）、次いで「みたらしのりうおう」（御手洗の龍王、泉瑞）に詣でると、その晩は御室（二合目）へ参籠、終夜祈願を行った（原文では「御室に御つや」⁽¹⁵⁾）。

先にあげた深川の楚山は、浅間宮（現北口本宮）に詣でた後、胎内へ向かった。胎内潜を体験、中ノ茶屋を経て頂上を目指している。前後の経路については、次項で検討を加える。

③ 登拝復路における胎内参詣

安政六年（一八五九）に登拝した下野国都賀郡小野寺村（栃木県栃木市）の某の「富士登山道案内日記」がある。⁽¹⁶⁾ 七月二十二日に出立、二十八日に小沼（西桂町）を早立ちして吉田御師芹沢宅へ至った某は、同日四ツ過ぎ（午前十時過ぎ）に出立、七合目で一泊した。翌朝、九合目で御来光を拝し、頂上すると（原文では「御八龍参詣」）、砂走を下り、小御嶽・胎内へ参詣、夕刻御師宅まで戻った。

岩科小一郎氏が、神奈川県柿生村（川崎市麻生区）を拠点とする早野講の「富士道中日記簿」を紹介している。⁽¹⁷⁾ これによれば、明治二十六年（一八九三）八月六日に出立した十六人の一行は、頂上を遂げた後、小御岳・胎内（吉田胎内か）の両所に参詣し、吉田の御師宅へ帰着している。

④ 山頂登拝の翌日

明治三十七年八月、東京在住の宮崎紋吉は、「最も繁栄なる（富士講）講社の組長某」に誘われ、初の富士登拝を志した。初の富士山行にもかかわらず、中道巡まで行っており、驚かされる。帰途、小御岳からは馬車に乗った。「馬より倍余も速」く、至極便利だったが、揺れは激しく、「頭と頭の拍子木だ」ったと記

録している。しかし、中ノ茶屋へ着いたのは「点灯頃」で、胎内参詣は、翌日となった。⁽¹⁸⁾ 紋吉の胎内行は、以下適宜参照する。

以上、七例を確認したが、参拝の順に決まりがあるわけではなく、それぞれの旅程にしたがい、胎内に詣でていたことがわかる。時代をさかのぼるほど、登拝前に胎内へ迂回していたようである。

(二) 吉田から胎内へ向かう道

① 胎内道

「富士山神宮麓八海略絵図」は、富士山を背景に、「吉田町」や「北口浅間社」（北口本宮）をはじめ、北西麓の要地やこれらを結ぶ道々を描いている。⁽¹⁹⁾ 町の中央を南行した通りが、その南端で東方（左方）へ折れる角（◇5）で、南方へ延びる道が分岐し、これに「胎内道」の注記がある。瓢箪根野に所在した「胎内」、船津胎内を指す「新胎内」を併記していることから、高田藤四郎が船津胎内を発見した宝暦二年（一七五二）から、さほど降らない十八世紀後半の模様を图示したものと推定される。また、万延元年（一八六〇）版行の「富士山道しるへ」も、「中町」「上町」から分かれ南西方へ向かう道を描き「胎内道」と注記している。また、「胎内道」の項を立て、「吉田村の宿の追分より右へ入る」と記述する。⁽²⁰⁾ この分岐（上宿交差点）には、「胎内追分」の呼称がある。

宮崎紋吉も『富士中道巡』のなかで、「此街は末方（土地では上と云ふ）より左折す、之が公道で軌條もある、真直に往く路は胎内行きである」と記している。以上から、浅間社へ参詣せずに、直接に胎内へ向かうには、吉田町南端の胎内追分から胎内道に入ったことが理解される。

② 礎山の胎内参詣

深川の商家隠居礎山の一行は、宿泊した御師外川能登守宅（◇4）を発ち、浅間宮（北口本宮富士浅間神社）に詣でたのち、頂上を目指した。「富士の道の記」の記述にしたがえば、本社（浅間宮）北方の諏訪明神（◇6）の脇から二〜三丁離れた場所に、兼ねて手配してあった雌馬六頭が待機していて、これらに分乗し

て小雨のそば降るなか一里ほど進み、胎内への分岐に到達した。ここでは馬方が、胎内へ通じる道は馬では行けないので、一行が戻ってくる所へ馬を回しておく旨語ったという。折しも雨もあがったので、雨具は馬方へ渡し、五丁六丁先の「からほり」(空堀)を渡り、茶屋で休憩した(◇17)⁽²¹⁾。この空堀(雪代堀)を「西大堀」と呼ぶ。現在の宮川である。茶屋については「富士山真景之図」の挿図「御胎内洞口」が参考になる。同図は大堀の堀底から崖上に昇る梯子に加え、流旗の翻る小屋を描く。小屋には、「カリコヤ」(仮小屋)と注記する⁽²²⁾。

荷物を茶屋に預けた礎山は、「黒ぼく」のような「焼け石道」を七丁八丁たどって青々とした山の際へ出た。ここが胎内の入口だった。入口には小屋が掛けられ、胎内潜在不可欠な蠟燭や腹帯を商っていたと記している。

③明治二万地形図と赤色立体地図における検討

諏訪神社の脇から西へ向かうのは、富士山とは逆に進むよう不自然に思えるが、明治二万地形図が「騎小径」を破線⁽²³⁾、「徒小径」を点線で、それぞれ表記していることに着目すると納得がいく(【図一】参照)。

諏訪神社から北向する道は、◇10の三叉路で南西に向かう道に接続する。北東に向かえば、胎内追分(◇5)に繋がる。諏訪神社(◇6)から三叉路(◇10)までの距離は、図上で約二二五メートル(二丁強)⁽²⁴⁾となり、楚山が馬に乗るまで二丁三丁を歩いたとの記述に一致する。

諏訪神社(◇6)から「騎小径」で直ちに南向するのは現在の吉田口登山道で、こちらを利用すると、中ノ茶屋で北西に折れて胎内に向かうこととなり、かなりの遠回りとなる。つまり、「騎小径」を通じて胎内へ向かうには、一旦北に進むのが妥当である。「富士山明細図」は、「浅間宮社」の図葉で、「諏訪社」の北側から西方へ延びる道に、「胎内道」と注記する⁽²⁵⁾。

◇10付近から御胎内へ至る「騎小径」は複数あるが、地図上で道の接続として自然なのは、◇11―◇12―◇13のルートである。やや南側にほぼ並行して延びる

◇14を経る道は、沢を渡る回数も多く安定した道とは思えない。

ここで礎山一行の胎内参詣を思い起こそう。馬を降りて五丁六丁歩いて堀を渡り、馬方は別の場所で一行を待ったという。これを明治二万地形図「剣丸尾」上で検討してみる。◇15までは「騎小径」、そこから先、堀を渡って船津胎内(◇2)までは「徒小径」と表記されている。楚山は堀の手前五丁(五四五―六五四メートル)の地点で馬方と別れているから、その場所は◇15ではなく、その手前の分岐◇13だったと推定される。馬方が馬を回送し、一行と合流したのは◇16と想定される。◇10から◇11―◇12―◇13―◇15とたどるルートこそ、①でみた胎内道だろう。

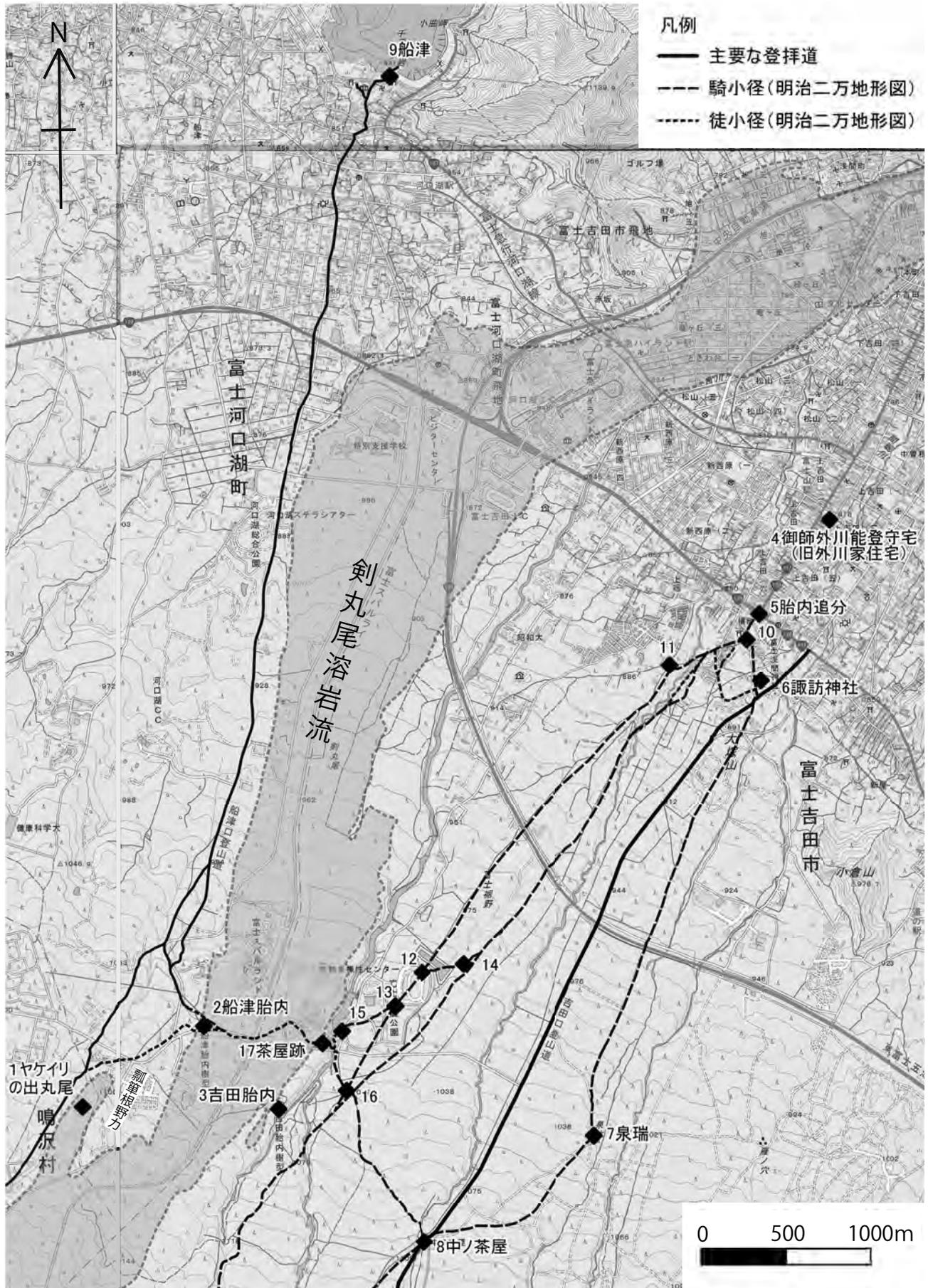
さて、近時の現地踏査で、◇15から堀を渡り、対岸の急斜面を登った所で道跡を確認した。その南では、平坦地に石積みが認められた。茶屋の痕跡と思われる(◇17)。礎山は、「黒ぼく」のような「焼け石道」を七丁八丁進んで、青々とした山の際へ出たと記していた。「黒ぼく」のような「焼け石道」という表現は、まさしく剣丸尾溶岩上の荒地のイメージに合致し、茶屋跡(◇17)から胎内(◇2)への距離約六七〇メートルも、礎山が記述した七丁八丁七六三―八七二メートルとほぼ一致する。また、胎内はこの剣丸尾溶岩流の西縁部に位置し、その西方は約三五〇〇年前の東剣噴出物上の緑豊かな森となっている⁽²⁶⁾。

(四) 胎内の状況

①文献に見る胎内

「富士の道の記」の記載から、◇17に所在した茶屋では、蠟燭を商うほか、手荷物を預かっていたこと、胎内洞穴の入口には、小屋掛があり、二丁三人の案内人がいたことがわかる。案内人は、蠟燭の用意や腹帯の着用を求めたという。礎山も、蠟燭のほか、膝にも草鞋を付け、身支度を整えている。宮崎紋吉は、使用した襷は持ち帰って妊婦の腹帯とし、使いかけの蠟燭もお産のときに用いる習慣があったと記している(『富士中道巡』)。

現在、洞穴の開口部には、これを覆うように無戸室神社の社殿が建っている。先にも見た(A)「真景之図」の「御胎内洞口」や(B)「富士一山北口明細御絵



【図1】

図面(本書口絵10、「富士山明細図」の異本)の「父母御胎内」の小屋掛は、その後身と考えてよいだろう。また、(A)は小屋掛背後の高まりの上、(B)は開口部の上部に、それぞれ錫杖を携えた地藏坐像を描く。現在、社殿左前方に所在する知拳印を結ぶ大日如来坐像(石造物No.1)に該当するのだろうか。⁽²⁷⁾

小屋の脇には長大なナガキ(長木)が立てられ、流旗が風に翻っている。宮崎紋吉は、登拝途中に中ノ茶屋と馬返の間で、西方半里ほどの位置に白旗二旒を認めて、「新旧胎内の目標」と記録している。旧胎内が船津胎内、新胎内は次項で見ると吉田胎内を指す。また、旧胎内から新胎内へ向かう際、道に迷い、白旗を目印にしたとも述べている。なお、宮崎は堀の近くにある茶屋については記していないので、明治三十七年の時点ではすでに廃絶していたものと思われる(以上、「富士中道巡」)。

②「母の胎内」と「父の胎内」

現在の胎内(国指定天然記念物としての指定名称は「船津胎内樹型」)では、無戸室浅間神社の社殿が掛かる洞穴を「胎内」と通称している。最も大きく長大であることから「本穴」ともいう。東向きに開口し、一連の洞穴のなかに、それぞれ「母の胎内」「父の胎内」と呼称される部分がある。しかし、社殿(本穴開口部)へ向かう参道と町道の交点近くには、万延元年(一八六〇)造立の石造物が立つ(No.13)。「両御胎内道」と刻まれていて、二つの胎内があったことを示している。

社殿の北東方二〇メートルの場所には、明治十五年造立のNo.10が立ち、正面を社殿に向け、左面に「元之父様御胎内道」、右面に「泉源御胎内道」と刻んでいる。右面下部に刻まれた矢印は、北東を指し、これにしたがい小道をたどると一〇〇メートルほどで「泉源たい菩薩」「たい様御胎内」ほかの銘文を刻む石造物No.11および第16号溶岩樹型に到達する。No.11および16号溶岩樹型への誘導は正確で、No.10の向きは造立当初から変化していないものと思われる。したがって右面に刻まれる「元之父様御胎内道」は、南西方向に向かっていたと想定される。

古い溶岩樹型の位置図を確認すると、1号溶岩樹型が昭和六十一年(一九八六)頃開通した町道に重なり、現在ではその痕跡が確認できなくなっていることに気づく。本穴から始まるでもなく、また西端からでもなく、通番の付し方にとくに規則性は認められない。比較的規模が大きなもの、重要なものを1号として、順次その周辺の樹型に付していったのではないか。本穴(「母の胎内」)に次いで重要と考えられた「父の胎内」が1号とされた可能性は高いと考える。

先述したNo.13「両御胎内道」は参道へ分岐する地点にあったものと考えられ、道路拡幅にともない若干の移動はあったにせよ、おおむね原位置を保っていると思われる。この傍らに「ち、様御胎内」と刻むNo.12がある。前に見たNo.11と16号溶岩樹型の位置関係を見ると、No.12は「父の胎内」の傍らに置かれていたとみるのが適当だろう。町道の建設により失われた旧1号溶岩樹型こそ「父の胎内」で、その所在を示す石碑のみ、No.13の西方に移し残されたのではないだろうか。

さて、礎山の「富士の道の記」(天保十四年(一八四三))は、「父の胎内」には触れていない。これに対し、「父の胎内」に加え「母の胎内」を併記するのが、安政二年(一八五五)に登拝した上野国邑楽郡狸塚村(群馬県邑楽町)の出井政司が残した「富士道中小遣覚帳」である。⁽²⁸⁾「上文司」「小御嶽札」の記載があり、政司が吉田口から登拝したことは疑いない。⁽²⁹⁾ここでは、彼が「父胎内」「母胎内」の双方へ十二文ずつ「参銭」したとする記述に注目したい。「父の胎内」と「母の胎内」、それぞれに奉納したと考えるのが妥当ではないだろうか。

現在、船津胎内に所在する石造物No.12「ち、様御胎内」(天保十三年)、No.10「天保十四卯年七月二日定之」「元之父様御胎内道」、No.13「両御胎内道」(万延元年)といった刻銘を見ると、天保の末年(天保十五年)に改元して弘化元年に「母の胎内」(本穴とは別に「父の胎内」が存在する)とする考え方が生じたように見てとれる。これは、先の出井政司の記録とも矛盾しない。

三 吉田胎内

船津胎内に対して「新胎内」と呼ばれる吉田胎内(◇3)は、剣丸尾溶岩流の東縁部に所在する。船津胎内(旧胎内)からは、南東方へ七〇〇メートルほど隔たっており、胎内潜の対象とされた本穴のほか、六十余の中小溶岩樹型からなる。

船津胎内を開いた高田藤四郎が組織した丸藤講の流れを汲み、埼玉県入間郡宗岡村(志木市)を拠点にした丸藤宗岡講社の八代目先達星野勘蔵(行名を日行星山)が、この地に着目、信仰の場とした。明治二十五年(一八九二)六月のこととい⁽³⁰⁾う。

先ほどからたびたび引く『富士中道巡』によれば、宮崎紋吉は明治三十七年八月四日に船津・吉田の順で両胎内を巡拝している。紋吉は、吉田胎内で「事務執り」を務める神官が、「此穴は古く元祖の書物にあれど、発見せしは明治二十四年」のことだと語ったと書きとめている。新胎内の発見により、旧胎内が二十七年頃に「中止」となり、のちに再び開いたものの、八丁(約八七二メートル)ほど遠いため、旧胎内へ足を向けることはなくなつたとして、「余のやうな物教寄か旧慣の老耄でなければ、両方へ行く者はなしだ」と述べている。また、堀(西大堀)まで戻れば、中ノ茶屋、吉田町の双方へ道が通じており、同堀が「賽の河原」と呼ばれていたと加えている。

いずれにせよ、吉田胎内(新胎内)に対する信仰が始まったのは、明治二十四(二十五)年のことであり、当然のことながら、同二十年測量(二十四年出版)の明治二万地形図「剣丸尾」には、当胎内やこれに通じる道については記載がない。

四 精進御穴

(一) 精進御穴と誓行徳山

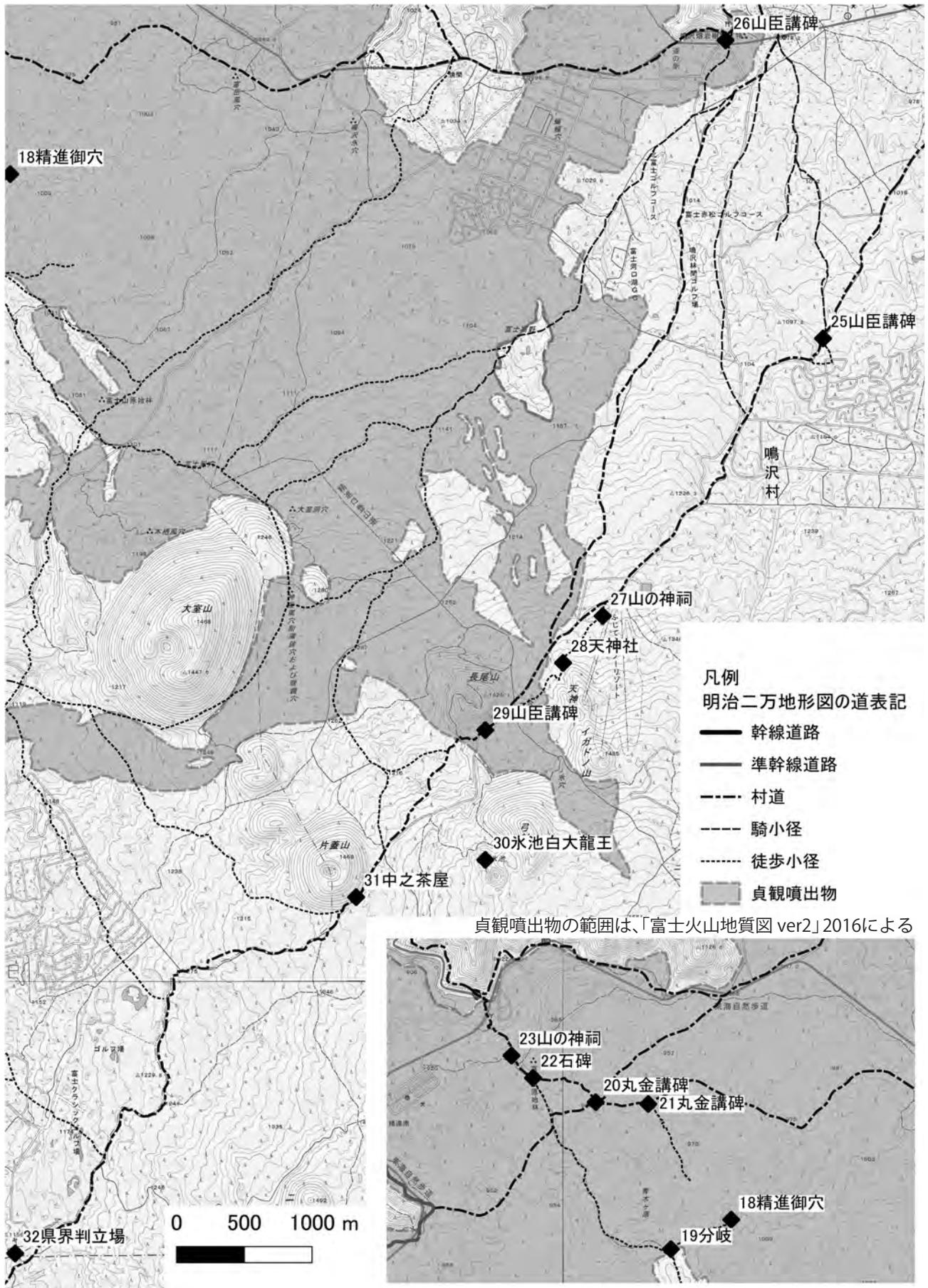
相模国高座郡上溝村(相模原市中央区)に鎮座する柴の宮仙元宮の神職であった門倉佐中(行名を誓行徳山)は、文政十年(一八二七)正月に精進村に赴いた。

村人の案内により洞穴(精進御穴、◇18)を知ると、この年閏六月から翌七月にかけて、同所において断食行を行った。洞穴の存在は、地元では以前より知られていたらしい。さらに六年後の天保三年(一八三二)八月、洞穴内に籠もり飲食を絶つて入滅した。食行身祿の百回忌にあたる。これ以後、御穴は徳山の組織した山臣講の信仰の場となつた。⁽³¹⁾ 洞穴の周囲には、開山徳山、二世賢鏡、三世善明を顕彰する石塔などが立っている。⁽³²⁾ 数年前までは日蓮宗の修行者小林日峰氏とその関係者が同所の小堂に住み、誓行徳山の木像(慶応元年(一八六五)造立)を護持していたというが、現在では無住である。

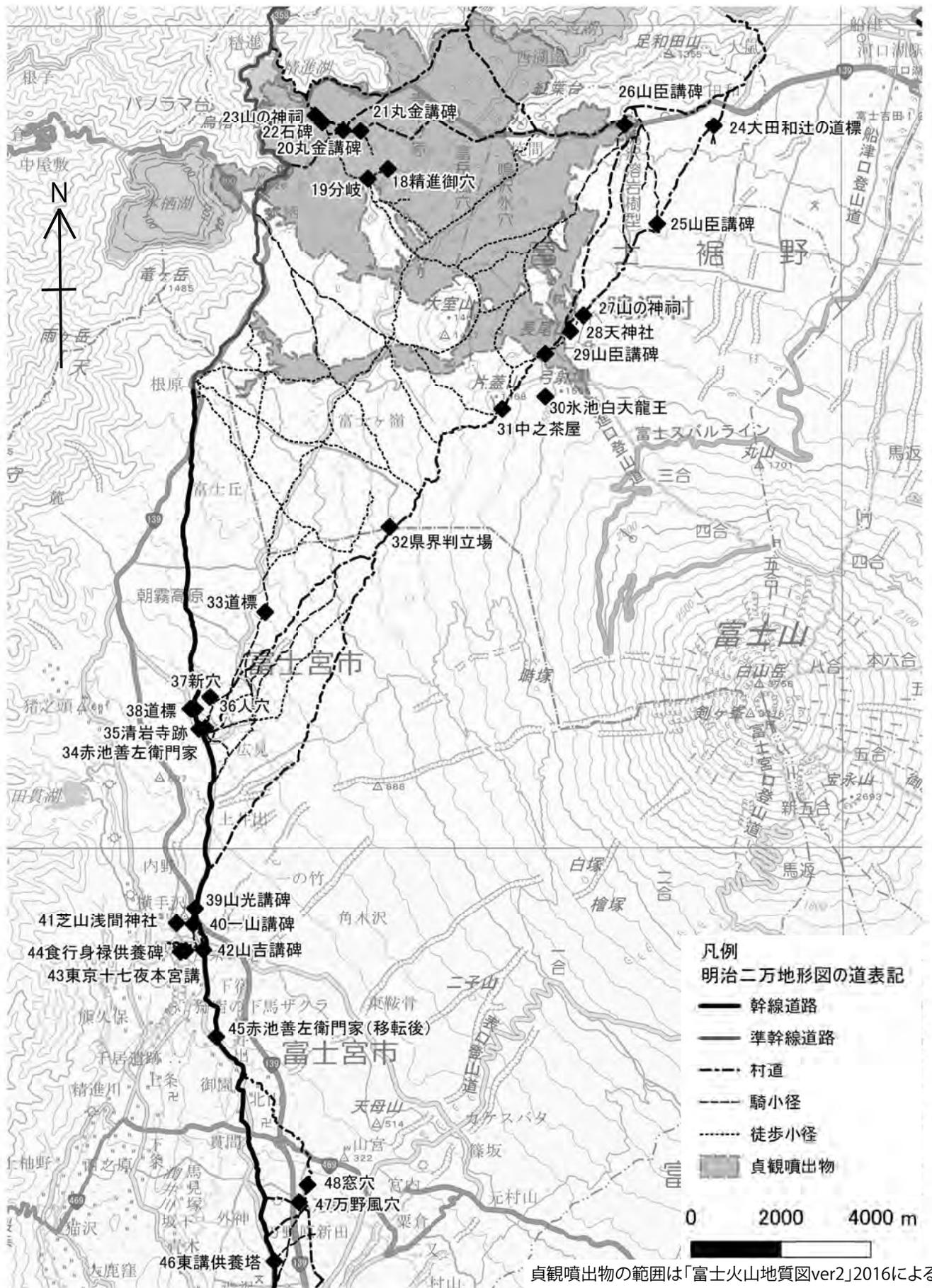
(二) 精進御穴へ通じる道

精進御穴(◇18)は、青木ヶ原樹海の最深部に位置している。現在では、大正十二年(一九二三)に開設された精進口登山道を進み、山の神の祠(◇23)の前を通り、東海自然歩道を跨ぎ、◇19で分岐して東向する道が使われている。

国道一三九号は、富岳風穴から御殿庭まで一直線に樹海を横断しているが、明治二万地形図を見ると、樹海の中を鳴沢村から上九一色村本栖へ向かう「村道」がある。⁽³³⁾ この「村道」沿いの◇20には、明治三十年(一八九七)に丸金講が造立した道標が立つ。四面に刻銘があり、それぞれ「此方しやうじ道」(精進道)「此方ねんばみち」(根場道)「此方なるさわ道」(鳴沢道)「此方もとすみち」(本栖道)と判読できる。ここで精進村から鳴沢村へ通じる「村道」と西湖村の根場から御殿庭を経て本栖村へ向かう「村道」が交差しており、石碑の表記と合致する。◇20の五〇〇メートル東方には、同じく丸金講の手になるもう一基の道標が立っている(◇21)。⁽³⁴⁾ 先のもと同様、明治三十年の造立で、「右ハきようは道」(行場道)、「左ハなるさわ道」(鳴沢道)と判読できる。途中で途切れるが、ここから南東方の精進御穴に向け「徒小径」が延びていた(明治二万地形図「西湖」「大室山」)。◇22に立つ道標は、下部を大きく欠損するが、三面に刻銘があり、それぞれ「左な」⁽³⁵⁾「右も」⁽³⁶⁾「しやう」⁽³⁷⁾と見える。◇23山の神祠から◇19に通じる道は、精進口登山道として整備されるところとなつた。これを精進村から上つてきたと



【図2】



【図3】

きに、鳴沢(左)、本栖(右)双方への分岐を明示するために建てられたものと思われる。◇20・◇21を経て東西に通じる道は、国道一三九号が造られる以前の主要道であり、その重要な分岐点に石碑が用意されたものと考えられる。

◇20から根場へ至る「村道」は、縄状溶岩の中を進む。洗濯板の上を進むような起伏の激しい道だが、人が歩く幅だけは溶岩塊が除かれていて、道の痕跡をある程度たどることができる。他の三方への「村道」は、路肩の一部に溶岩を積んで補強していて、林業等のための作業道として拡張整備した痕跡が認められる。◇21から精進御穴に向う道は、明治二万地形図では「徒小径」となっているが、先の三方への「村道」と同様に、拡張整備されている。⁽³⁵⁾

五 神野路

(一) 鳴沢から甲駿国境まで

甲斐と駿河を結ぶ四筋のひとつに、甲府盆地から鳥坂・大石の両峠を越えて、河口湖北岸の大石(富士河口湖町)に至り、富士山西麓を富士郡へ通じる道がある。「甲斐国志」は大石までを「若彦路」と呼び(巻一)、成沢村(江戸時代は「成沢」の表記が一般的、鳴沢村)の枝村大田和と人穴・上井出(ともに静岡県富士宮市)を結ぶ道について、「中ノ金王路」(巻一)、「神野路」「中ノコンノウ」(巻五三)といった呼称を記している。この道筋については、すでに(山梨県歴史の道調査報告書)⁽³⁶⁾ほかの調査報告がある。なお、静岡県側では「郡内道」と呼んでいる。

地図上では、鳴沢村と人穴・上井出を一直線に結んでいる。鳴沢村役場から人穴の人穴富士講遺跡までの距離は、約二キロメートルほどである。丸尾(貞観噴出物)の広がり避けて、噴出口の付近を進むことになる。ただ、途中に人家はなく、夏に中之茶屋があるだけで、水を持参しないと通り抜けられないという。⁽³⁷⁾第二次大戦後の食糧難の時代には、この道を使ってヤミ物資が運ばれたという。

鳴沢村の枝村大田和の辻(◇24)には、道標の役割を兼ねた念仏供養塔が立つ。

人穴の方向(南西)を指し示していて、その役割は大きい。左方(南)へ進むと、少し先で山仕事の道二本に分岐する。これらへの迷い込みを防ぐためのものと考えられる。

鳴沢村釜の口に明治二十二年(一八八九)造立の富士講碑が立つ(◇25)。鳴沢村本村からの道が神野路へ接続する地点に位置しており、鳴沢村の山臣講中が「三十三度大願成就」を期に建碑するには、相応しい場所といえる。

鳴沢の西端、前丸尾(信号「天神山入口」、◇26)の富士講碑は、表面の風化が進むが、「水池白大龍王霊神 開山誓行徳山」と判読できる。ここから字大坂を経る(大坂道)が南行し、天神社付近で神野路に接続したものと思われる。

神野路は、天神峠付近では鳴沢林道に部分的に付け替えられて整備されている。旧道は南側に痕跡をとどめ、山の神と天神社の石祠が残っている(◇27・◇28)。

天神峠の近傍、神野路脇に立つ富士講碑は、精進御穴の項で詳述した誓行徳山の事跡を顕彰したものである(◇29)。中道巡を十度果たしたこと、木立境の巡行を終えたこと、「十六海垢離」(内八海・外八海での水垢離)修行を執行了こと、行場として水池や精進御穴を開いたことを称え、成沢村の山臣講の講中が建てた。文政十年(一八二七)の紀年銘があるが、同年は徳山が精進御穴に達したと伝承される年であり、実際の建碑はこれより降るのかもしれない。

天神峠の南方弓射塚に並んで水池と呼ばれる噴火口がある(◇30)。神野路から険しい急斜面を上り下りしないと到達できない噴火口の底で、白大龍王を祀っている。あるいは徳山が勧請したのだろうか。真夏でも水が涸れず、霧が漂っていることが多い。地元では、日照りのときは、この水池に雨乞いの祈願をするという。ここにも誓行徳山による開山を記した石碑が立つ。文化三年(一八〇六)の紀年銘がある。◇29の富士講碑と同様、成沢村の山臣講中による建碑である。先に見た◇26の富士講碑は、ここへの道しるべの役割を果たしている。

注目されるのは、誓行徳山を顕彰する富士講碑が立つ◇29地点である。明治二万地形図「大室山」「西湖」を見ると、大正十二年(一九二三)開設の精進口

登山道の記載こそないものの、天神峠付近から精進御穴へ向かって徒歩小径が延びていることに気づく。また、現行の二万五〇〇〇分の一地形図「鳴沢」では、氷池への分岐にほど近いことが見てとれる。徳山が開いた山臣講は、精進村や鳴沢村だけではなく、西島村（身延町）まで教線を拡大した。こうした村々をつなぐ道に沿って講社の活動を示す石碑が点在している。³⁸

地点◇31は、片蓋山の南東麓にあたる。ここには、かつて「中之茶屋」があった。文化六年に大田和の渡辺氏が造立した富士講碑が残る。四キロメートルほど進むと、甲駿国境（山梨・静岡県境）に至る（◇32）。「県界判立場」の石標（大正十一年七月設置）が立つ。国境をめぐる係争地ゆえ、道の傍らに設置されたものと思われる。山梨県有林の境界となっており、近くには境界見出標が設置されている。なお、「中之茶屋」の称は、大田和の辻（◇24）と人穴（◇36）の中間に置かれたため、このように名づけられたものと考えられる。

（二）甲駿国境から人穴まで

国境付近までは神野路の旧道をほぼたどることができるが、そこから南は、旧道に該当する道筋を見出すことができない。明治二万地形図「時塚」「人穴」では、二本線で描かれた「村道」が上井出の白糸ノ滝に向かって南下している。同図には、この道から西へ分岐し、人穴へ続く道があるが、現在の二五〇〇〇分の一地形図「富士山」「人穴」には記載がない。主要な道は、新道に付け替えられたとしても、旧道としての痕跡をとどめるのが普通だが、ここではそれさえないのである。古来使われてきた主要な道が消えているのである。

ここで思い当たるのが、太平洋戦争中に陸軍少年戦車兵学校の演習地となり、昭和十八年（一九四三）に人穴村全体が芝山へと強制移住させられたことである。³⁹ 演習場としてこの地域全体が、国の管理下に置かれたことと関わるように思われる。⁴⁰ 後述する赤池家も、このときに北山の辻坂へ移転している（◇34から◇45）。

さて、神野路は「県界判立場」（◇32）から一直線に上井出を目指す。人穴へは、これから分かれ西方へ向かわねばならない。この重要な分岐に立っていたといわ

れるのが、現在◇33に所在する宝暦八年（一七五八）の紀年を刻む道標である。⁴¹ 江戸の富士講や京都の町人により造立されたもので、「左八上井出みち」「右八人穴みち」の刻銘が確認される「碑塔No.二四〇」。⁴² 現在の場所に移された経緯は、はっきりしない。

人穴の洞穴人穴（◇36）⁴³ は、犬涼山溶岩流の末端の小高いところに位置し、集落はそれから一段低く立地している。洞穴人穴から旧参道を真っ直ぐに南下したところに所在したのが赤池家（◇34）である。人穴修行中の長谷川角行の世話をしたことを機縁に人穴の管理を担い、「御法家」と称されてきた。当主は代々善左衛門を称している。⁴⁴ 赤池家の旧地には、大正十四年と十五年に造立された二基の富士講碑が今も立っている「碑塔No.二三八・二三九」。道を挟んで東には清岩寺があった（◇35）⁴⁵。神野路から分れた村道は、清岩寺背後の急斜面を避けて、南に回り込んで中道往還に合流している（明治二万地形図「人穴」）。

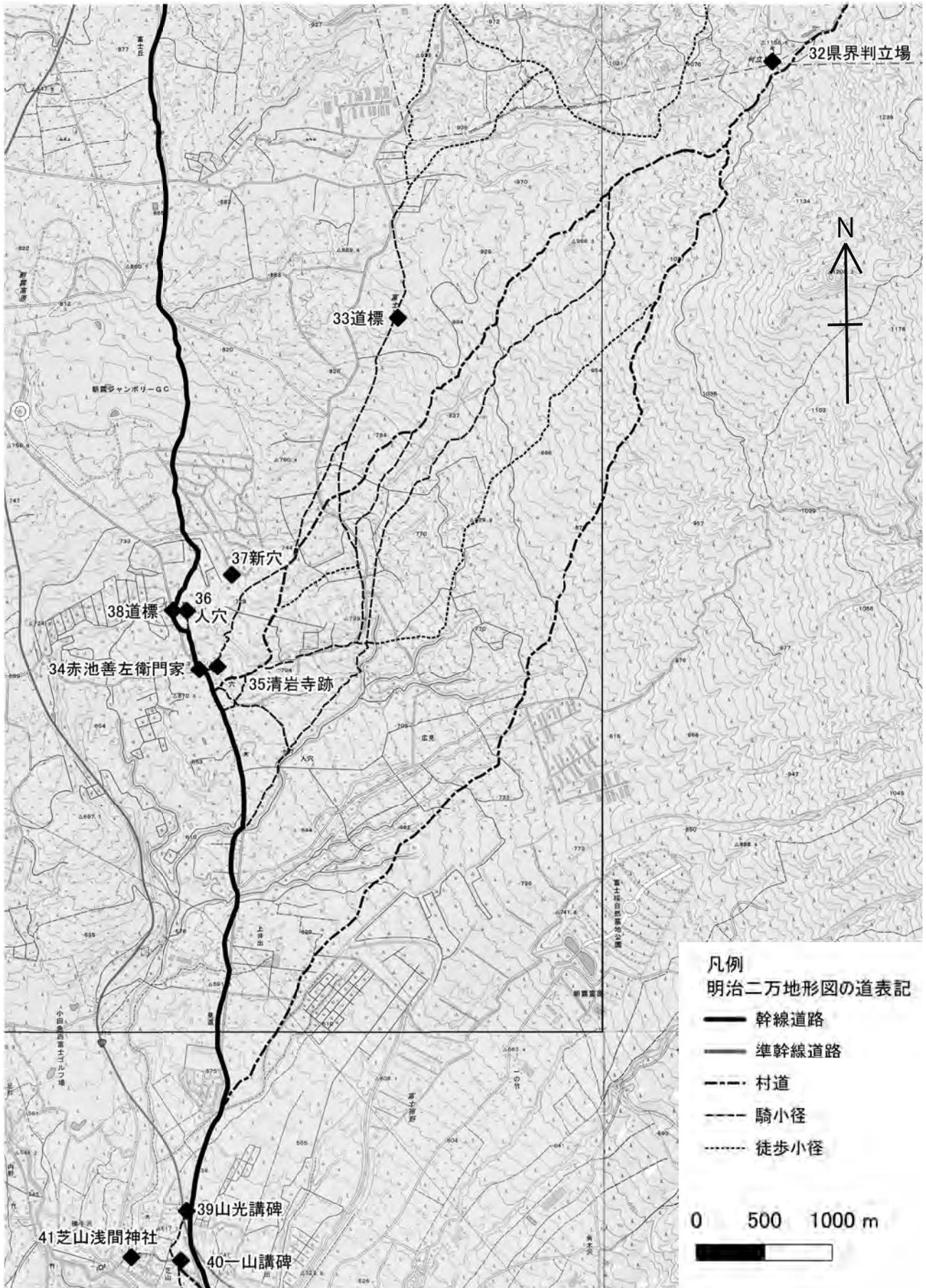
なお、人穴の北には、洞穴「新穴」があり（◇37）、開口部前に大我講による富士講碑が立っている（天保十五年（一八四四）銘）「碑塔No.二三四」。地点◇38には、大我講が建てた道標が立つ（年未詳）。「是乃しようとみち」（浄土道）と刻む「碑塔No.二二九」。新穴へ導くために設置されたものである。その北には、洞穴「姥穴」があるが、石造物は確認されていない。

（三）白糸ノ滝から万野風穴・窓穴へ

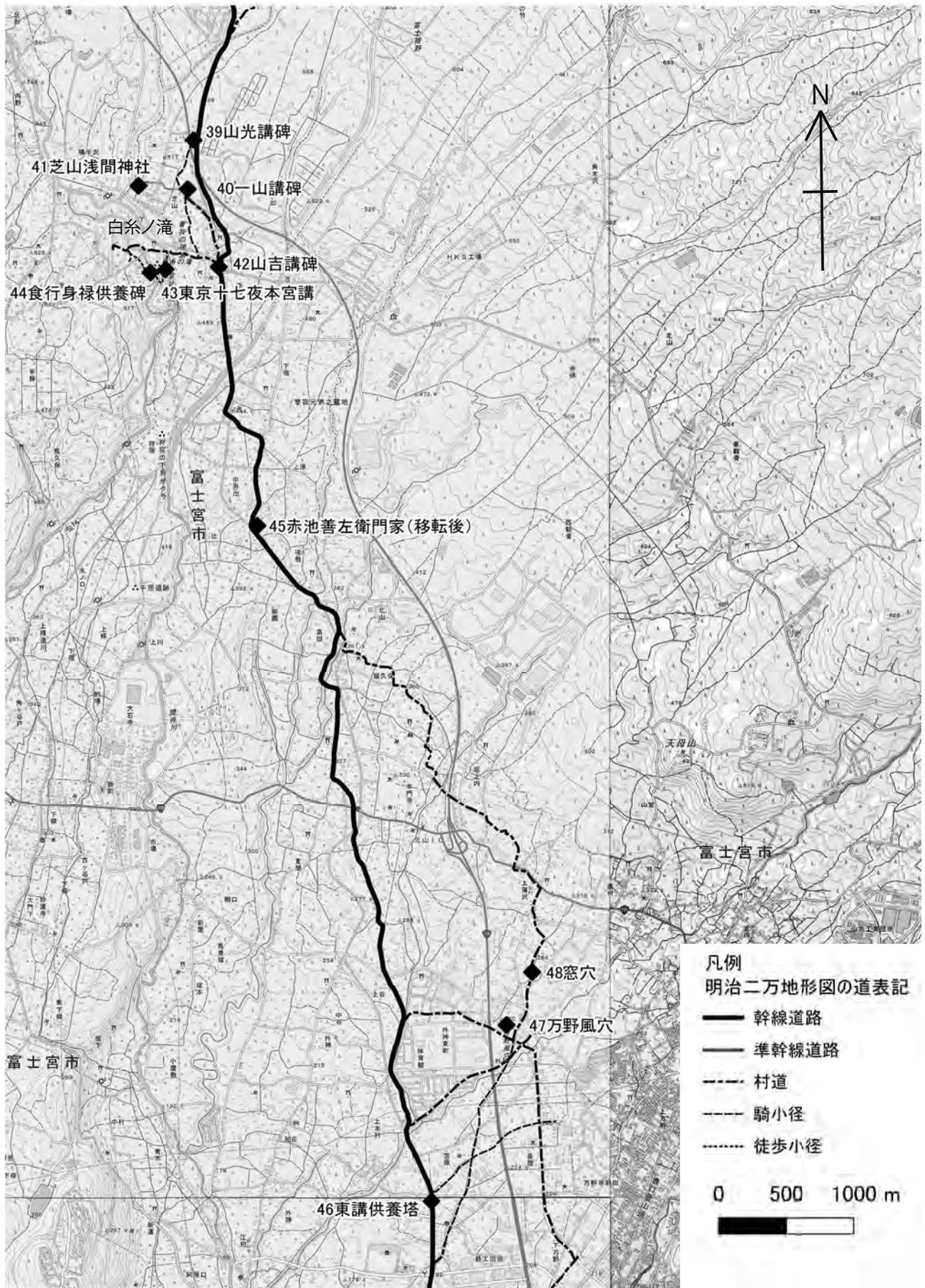
①白糸ノ滝

中道往還を南下し白糸ノ滝へ向かう分岐の近くに山光講の石碑があり（明治三十四年銘、◇39）、右方を示す指差印が刻まれていて、道標の役割を担っていたことがわかる「碑塔No.二四九」。また、民家の庭に移されているが（◇40）、一山講による富士講碑が残る（写真1）⁴⁶。これも白糸ノ滝へ向かう旧道沿いにあるものと思われる。

先述したように、昭和十七年に上井出に陸軍少年戦車兵学校が開校し、人穴は演習地となった。翌十八年、住民は強制的に芝山地区に移住させられた。その際、



【図4】



【図5】

人穴浅間神社を遷座したのが芝山浅間神社である(◇41)。ここには、人穴から移された石碑三基が立つ「碑塔No.二四六(二四八)」。このうち、No.二四七の石灯籠は、和州十市郡十市村(奈良県橿原市)の今沢長英の名を刻んでいる。人穴周辺の石造物の多くが、江戸を中心とする関東の富士講により造立されているなかで、関西在住者からの寄進物として注目される。

中道往還から白糸ノ滝への分岐点となる三叉路には、目印にふさわしい黒松の大木があり(◇42)、根本に富士講碑が立つ(山吉御水講の造立、明治三十五年)「碑塔No.二五二」。また、白糸ノ滝の滝壺へ下る手前に(◇43)、東京十七夜本宮講による大型の石碑(大正三年)「碑塔No.二五〇」、滝壺の南西には(◇44)、江戸京橋先達が食行身祿の百年忌にあたり造立した石碑が「碑塔No.二五一」、それぞれ立っている。

②赤池善左衛門家

赤池家は、芝山ではなく北山の辻坂に移住した(◇45)。昭和十八年に人穴から移築した建物(離か)や門が伝わる。建物の外観は改装されているが、屋内の設えは移築時の姿をとどめている。現当主によると、ここへ移ってから富士講の行者が訪れたという。行者の利便性を考え、中道往還に沿う辻坂に居を構えたのだろう。

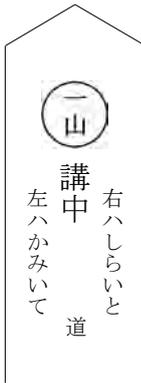
③万野風穴・窓穴

大宮(富士宮市)方面から中道往還を北上するとき、万野風穴(◇47)へ分岐



【写真1】一山講による道標

富士宮市上井出



する往還脇に江戸東講造立の富士講碑一基(文政二年)が立っている「碑塔No.二五三」。原位置からは、南へ約二五メートルほど移動していると聞いた。万野風穴の入口付近には、供養塔一基、石仏二体が残る「碑塔No.二五四(二五六)」。いずれも、東講所縁の品である。一方、窓穴(◇48)の道路脇には、東京十七夜中宮講の供養塔がある「碑塔No.二五七」。狩宿の下馬ザクラの保護柵(大正三年設置)の内側にも、富士講碑があったとの記録がある。

おわりに

明治二万地形図と赤色立体地図に、字界や富士火山地質図などの情報を重ね合わせて検討することは、有効であったと考える。そのうえで、巡礼路であることを確定するためには、造立時期を特定できる紀年銘を有する石造物の確認は不可欠であった。これらの作業から見えてきたのは、石造物を盛んに造立した富士講行者の信仰であった。期せずして、江戸を中心とする経済力のある富士講、吉田の御師が且家とした講社の活動を追跡することとなった。

道者の残した記録を見ると、登拝にあたっては強力を兼ねた案内人をもたうことこそあるものの、講社のメンバーだけで巡礼するのが通例だったらしい。いくら先達が率いるとはいえ、初心者を含む集団的な巡拝では、主要な道筋を選んでいたものと思われる。村内の辻や山仕事のための道が縦横に走るところでは、先達といえども道標を頼りとしただろう。石碑を建てた者は、自身の大願成就や信仰の証を道行く者へ誇示し、かつ道標の役割を果たすことを念願したと思われる。また、これを見た者は自らの採るべき道を知り、かつ先人の大願成就を知ることになったのだろう。今回の調査を通じて、石造物は信仰の拠点、もしくは重要な道の分岐点に建てられることが多いという事実を確認することができた。

記録類については、できうるかぎり目を配ったつもりだが、論及したものの中には、かにも多数存在しているはずである。今後も情報収集に努め、巡礼の実態を解き明かす作業を続けていきたい。

- (1) 「神野路」(巻五三)。「大日本地誌大系」(全五巻、雄山閣、一九六八〜八二年)に拠った。
- (2) 大日本帝国陸地測量部。「蠟嶽」「西湖」「河口湖」「龍嶽」「大室山」「剣丸尾」「人穴」「罾塚」「富士山」「天子嶽」「安母山」の十一葉を用いた。
- (3) QuantumGISのGeoreferencerツールを利用し、明治二万地形図上と最新の国土地理院二五〇〇分の一基盤地図の共通点を見出し重ね合わせていくばくか補正した。詳細は、拙稿「地図革命―遺跡情報をQuantumGISで集成する方法―」(『山梨考古論集』Ⅷ、山梨県考古学協会、二〇一四年)を参照されたい。
- (4) 『富士吉田市史』史料編五(近世Ⅲ)(一九九七年)、史料三三。
- (5) 以上、堀内眞「富士信仰の民俗」(『富士山―山梨県富士山総合学術調査研究報告書』、山梨県教育委員会、二〇一二年)による。
- (6) 中村章彦「古文書に見える船津の富士信仰」(シンポジウム「世界遺産富士山の構成資産・参詣道と富士河口湖町―富士に集う道・富士に登る道―」レジュメ、二〇一六年)。
- (7) 伊藤堅吉「胎内」(『河口湖畔船津今昔物語』、井出公濟、一九五二年)。
- (8) 津屋弘達「富士火山地質図」(『富士山―富士山総合学術調査報告書』)別冊、富士急行株式会社・財団法人堀内浩庵会、一九六八)。
- (9) 堀内眞氏のご教示による。
- (10) 中村章彦前掲註(6)レジュメ。
- (11) 『富士山』下(巻二四)。「修訂駿河国新風土記」(全二巻、国書刊行会、一九七五年)に拠った。
- (12) 『富士山―山梨県富士山総合学術調査報告書2』(資料編(山梨県富士山世界文化遺産保存活用推進協議会、二〇一六年)に翻刻。同家には天保九年の「富士登山人改帳」が合わせて伝わるが、これには「胎内行」「吉田行」のほかに未記入の道者も散見される。未記入の理由、たどった経路は判然としない。なお、天保九年の「改帳」は、『河口集落の歴史民俗的研究』(山梨県立博物館調査・研究報告7)(山梨県立博物館、二〇一四年)に翻刻がある。
- (13) 『須山家文書』(川崎市民ミュージアム蔵)。「史跡富士山 人穴富士講遺跡調査報告書」(富士山教育委員会、二〇一七年)に翻刻。
- (14) 『富士の道の記』(新潟大学附属図書館「佐野文庫」蔵)。菊池邦彦「富士山御師外川家に泊まった人々―『富士の道の記』の紹介―」(『MARBURI』(富士吉田市歴史民俗博物館だより)三六〜四〇号、二〇一一年)が、原文の一部を翻刻するほか、その内容を詳細に報告している。
- (15) 『烏帽子岩大願成就八海修行』(津久井郷土資料館蔵)。中嶋信彰(資料翻刻)『烏帽子岩大願成就八海修行』―もう一つの女人登山―(『あしなな』二五九・二六〇輯、二〇〇一年)が翻刻するほか、竹谷敏負「天保三年八月十七日の女人富士登拝―『烏帽子岩』大願成就―」(『富士山と女人禁制』岩田書院、二〇一一年)が詳細に解説する。
- (16) 個人蔵。
- (17) 岩科小一郎「富士山道中」(『富士講の歴史―江戸庶民の山岳信仰―』名著出版、一九八三年)。
- (18) 宮崎紋吉「富士中道巡」(私家版、一九〇五年)。宮崎の中道巡については、拙稿「御中道の変遷」(『世界遺産 富士山』(山梨県立富士山世界遺産センター研究紀要・山梨県富士山総合学術調査研究報告)第一集、二〇一七年)を参照願いたい。
- (19) 個人蔵。本書口絵1。
- (20) 富士吉田市歴史民俗博物館蔵。前掲註(4)書、史料三〇。
- (21) 前掲註(14)「富士の道の記」。
- (22) 『富士山真景之図』は、實行教本廳蔵。岡田博校訂・解説『江戸時代参詣絵巻富士山真景之図』(名著出版、一九八五年)が影印を掲げ、翻刻するほか、前掲註(4)書にも翻刻、挿図の掲載がある(史料29)。
- (23) 明治二万地形図の図式には「騎小径」の記載がある。しかし、残念なことに、これ以降の表記はなくなる。
- (24) GIS(地図情報システム)上でルートをたどり計測した。以下も同様。
- (25) 個人蔵。「富士山明細図」(富士吉田市歴史民俗博物館 企画展図録(富士吉田市歴史民俗博物館、一九九七年)が全葉をカラー図版で紹介している。なお、本書口絵10に掲げた「富士山北口明細御絵図面」はその異本である。
- (26) 現在では、剣丸尾溶岩流上にも樹木が生育し、この記述ほどには景観の差は感じられない。
- (27) 船津胎内(無戸室浅間神社境内)に散在する石造物については、本書所収「船津胎内石造物調査報告」を参照願いたい。本稿の石造物番号(Na)は、同報告のそれに一致する。
- (28) 「出井家旧蔵文書」。西海賢二「富士参詣日記に民俗を読む」(『旅と祈りを読む』臨川書店、二〇一四年)に翻刻がある。
- (29) 慶応三年(一八六七)の「西側惣御師持旦家取調帳」(『外河家文書』、前掲註(4)書、史料二九九)は、上文司淡路守の檀那所のひとつとして、上州邑楽郡の三四カ村をあげる。
- (30) 以上、「天然記念物 吉田胎内樹型保存管理計画」(富士吉田市世界遺産推進室、二〇一〇年)

- による。
- (31) 以上、岩科小一郎「村上派系譜」(前掲註17書)。
- (32) 精進御穴に所在する石造物については、本書所収「精進御穴所在石造物調査報告」を参照願いたい。
- (33) 明治二万地形図の図式による「村道」。実線と波線の二重線で道を表記している。
- (34) ◇21地点には、丸金講造立の道標のほか、横倒になっている名号塔が所在する。詳細については他日を期すが、「南無阿弥陀仏 山臣講 道供養 天保十五年」などの刻銘が確認された。
- (35) ◇21地点から途中までの踏査にとどまっている。これについても、他日を期したい。
- (36) 『若彦路』(山梨県歴史の道調査報告書)第八集、山梨県教育委員会、一九八六年、榎原功一・室伏徹「若彦路」(前掲註12書)。
- (37) 鳴沢村にお住まいの方からの聞き取りによる。
- (38) 深沢広太「四尾連道・本栖道」(前掲註12書)。
- (39) 『史蹟人穴』(富士宮市教育委員会、一九九八年)
- (40) 通常では公道として、民地から蚕食されないよう厳密に区別されるのだが、演習場として全体が公有地となったのだろう。このため、公道という認識は希薄なものとなったと思われる。道を使ってきた住民もいなくなり、その役割も大きく変質したとみられる。
- (41) 伊藤昌光氏のご教示による。
- (42) 前掲註(39)書、碑塔No.二四〇。以下、同書掲載の石碑・石塔については、本文中に「碑塔No.二四〇」と略記する。
- (43) 前掲註(13)書の表記に倣った。
- (44) 前掲註(39)書。
- (45) 清岩寺は明治初頭に廃絶し、その建物は人穴浅間神社の社殿に転用された。次いで、昭和十八年に人穴集落が芝山へ移転すると、同社殿も芝山の地へ移った。
- (46) 伊藤昌光氏のご教示による。
- (47) 前掲註(13)書。

【付記】 小稿にかかわる一連の調査にあたり、ご教示や資料の提供にあずかった伊藤昌光、伊藤忠正、佐藤法子、杉本悠樹の各氏に対し、深甚なる謝意を表す次第である。

第二部

調查報告

吉田御師・榎田家住宅調査報告

北川 洋

はじめに

吉田（富士吉田市上吉田）の御師榎田家については、これまでも歴史学あるいは建築史学の分野で数多くの調査・研究がなされている。なかでも昭和四十九年度（一九八四）に行われた山梨県民家緊急調査および追加調査等をまとめた『山梨県の民家』において、関口欣也氏が詳細な調査と考察を行っている。⁽¹⁾

今回は、改めて建物の実測調査をする機会を得たので、これまでの報告内容を確認しながら、建築史の立場から考察を試みる。

調査は平成三十年（二〇一八）九月二十日から二十五日にかけて、主屋の平面・立面・断面の実測と写真撮影その他を行った。また、所有者の榎田但人氏から、建物に関わる事柄についての聞き取りを行った。

なお、今回の調査は主屋に限っており、土蔵や中門、あるいは敷地全般に関しては、別の機会を待ちたい。

吉田御師

吉田御師は、富士登拝を支える御師のひとつで、富士山周辺には、吉田の他にも川口（河口、富士河口湖町）・須走（静岡県小山町）などに御師が集住したことが知られる。⁽²⁾ 詳細は他に譲るが、室町時代後期に集団的な登拝が盛んになり、さらに江戸時代中期以降は富士講が流行する。江戸をはじめ関東各地からの講中は吉田口登山道を利用することが一般的で、吉田が繁栄する一方、他の御師は比較的早い時期に衰退していった。吉田には最後まで御師が残り、現在もその面影をとどめている。御師の住宅が数多く残っており、そのうち小佐野家住宅・旧外

川家住宅が国の重要文化財に指定されているのは周知のとおりである。ちなみに小佐野家住宅は、榎田家の隣地にあたる。

概要

吉田町は、金鳥居から富士山へ向かって南行する「町通」（表通り）に沿って展開する。榎田家は南端に近い上町（上宿）の東側に位置する。町通に直行するタツミチと呼ばれる路地状の通路を進み、薬医門形式の中門に至る。門を潜るとマエノカワと呼ばれる小川（水路）にかかる石橋を渡る。その先には、すぐ北脇（左側）に土蔵が建ち、正面には主屋の表面が見える。

敷地は通りから奥に向かって非常に細長く、間口約十間半に對



【写真1】タツミチから中門、奥に主屋を望む

し、奥行きは四十間を測る。主屋の奥には、畑地が裏の道まで続いている。

主屋

張出部分を除くと間口（梁間）七間、奥行（桁行）十間で、切妻屋根の妻面を正面に向ける。その東南奥に向かつて、庇を除いて梁間二間、桁行五間の神殿部分が突出している。

屋根は、切妻の大屋根に、正面（西側）一間は庇となる。北側の増築部分は一部大屋根を葺き下ろし、その他は下屋となる。現在は金属板（トタン）瓦葺きで、一部庇は一文葺き、あるいは波形トタン葺きである。屋根勾配は約三寸七分ほどである。外壁は、下見板張りで、北側の増築部分は波板トタン張りである。基礎は、自然石独立基礎に柱立て、土台はなく、一間間隔の大引を束で支え、一階床根太も一間飛ばしになっている。

現状の主屋平面は、中門から正面南寄り二間幅の式台を上がると八帖間があり、式台左脇の中の口を入ると、土間から八帖間（二部板敷）に続く。それらの奥（東）には三間角十八帖の広間、その奥に十二帖と、鈎の手に北へ曲がって八帖間がある。広間には現在北面東寄りの一間に浅い床の間が付き、広間と十二帖の境は南寄り二間が四枚建ての襖、北寄り一間は書院風の障子が入って十二帖側からは丸窓になっている。鈎の手奥の八帖は、床の間・床脇・付け書院を持つ。玄関の八帖と広間の間から、十二帖・八帖の座敷を囲むように、コの字型に幅一間の縁が回る。

一方、中の口土間と八帖の北側には、現在台所と居間として使われている十二帖のスペースがあり、広間の北側にはかつて「イマ」と呼ばれた八帖間と四畳分の納戸がある。そのさらに北側と奥の八帖の北側は、現在は廊下状の物置となっていて、東側の縁につながる。

東南の十二帖の東には、縁を挟んで六帖・八帖と御神前の間の六帖が連なる。御神前手前の六帖と八帖には南側にそれぞれ床の間が付き、北側は半間幅の廊下

が付く。

中の口から台所にかけては根太天井となり、二階が乗る。玄関先の八帖と広間の間の廊下に階段があり、北へ向かつて二階へ上がる。中の口を入った土間と八帖の上に十二帖間があり、浅い床の間と押入を持つ。その南側すなわち玄関の八帖間の上は納戸となり、北側の台所側は、根太天井上で妻側に窓、登梁を入れて束を省いているが、現在は部屋として使われる状態にはなっていない。

変遷

横田家の現状は上記の通りだが、関口氏の調査から既に半世紀近くが経っており、その間にも改築があった。聞き取りによると、戦後に女子寮や民宿あるいは下宿しており、そのために広間から十二帖・八帖の間を小さく仕切っていた。昭和四十九年頃の山梨県民家緊急調査当時は、まだその状態だったが、その後営業を止めたのちに、それらの仕切りは取り払われ、旧状に近く復旧されている。また、八帖間の北側にあった便所は取り払われて納戸となり、玄関の八帖の南側の便所も改修されている。なお、玄関の八帖は、茶道教授のために床の間が付けられ、炬が切られている。

考察

十九世紀初頭成立の地誌「甲斐国志」は、元亀三年（一五七二）に東方の古吉田から現在地へ移転して吉田町が成立したこと、同書編纂時に移転時の古材を用いた住宅が現存していたことを記す。³⁾ 関口欣也氏も『山梨県の民家』において、当住宅が「古材木ノマ、二作りシ家」の一つに該当する可能性があると指摘している。実際、チョウナはつりの跡の見える柱が残り、平面においても方三間の広間を持つなど、古式を残している。

その他、部材の痕跡や小屋組などから判明した事実は、おおよそ関口氏の考察を追認するものとなった。柱間が約六尺であることなど、室町末期まで遡ること

に疑問が残るとい見解についても同様である。構造的なことなど解体してみないとわからないことも多く、残念ながら、新しくこれ以上のことを示す知見は得られなかった。

ただ、今回の調査では、小屋組全体が改変されながら、使われている小屋束のほとんどに番付がなされていることを確認した。新しい材料と同時に、再利用材（あるいは転用材）にも煤けた面を削って記されていた。東西については増築部分を除いた西から一間毎に「壹番」〜「九番」としながら、南北方向には南から北へ向け半間毎に「ゐ」から「の」「於」「く」と続いていた。「イロハ」と数字の組み合わせで縦横の座標を表す番付は一般的だが、「い」ではなく「ゐ」から始まる理由は判然としない。

おわりに

建物の保存状態に関しては、外壁や軸部、室内については、緊急を要する問題箇所は認められなかった。しかし、小屋組において、束や梁の仕口が緩んだり外れかかっている箇所が何か所も見られた。耐震等の観点から問題があると言わざるを得ない。

建設時期に関しては、当初部分は限られており、室町末まで遡ると言うよりも、その時期の部材が一部に使われていると見た方が良いかもしれないが、近世初期は下らないと考えられる。また、タツミチから中門、土蔵なども含めて屋敷全体の姿が良く保たれており、吉田の御師住宅の中でも、重要な位置を占めるものであることは確かである。

今回の調査では、あらためて建物全体を実測し、平面図の他に立面・断面図を作成することができた。しかし、建物の建設時期から変遷を辿るには、さらに踏み込んだ調査が必要で、大規模な修繕等の機会を待たなければならぬだろう。

最後に、今回長時間にわたる調査を快くお許しいただいた横田但人氏に謝意を表したい。



【写真3】 小屋束の番付「の七」



【写真2】 小屋束の番付「て五」

註

- (1) 関口欣也「横田栄氏宅」(『山梨県の民家』山梨県教育委員会、一九八二年)。
- (2) 拙稿「川口御師・梅谷本庄家住宅」(『世界遺産 富士山』(山梨県立富士山世界遺産センター 研究紀要・山梨県富士山総合学術調査研究報告) 第二集、二〇一八年)。
- (3) 「上吉田村」の項(巻一八)。「甲斐国志」は、『大日本地誌大系』(全五巻、雄山閣、一九六八〜八二年)に拠った。



【写真4】主屋正面



【写真5】中の口



【写真6】広間（18帖）



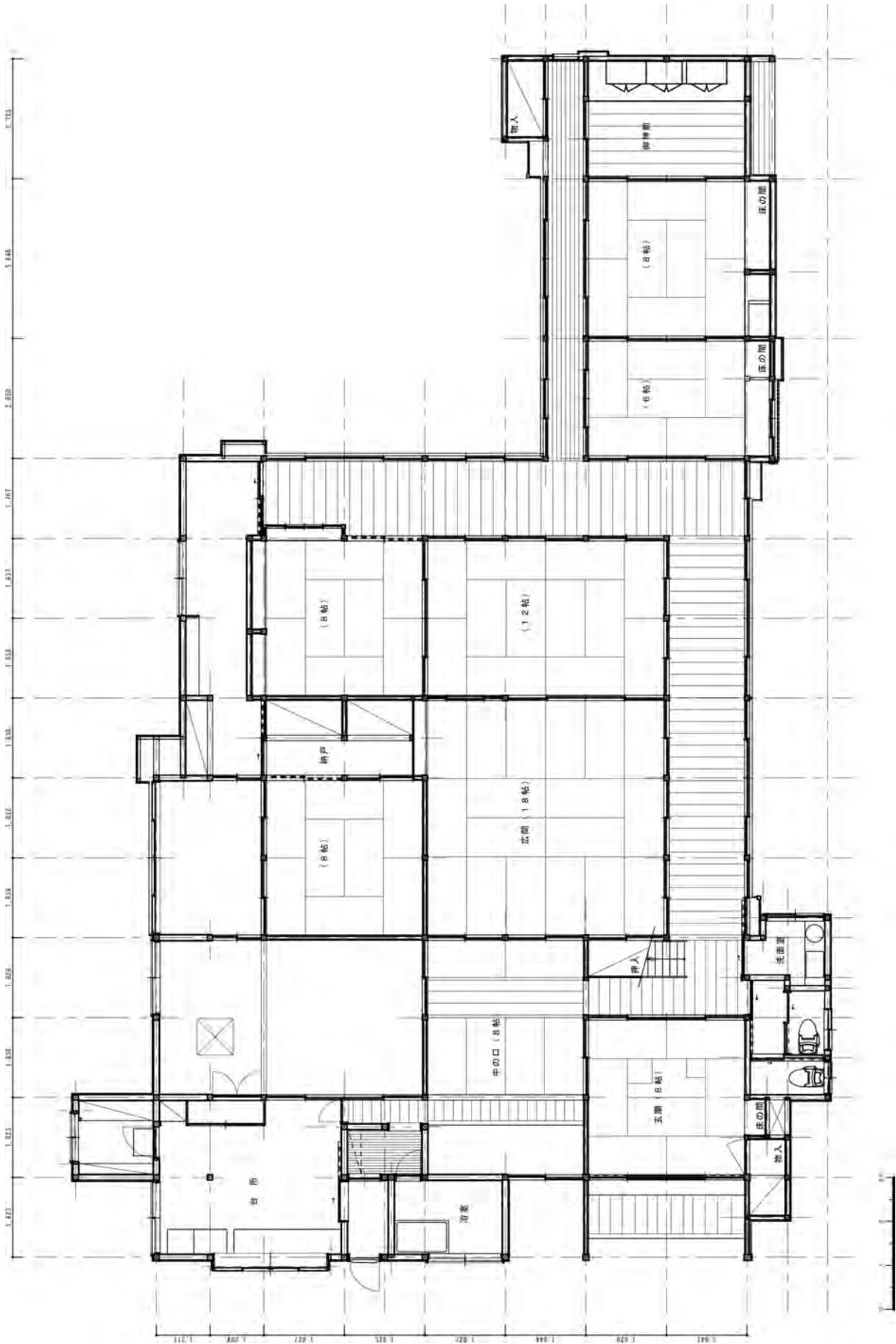
【写真7】南縁



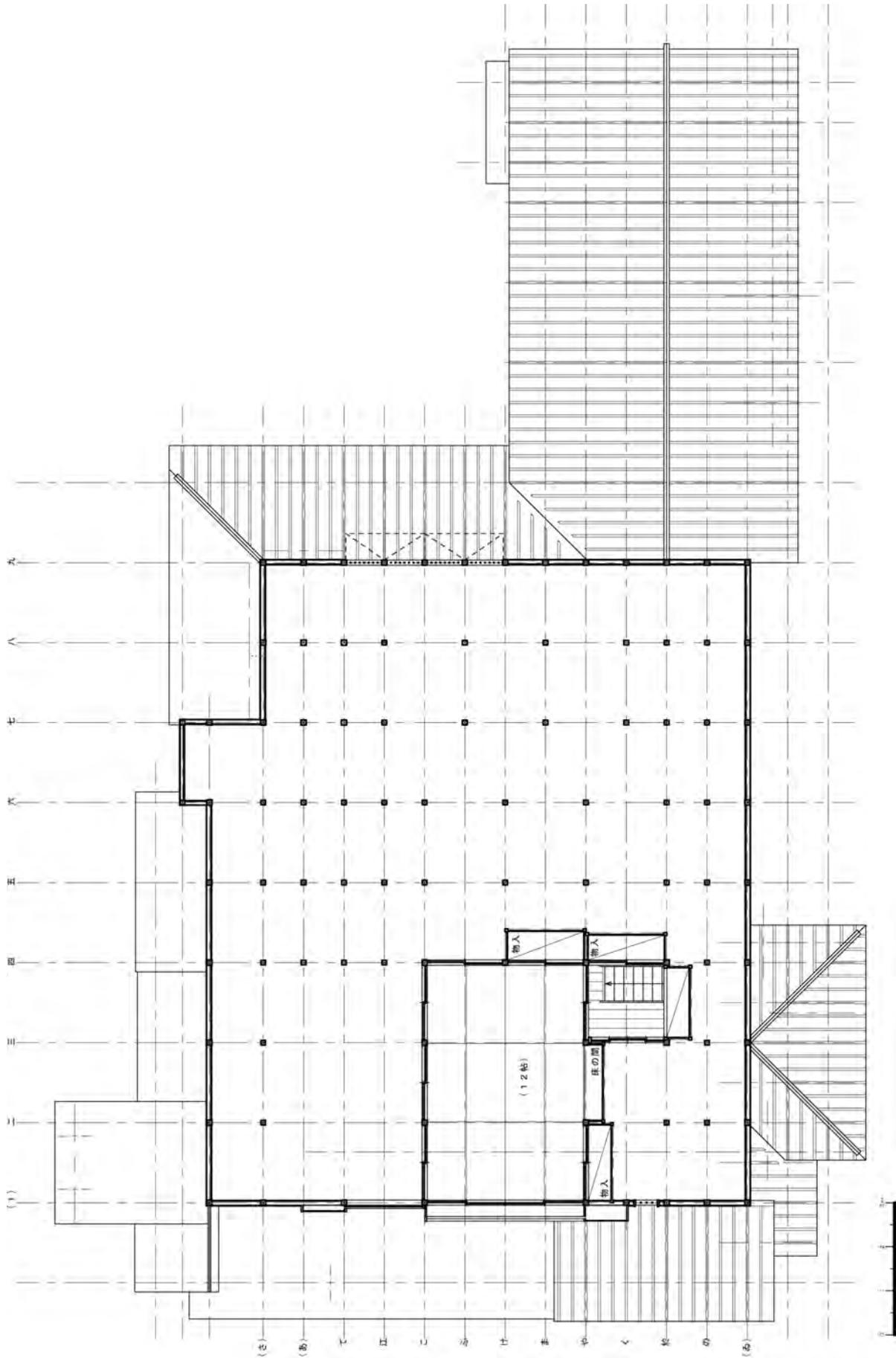
【写真8】御神前



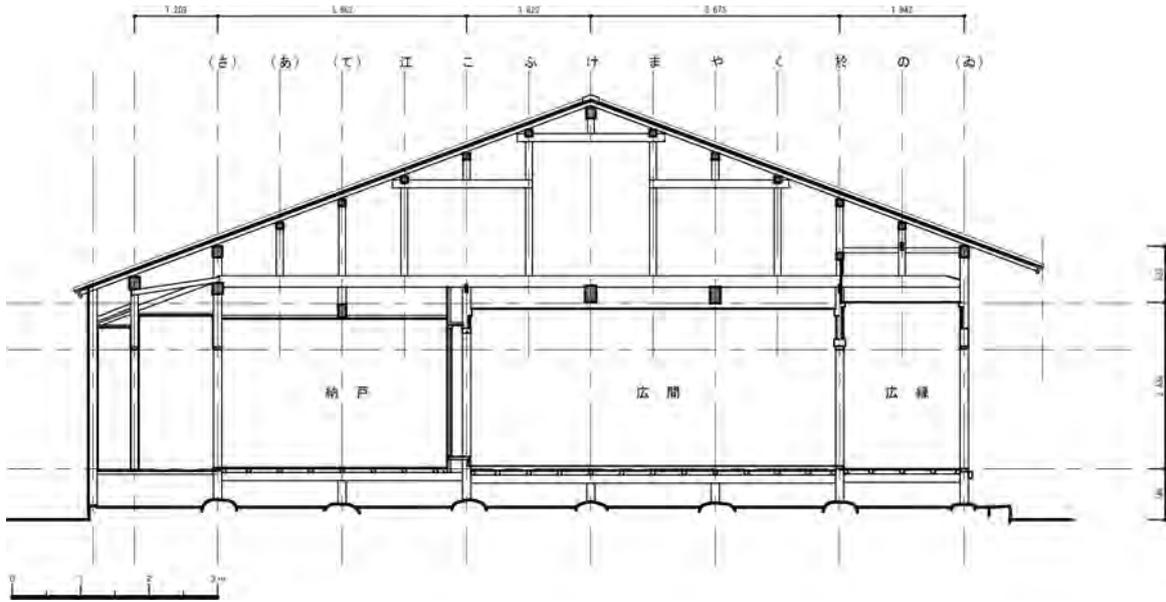
【写真9】小屋裏



【図1】1階平面図



【図2】 2階平面図



【図3】断面図（七通り）

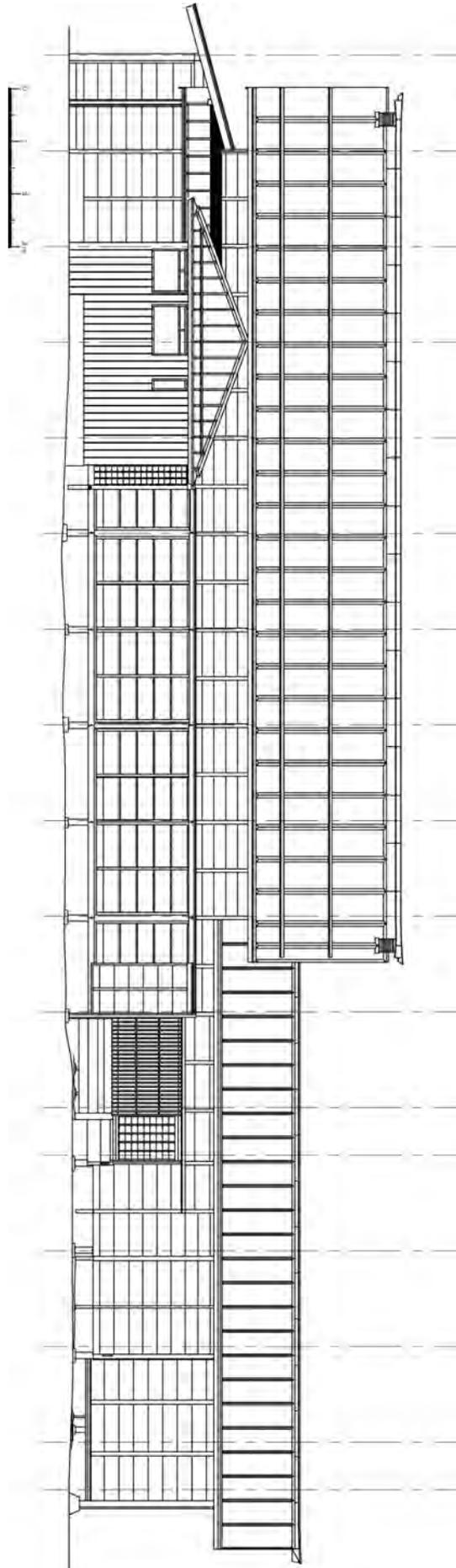


【図4】西立面図（正面図）



【図5】東立面図

【図6】南立面図（側面図）



船津胎内所在石造物調査報告

山梨県富士山総合学術調査研究委員会では、県立富士山世界遺産センターがその事務局を担うこととなった平成二十八年(二〇一六)以降も継続して、世界文化遺産登録時(二〇一三年六月)に世界遺産委員会から示された「山麓における巡礼路の特定」という課題に取り組んでいる。本年度は、富士山西麓に延びる「神野路」に焦点を当て、諸種の調査を実施した。古道の確認、ルート上に点在する石造物調査の過程では、この道筋が、北口の登拝拠点である吉田(富士吉田市上吉田)から南西麓の人穴や白糸ノ滝(ともに静岡県富士宮市)を目指した富士講行者にとって、きわめて重要なものであったことが明らかになってきた。詳細については本書所収の村石論文をご一読いただきたい。合わせて、同ルートに沿って所在する船津胎内(富士河口湖町船津)と精進御穴(同町精進)について、諸方面からの総合的な調査を開始した。本稿・次稿においては、そのなかから、一定の成果を見た石造物の刻銘にかかわる調査結果を報告する。

* * *

江戸時代、胎内が広く富士講行者の信仰を集めたことは、(A)「富士山真景之図」(弘化四年(一八四七)成立)の「御胎内洞口」^①や(B)「富士一山北口明細御絵図面」(嘉永三年(一八五〇)書写)の「父母御胎内」^②といった図葉から、うかがい知ることができる。また、胎内への参詣に言及した諸文献も少なくない。^③行者にとって胎内参詣の目的は、幕末から明治前期に活躍した浮世絵師五雲亭貞秀が「富士山胎内巡之図」^④に描いた胎内穴を潜る行為(胎内潜)にあった。先に言及した(A)・(B)両図からは、その入口に小屋が掛けられ、案内者があって、行者の応接にあたっていたことがわかる。

船津胎内所在石造物調査グループ

後年、胎内周辺は無戸室浅間神社の境内地として整備された。これにともない小屋は社殿となり、前方には朱塗の鳥居が建った。さらに改変点をあげれば、(A)が小屋の背後の高まり、(B)が胎内入口上部に、それぞれ描く仏像の安置場所であろう。(A)は「地藏」と注記し、(B)も錫杖を手にすることから、地藏菩薩坐像と認識されていたらしい。像容が異なることから完全に同定するには至らないが、現在社殿の右(南)前方に安置される大日如来坐像が、これに該当するとみられる(石造物No.1)。石仏が小屋(社殿)から切り離された背景には、神仏分離の影響が認められよう。この石仏を中心に七基(体)の石碑や石仏が確認できる(No.2~8)。

一帯は早くも昭和四年(一九二九)、「船津胎内樹型」の名で国の天然記念物の指定を受けた。八万平米に及ぶ指定地内には、胎内潜の対象となった胎内(中小の洞穴に対して「本穴」の称がある)をはじめ、中小含めれば都合四三の洞穴が散在している。洞穴の分布ほどではないものの、社殿付近以外にも胎内信仰にかかわる石碑が分布している(No.10~13、【図1】参照)。

無戸室浅間神社社殿前の石造物群のなかでひときわ巨大なのが、丸藤総講社が造立したNo.4である。表面上部に、食行身祿の直弟子で丸藤講を始めた藤井藤四郎(行名を日行青山)が、安永元年(一七七二)に「神洞」を発見し、形状にちなんで「胎内潜」と名づけ、^⑤同人の百年忌にあたり石碑を建てたことを刻んでいる。裏面には、八百余名の姓名(一部に屋号)を刻むが、なかには明治二十五年(一八九二、一説には同二十六年)に吉田胎内(富士吉田市上吉田)を開くこととなる丸藤宗岡講社の星野勘藏の名を見出すことができる。さて、先に

論及した大日如来坐像（No.1）は、基礎に安永三年の刻銘をもつ。藤四郎による発見の翌々年時点での大日像の造立は、あまりに早期の事業といえるのではなからうか。胎内信仰の始期については、なお慎重な検討が必要だろう。

社殿前石造物群中のNo.6、および点在する四基（No.10～13）の都合五基を造立しているのが丸明講である。これらの刻銘を総合すれば、武州式郷半領（埼玉県南東部）の温行六知（実名未詳）が、天保十四年（一八四三）に「元之父様御胎内」（No.10による）を、嘉永七年（一八五四）には「たい様」「泉源御胎内」（同）を「開いた」という。No.10・11には、「元祖食行身祿術御巻物之内」の「たい様（御胎内）」とある。身祿が著した「一字不説の巻」⁶の記述にしたがい、六知がこれら二つの胎内を新規に発見したとする記述と解釈できよう。本穴を中心とする丸藤講とは異なる胎内信仰の存在が想定される。胎内を「開く」ことに言及した天保二年の文書の存在も知られており（「井出家文書」〔富士河口湖町〕⁷）、胎内については諸分野からの総合的な研究が俟たれるところである。

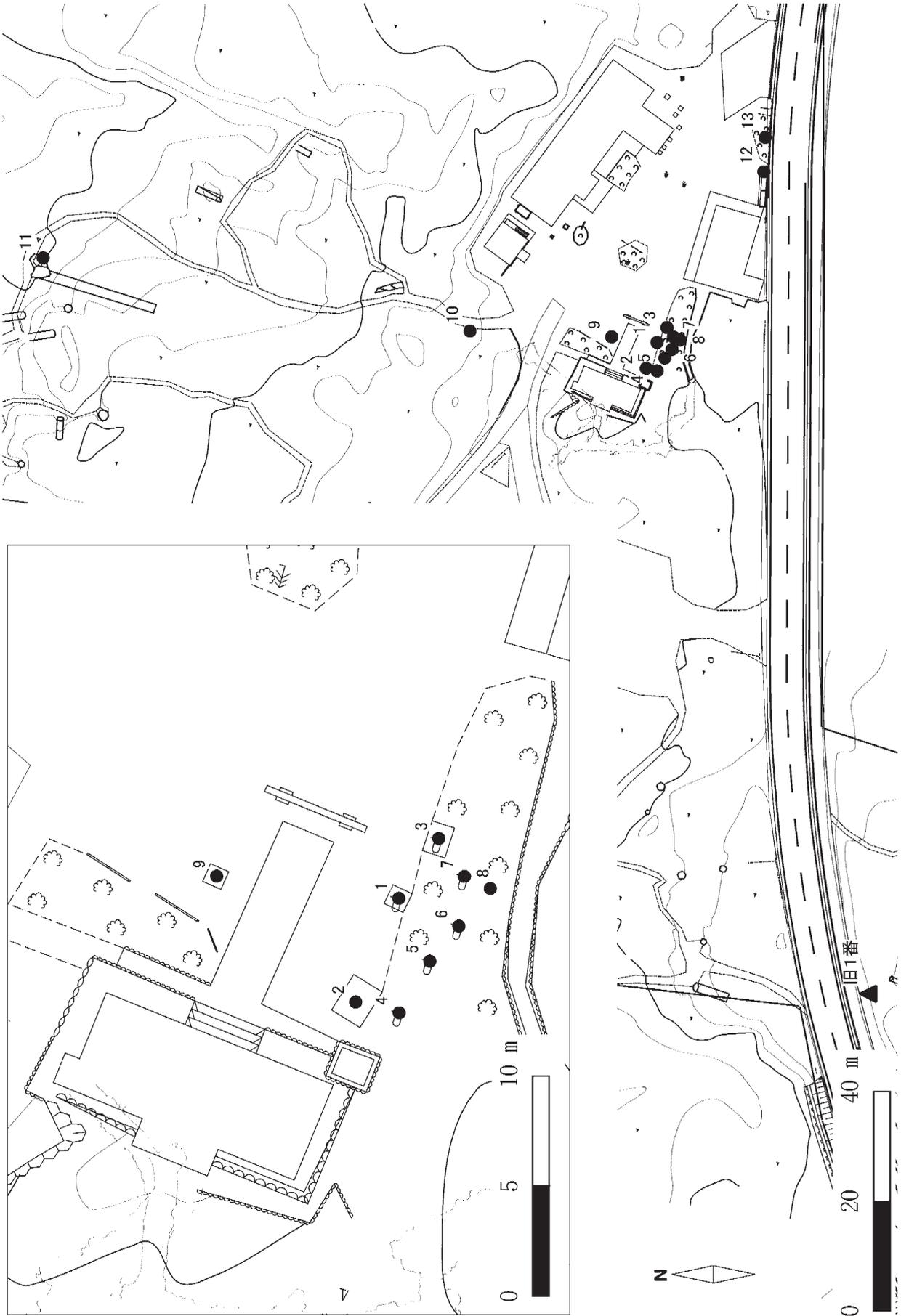
註

- (1) 岡田博校訂・解説『江戸時代参詣絵巻富士山真景之図』（名著出版、一九八五年）が影印を掲げ、翻刻する。『富士吉田市史』史料編五（近世Ⅲ）にも翻刻、挿図の掲載がある（史料二九）。
- (2) 本書口絵10。
- (3) 村石眞澄「富士参詣路と溶岩洞穴について―北口の胎内・精進御穴から人穴・白糸ノ滝・万野風穴を巡る―」（本書所収）参照。
- (4) 『御山参詣を誘う浮世絵と絵図―北齋と貞秀を中心に―』（山梨県立富士山世界遺産センター、二〇一八年）。
- (5) 百回忌は明治十四年（一八八二）。建立年の明治九年は、九十五回忌となる。
- (6) 岩科小一郎『富士講の歴史』（名著出版、一九八三年）。
- (7) 中村章彦氏のご教示による。

【付記】二〇一八年九月二二日、大石良範・小佐野参朗・倉沢和彦・流石朝之・中村章彦の各氏の参加を得て、No.4の表面およびNo.5の拓影を採取した。そのほか掲載した拓影は、これ以前に採拓してあったものを使用させていただいた。前記五氏のほか、外川勇・中村義朗・小佐野安（故人）・竹谷喜義（故人）各氏の手拓になる。なお、No.10・11については事務局で採拓した。

（文責・根岸崇典、堀内 亨）

村石眞澄作成



【图1】 船津胎内石造物分布图



無戸室浅間神社殿前南側石造物群 (No.1～8)



No.1 大日如来坐像
安永三年(一七七四)
(基礎背面)
安永三甲午年初冬日
江戸赤坂裏伝馬町
十一屋利右衛門
講中



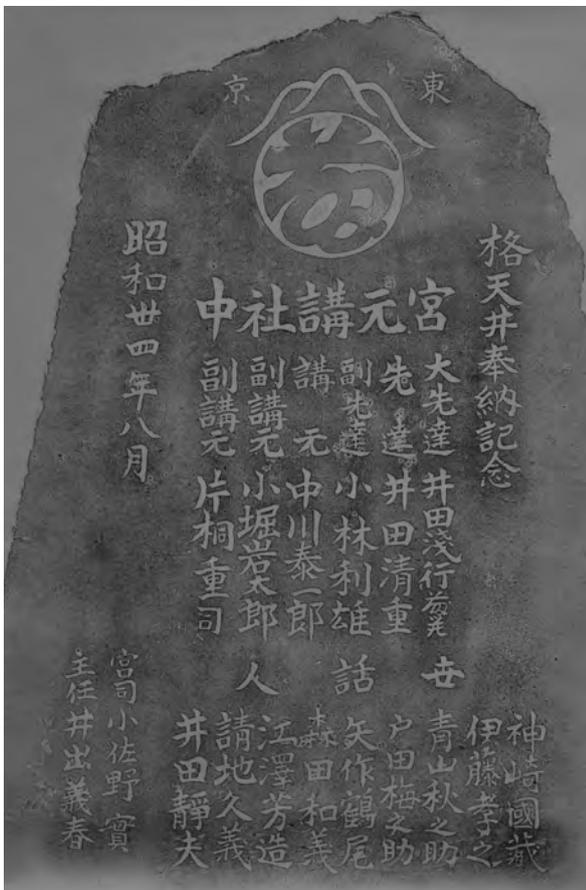
昭和三十四年（一九五九）

（正面）

格天井奉納記念
 神崎国蔵
 伊藤孝之
 青山秋之助
 戸田梅之助
 井田清重
 井田浅行藤開
 大先達
 先達
 井田清重
 小林利雄
 副先達
 中川泰一郎
 藤
 講元
 講元
 中川泰一郎
 小堀岩太郎
 副講元
 片桐重司
 中副講元
 片桐重司
 東
 京

宮司
小佐野実
井出義春
主任

昭和廿四年八月





No. 3 富士講碑

(右面)

武州豊嶋郡椎名町

世話人

先達 中井三次郎
船津 村役人中

文政十年(一八二七)

(正面)

京ぼし



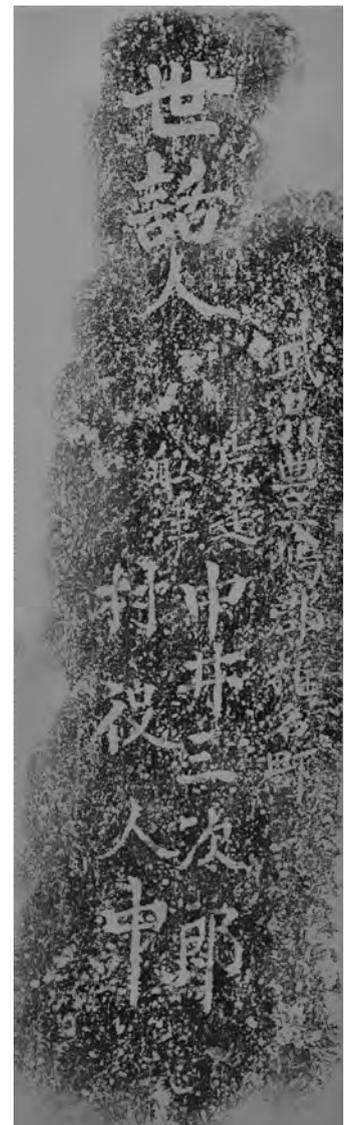
御神酒

富蔵
金太郎

十七夜

(左面)

維時文政十丁亥歳次六月吉日



No. 4 富士講碑

明治九年（一八七六）

（正面①）

富士の裾野に奇しき神洞あり
 古は早くより有ル無を更ニ知る人なか
 りけるに、享保の頃、江戸の高田に
 藤井藤四郎といふ人ありて、御山
 浅間大明神を信し、富士行者身祿の
 弟子となり、名を日行青山とぞ称しける、
 此師弟の正き人なるは記録ありて
 詳なれば爰には言はず、さて青山
 其師の教と神の告とに因て、安永元
 年六月十五日の暁、祥雲のたなひく
 をするへにて、遂に此神洞を尋えたり、
 洞の形の胎内に似たればとて、胎内潜とそ
 名つけける、青山是より敬信いと深かり
 けるか、天明二年寅の年四月廿九日、行
 年七十七歳にてみまかりぬ、今茲明
 治九年正ニ其百年の忌辰ニ当
 れるをもて富士社中の人ニ相謀り
 石を建て此いはれのあらましをしるす
 ことしかり、
 瑞城老人撰併書

（正面②）

東京

高田

牛込原町

千登世町

高田砂利場

小日向水道町

大塚辻

千住

しば

成子町

淀橋

中野上
中

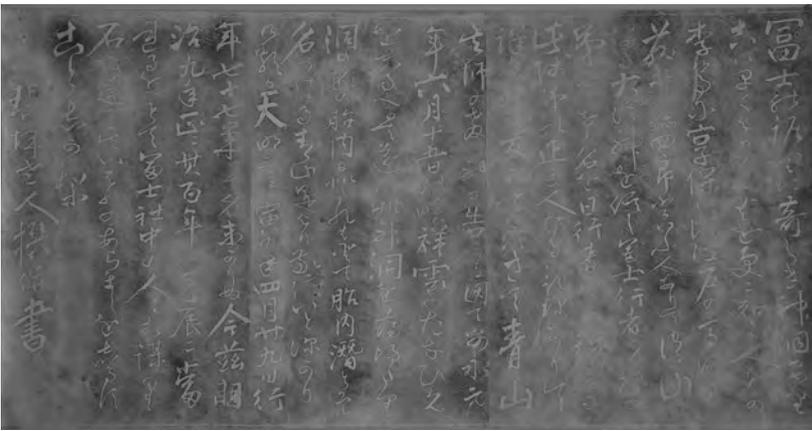
麴町

（正面③）

千住組

嘉兵衛新田

北組五丁目元宿



弥五郎新田

五反野

長右衛門新田

武州入間郡

宗岡村

青柳村

岩井村

三芳野里
多波目村

同高麗郡

的場村

鯨井村

天沼村

小堤村

高萩村

平沢村

（正面④）

佃嶋

（世話方）

鎌炮洲

関口水道町

牛込

小石川金杉

音羽町

小石川

（正面⑤）

地名梅素書

宮喜年

東京
宮祈念
合鑊

（正面⑥）

総

講

社



明治九年子六月

(背面①)

牛込原町

先達 高橋久兵衛

大先達 島田豊吉

森田吉蔵

田畑権兵衛

井上芳兵衛

本橋録之助

中川三吉

坂本市太郎

岡野五郎兵衛

小田切金蔵

間部良之助

梶原万吉

揖斐政養

小路尚義

松永市五郎

吉田房次郎

長谷川 吉

中西光明

要 吉五郎

佐藤清吉

谷口太郎兵衛

堀越清右工門

中山寛氏

吉岡由孝

山口茂助

(背面②)

大塚

大先達 角田惣吉

角田善吉

荒井峯吉

荒井鉄三郎

荒井平次郎

荒井源次郎

与芝小兵衛

保坂留三郎

浜松屋八十吉

西沢彦次郎

大工勇次郎

田嶋鎌太郎

後藤仁兵衛

竹内兼吉

成子町

大先達 星野金右工門

星野善兵衛

星野全兵衛

新井仁右衛門

上州屋武右工門

葛西屋小兵衛

鳥屋繁吉

石原巳之助

神原八五郎

中村文次郎

大工初五郎

小高平四郎

青木鏡次郎

(背面③)

淀橋

大先達 奥住善太郎

錢田屋定右工門

浅井伊兵衛

山田屋半兵衛

糸屋七五郎

牧原弥兵衛

奥住源次郎

小沢安兵衛

内倉嘉右工門

榎本吉右工門

原 孫市

中野

小川梅次郎

高野作兵衛

飯塚竹次郎

飯塚長次郎

飯塚惣内

飯塚兼吉

飯塚銀次郎

秋本鎌五郎

関口留五郎

岩崎忠蔵

鎌田茂吉

秋本三五郎

飯塚惣八

武州高麗郡

的場村

中先達 鈴木太吉

水村藤七

峯 増五郎

加藤糸三郎

栗原縫四郎

同鯨井村

先達 小嶋 平

中根権六

中里平太郎

(背面④)

同小堤村

先達 中嶋喜十郎

岸田 豊

新井政吉

新井善四郎

同天沼村

先達 岸田耕作

同平沢村

村田嘉吉

葛貫村

新井源助

同高萩村

比留間重五郎

平 茂左衛門

村田惣蔵

松本兵右衛門

清水勇次郎

平井啓治郎

笠幡村

嶋田宇之助

武州入間郡

宗岡村

細谷忠蔵

同 忠吉

同 忠右工門

荻嶋元治郎

篠崎文造

関根与吉

池ノ内藤太郎

高野熊太郎

高野定五郎

星野勘蔵

関根磯右工門

細田代吉

池ノ内春吉

同 政五郎

内田浅吉

木下平吉郎

多波目村

先達 長谷川吉五郎

武藤文吉

武藤栄蔵

(背面⑤)

同勝太郎

同 勝太郎

同 勝太郎

上州屋伊兵衛

伊豆 新

三河屋佐助

滝 沢

岩田屋常吉

豊屋寅吉

津多屋佐兵衛

撰津国屋清次郎

坂本屋吉蔵

静岡園茶城

万屋新兵衛

同 喜三郎

嶋田屋治助

菊村房次郎

大橋屋栄吉

中屋敬次郎

巴屋庄次郎

西東屋兵左工門

稲毛屋やを

稲毛屋あか

村田屋六兵衛

大工金次郎

西村屋新次郎

嶋田屋平助

伊勢屋新兵衛

灰吹屋市右工門

大黒屋伊助

八百屋弥吉

新野孫兵衛

武蔵屋金八

藤田啓吉

紅屋安五郎

宮崎徳蔵



め組
(背面⑥)

津ノ国屋清次郎
溜屋幸兵衛
静岡園可春
静岡園石川
三河屋喜兵衛
小幡氏
西村屋新兵衛
山崎屋勘兵衛
武蔵屋庄之助
嶋田屋平助
丸屋弥吉

佐野屋勘七
通一栄五郎
通三宗助
通七弥吉
平二喜助
通二清吉
山元兼治郎
平一岩治郎
平四寅吉
元園松五郎
平三万長
久助
金八
鎌五郎
金太郎
千代吉
権太郎
文治郎
八十吉
稻吉

纏

階子

く組

伝式三吉
拾三半次郎
堀江町鉄右工門

坂町岩石工門
忍町岩太郎

塩三久次郎
新巻豊次郎
荒木町浅吉
拾壹善太
尾張屋関太郎
定吉

家根屋七右工門
左官栄吉
同留吉
同扇太郎
同金太郎
平沢雄助

武州入門郡
青柳村
中先達
惣右工門

(背面⑦)
大先達

小

石

田中半治郎
山田留吉
久米幸太郎
飯嶋幸治郎
牧内喜兵衛
縫箔師辰五郎
岡田利兵衛
金子喜兵衛
醍醐宗治郎
長谷川金八
山野井松五郎
近藤兼治
千賀勘治郎
古沢繁蔵
高橋豊吉
岡本八重蔵
中村新吉

川

大先達

小

石

川

金

ろ組

杉

大先達

階子

纏

大門町

(背面⑧)

大野金七

石工喜八

松本甚兵衛

和田太七

山崎八兵衛

藤井源三郎

仲町

水道町

大久保安五郎

直柄久兵衛

西岡幾助

武下長兵衛

田中勇治郎

石井長治郎

岩田源治郎

座間惣吉

桐山源吉

大塚三治郎

岩瀬龜吉

久保田重太郎

久保田清兵衛

田中喜兵衛

森田銀蔵

稲垣元次郎

小林善八

曾雌朝光

大野金七

石工喜八

松本甚兵衛

和田太七

山崎八兵衛

藤井源三郎

森田万蔵

森田幸吉

佐藤伊助

大久保安五郎

直柄久兵衛

西岡幾助

武下長兵衛

田中勇治郎

石井長治郎

岩田源治郎

座間惣吉

桐山源吉

大塚三治郎

岩瀬龜吉

久保田重太郎

久保田清兵衛

田中喜兵衛

森田銀蔵

稲垣元次郎

小林善八

曾雌朝光

田中松五郎

木村新吉

清太郎

金太郎

文吉

五郎吉

日行徳本

吉岡三九郎

小栗喜太郎

大野金七

石工喜八

松本甚兵衛

和田太七

山崎八兵衛

藤井源三郎

森田万蔵

森田幸吉

佐藤伊助

大久保安五郎

直柄久兵衛

西岡幾助

武下長兵衛

田中勇治郎

石井長治郎

岩田源治郎

座間惣吉

桐山源吉

大塚三治郎

岩瀬龜吉

久保田重太郎

久保田清兵衛

田中喜兵衛

森田銀蔵

稲垣元次郎

小林善八

曾雌朝光

田中松五郎

木村新吉

清太郎

金太郎

文吉

五郎吉

日行徳本

吉岡三九郎

小栗喜太郎

大野金七

石工喜八

松本甚兵衛

和田太七

山崎八兵衛

藤井源三郎

森田万蔵

森田幸吉

佐藤伊助

大久保安五郎

直柄久兵衛

西岡幾助

武下長兵衛

田中勇治郎

石井長治郎

岩田源治郎

座間惣吉

桐山源吉

大塚三治郎

岩瀬龜吉

久保田重太郎

久保田清兵衛

田中喜兵衛

森田銀蔵

稲垣元次郎

小林善八

曾雌朝光

田中松五郎

木村新吉

清太郎

金太郎

文吉

五郎吉

日行徳本

吉岡三九郎

小栗喜太郎

大野金七

石工喜八

松本甚兵衛

和田太七

山崎八兵衛

藤井源三郎

森田万蔵

森田幸吉

佐藤伊助

大久保安五郎

直柄久兵衛

西岡幾助

武下長兵衛

田中勇治郎

石井長治郎

岩田源治郎

座間惣吉

桐山源吉

大塚三治郎

岩瀬龜吉

久保田重太郎

久保田清兵衛

田中喜兵衛

森田銀蔵

稲垣元次郎

小林善八

曾雌朝光

田中松五郎

木村新吉

清太郎

金太郎

文吉

五郎吉

日行徳本

吉岡三九郎

小栗喜太郎

大野金七

石工喜八

松本甚兵衛

和田太七

山崎八兵衛

藤井源三郎

森田万蔵

森田幸吉

佐藤伊助

大久保安五郎

直柄久兵衛

西岡幾助

武下長兵衛

田中勇治郎

石井長治郎

岩田源治郎

座間惣吉

桐山源吉

大塚三治郎

岩瀬龜吉

久保田重太郎

久保田清兵衛

田中喜兵衛

森田銀蔵

稲垣元次郎

小林善八

曾雌朝光

田中松五郎

木村新吉

清太郎

金太郎

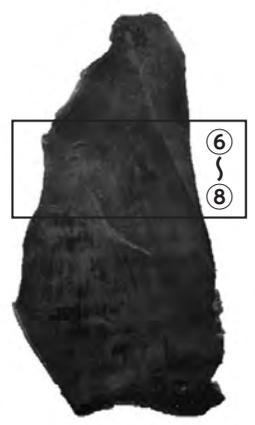
文吉

五郎吉

日行徳本

吉岡三九郎

小栗喜太郎



第二部 調査報告

諏訪町
平野七郎兵衛
堀川栄治郎
大黒屋清右衛門
川窪安兵衛
青柳三郎兵衛
鈴木伊三郎

靈岸島
小泉又吉
鈴木浅次郎
大嶋重吉
指物屋梅吉
永田仁吉

柳町
(背面⑩)
平尾久兵衛
森村治兵衛
柴田巳之吉
鈴木熊次郎
藤平吉五郎
浅見文治郎
牧内菊三郎
新家安五郎
佐藤新蔵
彦根松五郎
串田定吉
北川藤兵衛
矢作兼吉
内藤桑吉
後藤房吉
岩沢太郎兵衛
佐々木作太郎
田口啓蔵
藤井由之助
滝野六兵衛
浅井五兵衛
平野嘉三郎
豊屋豊治郎
石井宇之助
醍醐福太郎
伊東留吉
松田鉄太郎
榎本銀蔵
久保田銀次郎
唐崎和助
原田市三郎

佃嶋
中村帷新
荒井久太郎
安達百三郎
桜井庄五郎
桜井熊次郎
松岡庄吉
万吉

南八
鈴木七兵衛
前田久蔵
山城屋兼次郎
酒井竹次郎
森嶋喜助
小林芳五郎
山田長八
下淵鉄之助
車屋三吉

築竹
酒井竹次郎

地⑨
小林芳五郎
山田長八
下淵鉄之助
車屋三吉

京橋
下淵鉄之助
車屋三吉

佃嶋
魚瀧
魚仙
野竹半次郎
田中源右工門

魚瀧
魚仙
野竹半次郎
田中源右工門

牛込元講
(背面⑪)
松本伊兵衛
三木屋治郎吉
麩屋栄吉
肴屋茂吉
山田芳三郎
加賀屋半兵衛
吉田元七
松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

大先達
松本伊兵衛
三木屋治郎吉
麩屋栄吉
肴屋茂吉
山田芳三郎
加賀屋半兵衛
吉田元七
松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

大先達
松本伊兵衛
三木屋治郎吉
麩屋栄吉
肴屋茂吉
山田芳三郎
加賀屋半兵衛
吉田元七
松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

肴屋茂吉
山田芳三郎
加賀屋半兵衛
吉田元七
松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

山田芳三郎
加賀屋半兵衛
吉田元七
松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

加賀屋半兵衛
吉田元七
松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

吉田元七
松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

松橋重太郎
管沢治右衛門
丸井弥平次

万屋長兵衛
相馬屋源四郎
伊勢屋芳兵衛
上州屋清助
吉田屋新助
越後屋小八
小貫長三郎
越前屋清兵衛
近江屋重兵衛
加藤屋藤蔵
上総屋庄兵衛
三河屋七五郎
木乃葉幸治郎
日高屋茂兵衛
菊岡甚兵衛
枅屋常吉
山城屋長兵衛
柳屋岩吉
求友亭万吉
日野屋清助
尾張屋銀次郎
黒柳兼吉
大工治郎兵衛
鍛冶屋清治郎
三河屋儀兵衛
越前屋又三郎
桶屋五郎兵衛
瓦師七五郎
網屋久七
清水福太郎
大工与市
大坂屋長助
矢嶋八百吉
吉田屋熊蔵
三浦忠知
丁子屋兼五郎
大黒屋藤兵衛

竹内留吉
加藤国三郎
亀沢喜兵衛
成田屋縫之助
守多孝助
三河屋藤之助
清水源治郎
辻 吉兵衛
琴吹幸吉
大工清五郎
大坂屋彦兵衛
山口米吉
檜物師藤三郎
床 長吉

高田砂利場
大野甚兵衛

(背面⑫)
大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

世
大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

話
大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

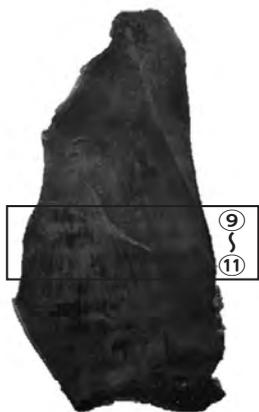
大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎

大坂屋吉兵衛
都船作兵衛
豊屋甚右衛門
豊屋辰五郎
桶屋治兵衛
浅生定五郎
都船金治郎
甲州屋政吉
桶屋鉄吉
鈴木屋弥兵衛
美濃屋庄次郎



人 瓦師長治郎
吉村勝治郎

高田千登世町

大先達 沢田忠右衛門

大野甚四郎

世 原 政次郎

佐藤三郎兵衛

嶋田金兵衛

松山彦右工門

大野安右工門

大野七兵衛

内田庄次郎

新倉元次郎

大野惣兵衛

橋本源六

新倉四郎兵衛

兜木文治郎

田中栄蔵

田崎金次郎

牧野元次郎

宇田川竹次郎

朝倉伝次郎

大野茂右工門

市川今蔵

山岸鉄三郎

三橋富五郎

酒井鉄五郎

福野幸右工門

音羽町

大先達 中村七右衛門

先達 今村清吉

池田鉄之助

飯田作次郎

小林嘉吉

奥村直吉

諸角宗辰

村沢政吉

平野勝蔵

中山佐太郎

波多野源蔵

山口はん

平沢金治郎

羽場茂市

佐々木清吉

藤岡林蔵

都筑新右工門

小平康太郎

荒野国太郎

安原兼吉

保居金太郎

岩瀬長次郎

小池新十郎

青野兼次郎

行方重三郎

熊谷初太郎

中村鈴吉

桜井市右工門

保田兼吉

岩岡留吉

中村清助

村井弥吉

稲垣多吉

松永市五郎

水野万吉

田中糸治郎

加藤寅吉

黒須吉蔵

落合馬太郎

金子源蔵

桑原佐兵衛

石川万太郎

金子喜三郎

永嶋孫右工門

横山亀太郎

古川芳五郎

吉野善五郎

古宮助次郎

品川甚八

中嶋栄蔵

飯田茂吉

堀田善兵衛

桜井巳之助

横山佐太郎

深津浅五郎

竹内勝五郎

嶋田藤蔵

竹内重吉

滝本清五郎

山田安五郎

倉田重五郎

橋本武之助

水野藤次郎

池田安五郎

水野亀吉

中村伊之助

川名宗次郎

稲垣清太郎

岩木伝次郎

桜井市兵衛

橋本紋次郎

松村長右工門

岩岡米次郎

清水清次郎

加藤正吉

黒田米次郎

杉山三之助

塚原音次郎

新井重右工門

新井金蔵

石井鉄五郎

中島金太郎

森田吉兵衛

井上亀吉

米本喜兵衛

河野吉五郎

日留川万五郎

堀 義之助

鳥光勘太郎

山田清松

松崎音次郎

安藤正蔵

田中安五郎

関 伝兵衛

竹中与惣右工門

三ツ矢伊兵衛

森川三治郎

滝口忠三郎

銅子屋喜太郎

稲葉金平

左官長之助

枘田七右工門

石塚大五郎

永岡庄九郎

大黒屋三次郎

北島長助

飯塚徳太郎

大岡徳次郎

山崎喜八

篠田竹次郎

大森三次郎

大工宅次郎

大森直次郎

富田屋半右工門

堺屋五郎兵衛

12 } 14



神官

下野屋市左衛門

本多武政

石井柳之助

鎌倉屋鎌太郎

たまのや忠兵衛

鳶 亀蔵

石塚宗次郎

永野彦右工門

内田元醇

根津勝次郎

井戸屋勘五郎

小林佐兵衛

紀伊国屋浪平

森本次郎吉

田中藤兵衛

田中菊次郎

中村久吉

大川藤助

高瀬繁右工門

三河屋熊蔵

山崎忠蔵

柳屋惣吉

幸手屋方右工門

荒井勘五郎

枘田弥五郎

山崎豊次郎

杉本岩次郎

(背面15)

高田仁三郎
翁すし熊吉
金柵屋勝太郎
新小林辰五郎
嶋田庄兵衛
坂田鼎三
古暮米次郎
稲垣庄五郎
菅沼初五郎
佐藤糸藏
佐藤久太郎
浅井新五郎
鈴木定吉
斎藤亀吉
吉田吉藏
鈴木屋藤兵衛
越前屋之助
三河屋新兵衛
川屋源助
下野屋長吉

大工虎藏
床 市五郎
瓦飾与吉
鳶 藤五郎
万屋宗次郎
白井助四郎
佃屋滝藏
北山熊吉
大宅子分中
松本重兵衛
彦根長三郎
稲垣善吉
川越屋松五郎
棒屋金兵衛
山田屋平八
沼尻伝吉
左リ床金助
佐々木庄兵衛
金町屋豊吉
浅古弥七
絵馬屋弥五郎
横山佐助
加藤伊三郎
武藏屋由兵衛
長崎屋清兵衛
万屋万右衛門
万屋三郎右工門
梅屋敷喜右工門
富田屋吉兵衛
和泉屋善吉
伊豆屋次郎右工門
古性辰五郎
小高德次郎
大工万次郎
隅田屋三五郎
片野孫八
福田七之助

(背面16)

住北組五丁目

内田安五郎
松崎屋松兵衛
芝本源藏
福田幸次郎
太田きよめ
山本源次郎
植 木屋
大和屋勝次郎
吉野鎌吉
坂田七兵衛
板垣権太郎
板垣銀藏
魚屋増次郎
柳屋任之助
龜甲屋三次郎
近江屋市郎右工門
増田源次郎
久藏
幸手屋甚藏
持丸紋次郎
太田豊吉
千住元宿
荒井市五郎
田ヶ屋啓次郎
鈴木孫右衛門
鈴木与助
嶋村権四郎
内田徳次郎
染谷曆之助
五反野村
増田長右衛門
増田平兵衛
田中新兵衛
三田新右衛門
三田太兵衛

長右衛門新田

竹ノ内角右工門
細谷次郎左衛門
下嶋磯八
下嶋駒次
下嶋助太郎
遠田武平
遠田嘉七
下嶋伊之助
佐久間治兵衛
杉浦清兵衛
杉浦三次郎
弥五郎新田
小林久五郎
安 善兵衛
増田清左工門
荒川平五郎
荒川平次郎
嵯峨権左工門
嵯峨甚兵衛
染野嘉三郎
嘉兵衛新田
田辺市五郎
伊藤彦平
伊藤藤右工門
伊藤慶次郎
伊藤留吉
伊藤金次郎
伊藤小平
六町谷中平野
一ツ谷二ツ谷
武州入間郡
岩井村
鈴木弥五郎
下田宇助

芝

石為

北村忠藏

かし幸

左口鉄

八幡兼

たる直

八百市

峰床

魚源

魚磯

魚市

町田喜平次

加藤亀吉

中根銀二郎

安藤源太郎

そば吉

大久保三之助

荒井屋

山田次郎吉

井上録三郎

荻原和助

加藤喜兵衛



(正面)

念紀内胎



(朱書)

吉
田 神
総

元 講

初代目小林豊吉行

講元 池亀弥吉
世 西村多三郎 池亀千代吉

二代目小林兼吉行

話 奥山三代吉 西村常吉
人 吉田仙太郎 奥山あい子
五代目吉田福松 小池代吉

三代目小林吉五郎行

惣代 田中仙太郎 小林よし子
世 広沢令次郎 広沢惣平
話 山田市太郎 広沢彦四郎

四代目小林金吉行

人 小林定吉 松山正治
帳元 松山源次郎

大正末年カ



No. 6 富士講碑

万延元年（一八六〇）

（正面）

手洗の

てきて

泉源

たいほさつ

□くみ□

□□□

胎内の

水

（背面）

武州武郷半領

温行六知内

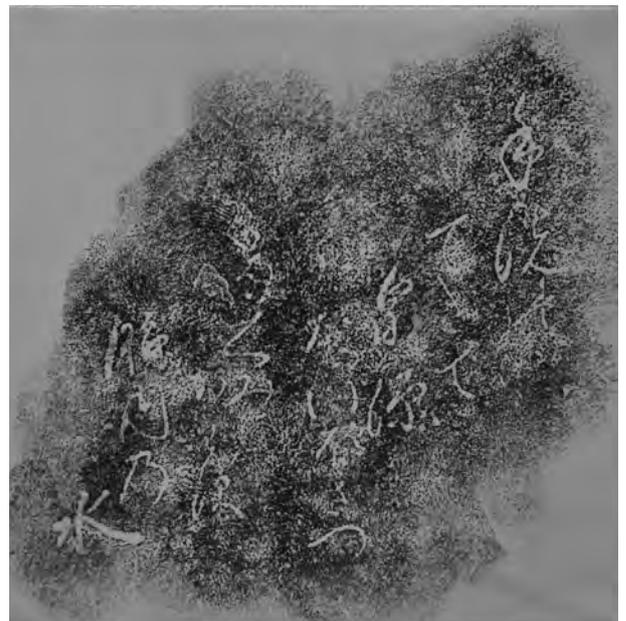
同州同領丹後村沢右工門

源行六水

総州相馬郡野崎国三郎

凍行六心

万延元年申六月三日



No. 7 富士講碑

大正九年（一九二〇）

（正面）

大正庚申九年建之

長山仙左工門

忠行元祖

三代目

長山喜代

中野根野木炭業者一同



念紀内胎



No. 8 大日如来坐像

年未詳



No. 9 手水鉢

年未詳



No.10 富士講碑

明治十五年（一八八二）

（右面）

元祖食行身祿術御巻物之内たい様

温行六知術感得開之

泉源御胎内道

嘉永七寅年七月十七日定之

（正面）



同行 明治十五年七月建之



（左面）

天保十四卯年七月二日定之

元之父様御胎内道

中興開祖

温行六知術感得



No. 11 富士講碑

万延元年（一八六〇）

（正面）

請行六知
源行六水
凍行六心
元祖食身身祿御卷物之内
たい様御胎内温行六知開之
通行六甫
哲行六可

（日月）
泉源たい菩薩

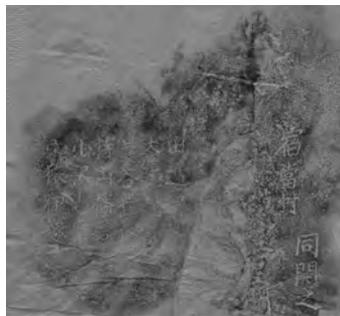
嘉永七年
寅七月拾五日
奥行六和
穀行六信
同開之

宿當村

右工門

（左面）

田辺伊賀
大雁丸筑前
菊谷豊後
持山播磨
小沢志摩
小猿伊予



（背面）

要行 飯行 情行
念行 善行 三行
志行 林行 永行
徳行 親行 伝行
忠行 源行 宝行
文行 泰行 西行
現行 藤行 安行
右加輔同行開之
船津村
役人



天保十三年（一八四二）

（正面）

温行六知術開山

凍行三情

ち、様御胎内

敬行篤知

精行産知

天保十三寅七月三日

惣同行建之



万延元年（一八六〇）

（正面）

日月

万延元年庚申六月三日

繡

是より

両御胎内道

仙元大菩薩

総州葛飾郡小金領三輪野山村

願主 小谷与右工門



精進御穴所在石造物調査報告

精進御穴石造物調査グループ

精進御穴と呼ばれる洞穴は、富士河口湖町精進地内、青木ヶ原樹海の深部に位置する。現在では、大正十二年（一九二三）に整備された精進口登山道から比較的容易に行き着くことができるが、精進本村からは三キロ半ほど隔たっている。⁽¹⁾宝暦年間（一七五一～六四）頃の成立とみられる「富士山神宮麓八海略絵図」には、「胎内」（旧胎内）や「新胎内」（船津胎内）とともに、「精浄穴」として記載され、⁽²⁾すでに十八世紀半ばの時点で、信仰の場と認識されていたことが理解される。

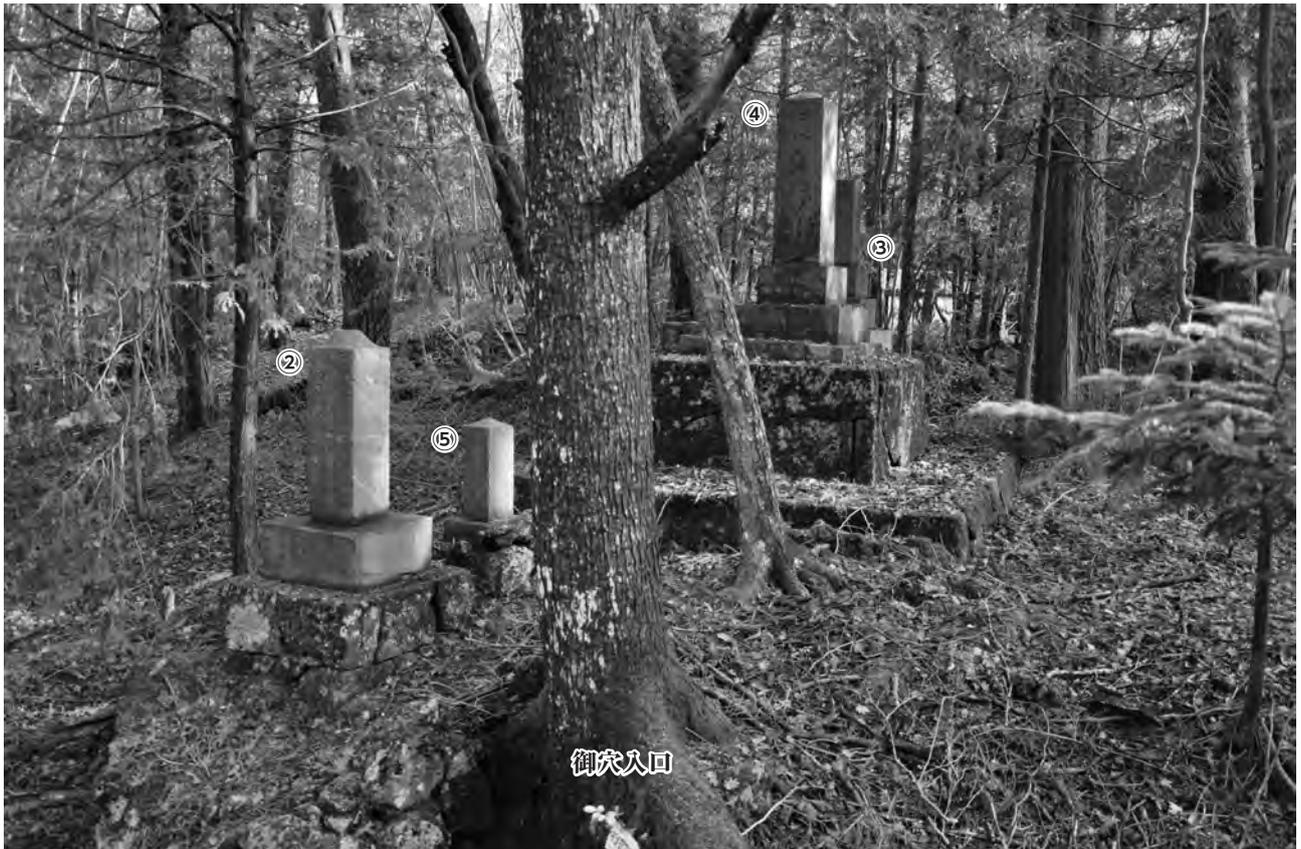
縦一・二メートル、横三・五メートルほどの穴が北西方を向いて開いており、ほぼ南東方向に向かって全長一一・五メートルほどの横穴が延びている。一部は立つて歩けるほどの高さを有するが、這いつくばって進むべき箇所も少なくない。中途ならびに最深部に都合四基の石造物を確認したが、精査に及んでいないため、今報告の対象からは除外した。洞穴入口上部には、「精進御穴日洞」のプレートがかかっている。この南西方、約三五メートルの地点にも「精進御穴月洞」のプレートが付された洞穴があるが、立ち入ることはできない。

今回は「日洞」の周囲に立つ五基の刻銘について報告する。便宜的に1～5のNo.を付した。No.1は、御穴の入口奥の高所に離れて立つ。開口部から碑に向かって六段の石段が設えられている。No.2～5の四基は、入口直上から穴が延びていると思しき方向へ向け、ほぼ一直線に並んでいる。四基が並ぶ高まりから一段低い平坦面には、堂舎が建っている。近時まで日蓮宗系の行者が居住していた。岩科小一郎氏によれば、誓行徳山の坐像（慶応元年（一八六五）造立）が伝来するというが（徳山については後述）、⁽³⁾詳細については、他日を期したい。

No.1～3の三基は、いずれもこの地を修行の場とした富士講行者の供養塔であ

る。No.1は、天保三年（一八三二）九月三日に洞穴内で入定した誓行徳山を偲び、その十三回忌にあたり賢鏡らが造立した旨を刻んでいる。賢鏡の名は、No.2に「二世賢鏡行者」と見え、徳山の後継者と位置づけられる行者であったことが知られる。二重の基礎を持ち、上段は左右両面、下段は背面を除く三面に人名がびっしり刻まれ、その数は九七名に達する。その約七割にあたる六十七名は行名を称している。また、居住地も精進にとどまらず、都留郡成沢（鳴沢村）から本栖（富士河口湖町）、中ノ倉、釜額、栃代、岩欠（以上、身延町）、市川（市川三郷町）と八代郡西部一帯に及ぶ。甲府の町人や根原（静岡県富士宮市）の住人の奉加も見られる。これらの事実は、富士講の広まり、深まりを反映したものと見てよいだろう。No.2賢鏡供養塔には、No.1を上回る一二〇名の名が刻まれる。このほか、中芦川（笛吹市）や小磯、根子（ともに身延町）は、各村が組織する講中として加わっており、二百名以上の奉加があったとみられる。No.3は三世とされる善明院唯善の供養塔で、昭和四十七年（一九七二）と比較的近時の造立である。精進区の皆さんが奉加しており、御穴が地元の人々の手によって護持されてきたことを伝える史料として意義深い。

No.4は、徳山の事績を顕彰するもので、精進村の人々によって建てられた。中道巡を十度果たしたこと、木立境の巡行を成し遂げたこと、「御内外十六海垢離」（内八海・外八海での水垢離）修行を執行了たことを称えている。背面には、徳山が文政十年（一八二七）に「開穴」したこと（修行の場としたこと）、および御穴で一七〇日間の木食行や四七日の断食行を、それぞれ務めたことを綴っている。徳山にかかわる顕彰碑は、神野路に沿って点在する。⁽⁴⁾No.5は大我講の行者で、



【写真1】精進御穴石造物群 (No.2～5)

八坂村(身延町)出身の今福孫右衛門(行名係行)が、七十三歳で迎えた弘化二年(一八四五)六月に御中道を達成したことを記念して建てたもの。右面の「賢鏡行者引導」から、精進御穴二世の賢行の手引きにより、成しえた修行であったことが理解される。大我講と山臣講、大我講の精進御穴への関与を考えるうえで注目される。

本書所収の村石氏の論考でも言及されているように、精進御穴に通じる通路沿いには、石造物が散在している。徳山が組織した山臣講により建てられた石造物も少なくない。富士山西麓から八代郡西部(東河内領)、さらには巨摩郡南部(西河内領)にまで広がった山臣講の活動を跡づけるためにも、これらの調査を進めたい。

註

(1) 御穴の所在地については、村石眞澄「富士参詣路と溶岩洞穴について―北口の胎内・精進御穴から人穴・白糸ノ滝・万野風穴を巡る―」(本書所収)の図2を参照願いたい。

(2) 本書口絵1。

(3) 岩科小一郎『富士講の歴史』(名著出版、一九八三年)。

(4) 前掲註(1) 村石論文参照。

【付記】二〇一八年二月一四日、大石良範・小佐野参朗・中村章彦の各氏の参加を得て、No.3を除く四基について採拓作業を行った。その予備作業を一〇月五日に実施したが、右記三氏のほか、外川寿男氏の手を煩わせた。記して感謝の意を表す。なお、No.2・5については、杉本悠樹および事務局が採拓した。

(文責・根岸崇典、堀内亨)

No. 1 富士講碑

天保十五年（一八四四）

〔塔身〕

〔右面〕

為十三回御忌報恩

四十八夜別時念仏供養

天保^{十五年}甲辰六月三日建之

賢鏡（花押）

精進村名主与一右工門

本願人 村役人中

〔正面〕
開
誓行大仙徳山
山

〔左面〕

入窟二千日余成就景

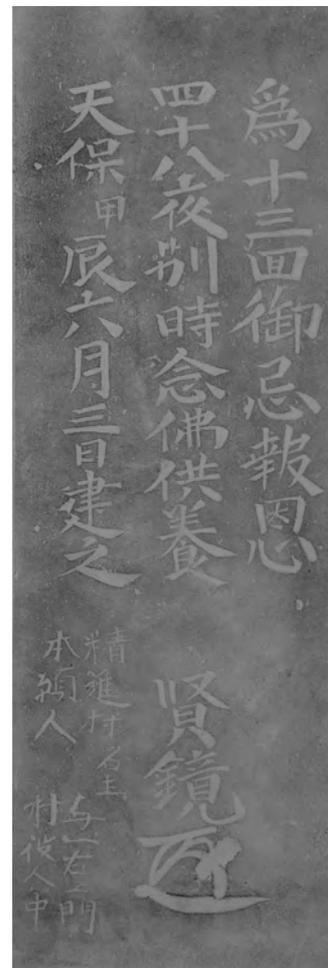
天保三壬辰九月三日

未刻被遂本願



臣

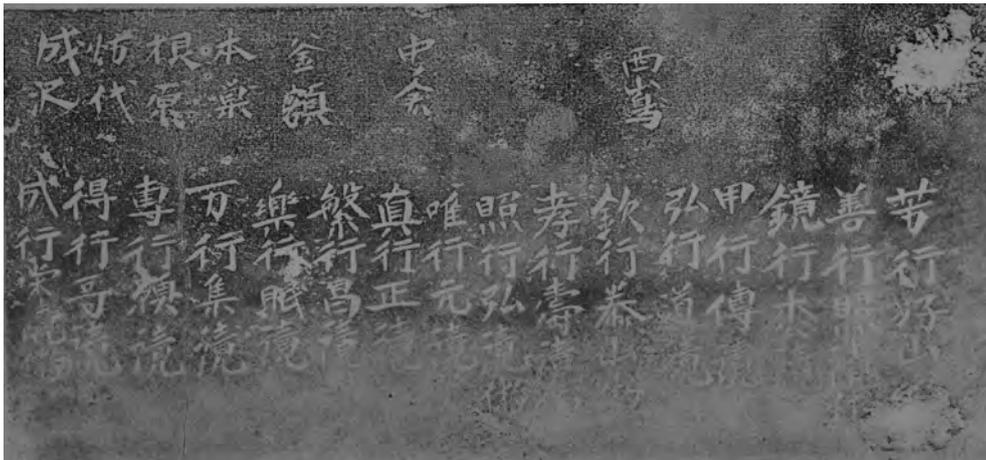
総同行



〔基礎上段〕

(右面)

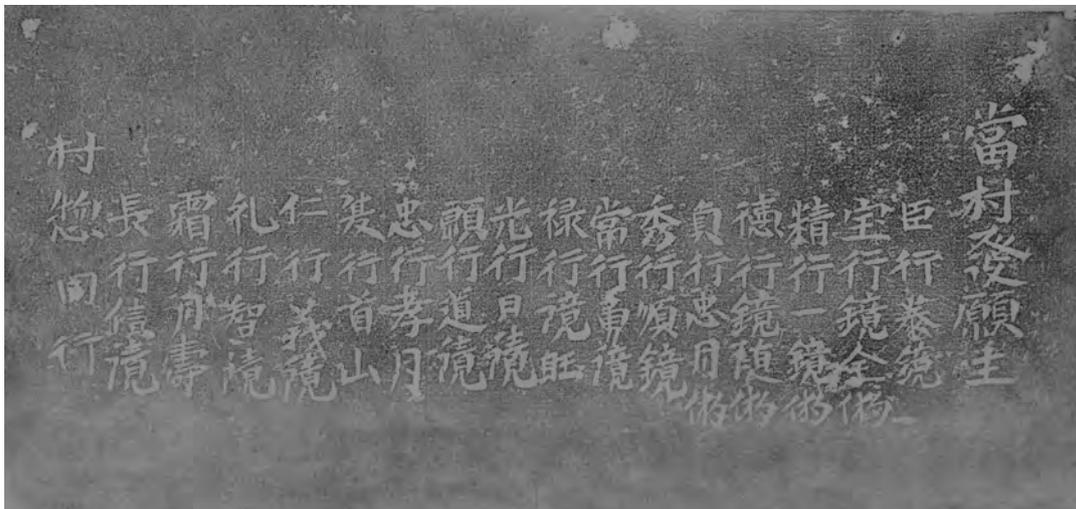
芳行好山 □_(栴)
 善行照鏡_佛
 鏡行松鏡
 甲行伝鏡
 弘行道鏡
 西嶋
 欽行泰山_佛
 孝行壽鏡_佛
 照行弘鏡_佛
 唯行元鏡
 中ノ倉
 真行正鏡
 繁行昌鏡
 釜額
 樂行賦鏡
 本巢_(栴)
 万行集鏡
 根原
 專行願鏡
 析代
 得行哥鏡
 成沢
 成行栄鏡_佛



(左面)

当村發願主

臣行泰鏡
 宝行鏡全_佛
 精行一鏡_佛
 德行鏡隨_佛
 貞行忠月_佛
 秀行順鏡
 常行勇鏡
 祿行鏡旺
 光行日鏡
 願行道鏡
 忠行孝月
 夏行首山
 仁行義鏡
 礼行智鏡
 霜行月壽
 長行信鏡
 村惣同行



〔基礎下段〕

(正面)

成沢村久兵衛

決行丈山術

幸行泰山術

豐行惠鏡術

体行心鏡術

勝行來山

來行勝山

教行真山

賢行聖山

聽行常山

長行勇山

量行壽山

然行得山

市川起行鈍鏡

廣行現鏡

心行定鏡

道行広鏡

法行唯鏡

聖行空鏡

檀行礼鏡

円行満鏡

好行誠鏡

莊行鏡蔽

念行鏡道

聞行鏡音

映行鏡戒

相行真鏡



(右面)

西嶋

正行青鏡

光行忠山

深行信山

本巢

三行弘山

栃代

現行室山

岩欠

泉行晴山

市川

久行榮山

歡行喜山

橘田定右工門

同 常右工門

甲府

同 喜右工門

一ノ瀬惣八

同 勇蔵

小池□兵衛

赤池□兵衛

同 □右工門

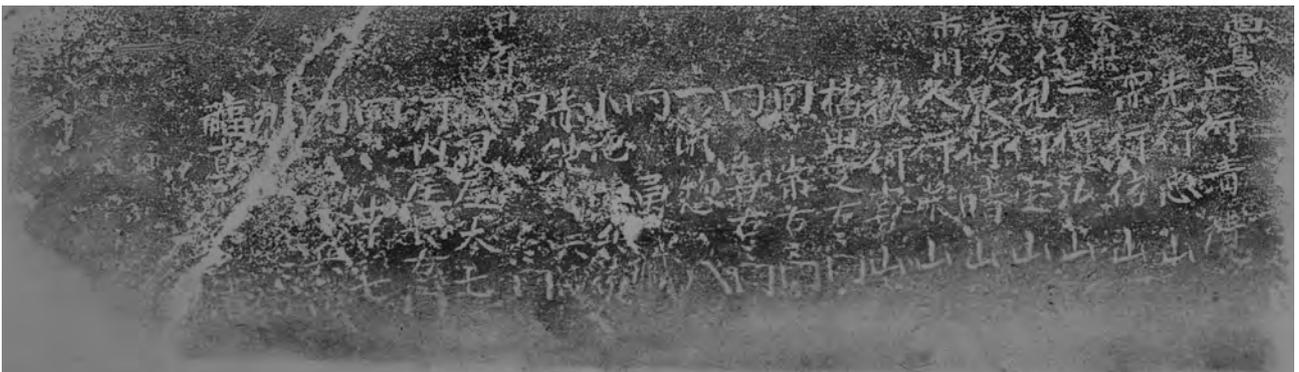
伏見屋太七

河内屋長右工門

同 幸七

同 □兵衛

福直□□衛



(左面)

中ノ倉村

赤池久兵衛

同 甚之丞

治郎兵衛

定右工門

重右工門

惣左工門

伝兵衛

清右工門

久左工門

与兵衛

繁右工門

当村世八人^(話)

渡辺忠兵衛

石川彦兵衛

小林太左工門

渡辺直八

石川儀助



精進御穴入口 (左) とNo. 1 石塔

No. 2 富士講碑

安政二年（一八五五）

〔塔身〕

（右面）

三世

安政二乙卯五月三日 善明（花押）

建之

（正面）

南無阿弥陀仏 賢鏡（花押）

（左面）

二世賢鏡行者嘉永二己酉五月三日寂又

七回忌別時念仏 修行畢



〔基礎下段〕

(正面)

中構惣

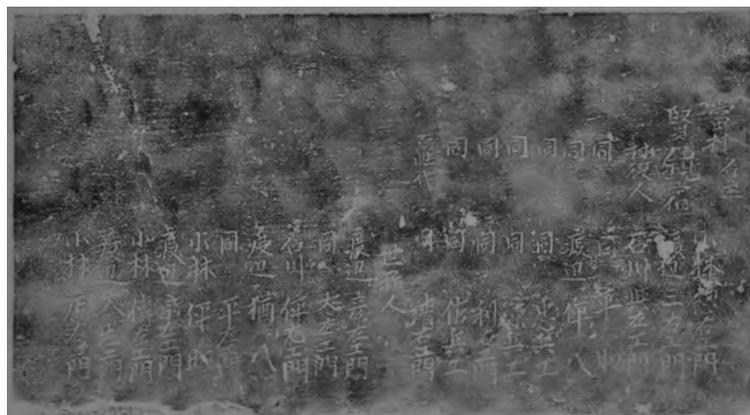
(右面)

甲府	紺屋勘兵衛
同	敦賀屋弥左工門
同	湊屋三郎兵工
中芦川村	立沢太右工門
市川	丹沢久七
同	先達所左工門
当村	小林兵介
同	同 太右工門
成沢村	小林半左工門
同	同 栄左工門
同	渡辺幸左工門
同	小林良藏
中ノ倉村	赤池勇右工門
同	同 政之丞
同	赤池豊兵工
同	同 作右工門
同	同 嘉右工門
上吉田村	菊田式部
武州	千葉兵左工門
本一 同	先達一行岩鏡



(左面)

当村名主	小林惣右工門
賢鏡宿	渡辺三右工門
村役人	石川与左工門
同	同 平助
同	渡辺伴八
同	同 忠兵工
同	同 源兵工
同	同 利右工門
同	同 作兵工
百姓代	同 清右工門
	世話人
	渡辺彦左工門
	同 太左工門
	石川伴左工門
	渡辺猶八
	同 平左工門
	小林伴助
	渡辺宗左工門
	小林伝左工門
	渡辺大左工門
	小林庄右工門



(背面)

(常葉)
トキハ村 渡辺武兵工
(夜子)
ヨコ沢村 渡辺庄右工門

〔基礎下段〕

(正面)

成沢村 小林善右衛門

三浦岩右工門

渡辺栄左工門

渡辺宇右工門

小林徳次郎

渡辺浅右工門

同 勝兵工



三浦久兵工

渡辺善之丈

小林熊蔵

梶原権左工門

三浦源五左工門

小林宗右衛門

渡辺半兵工

小林市右工門

宮川半左工門

立沢平助

渡辺長治右工門

同 政吉

立沢林左工門

同 常蔵

鶯宿村

宮川浩蔵

中芦川講中

中ノ倉村

赤池甚之丞

同 栄左工門

小磯村

田中太兵衛

同 勝右工門

同 新左工門

小磯講中

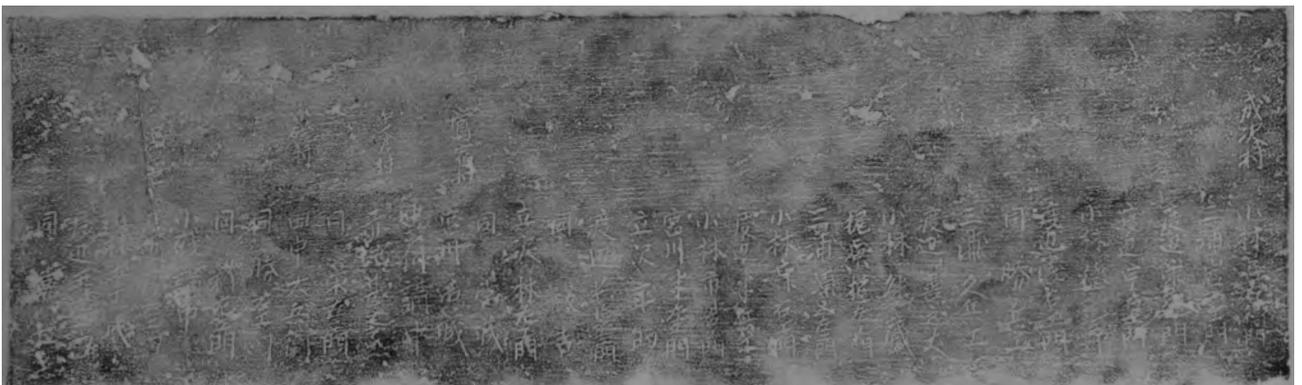
当村

渡辺藤左工門

小林幸蔵

渡辺五十左工門

同 嘉七



(右面)
当村

渡辺藤介
同 円兵工
同 磯右工門
石川円右工門
同 仲右工門
同 伴兵工
同 兵左工門
渡辺孫右工門
同 次郎右工門
山田龍□
小林周助
渡辺徳兵工
同 儀右工門
小林七郎左工門
渡辺与介
同 吉兵工
同 丈右工門
石川茂左工門
渡辺市右工門
同 与惣右工門
小林六左工門
赤池市右工門
上八坂村 □屋法助
根子村 木村直左工門
根子村講中
西島村 佐藤三□老
同 同苗法助
同 同苗定右工門



(左面)
同 栄蔵

同 八左工門
内藤弥助
渡辺由右工門
同 藤右工門
同 要左工門
古関飯田村 丈右工門
同 佐野重蔵
同 同 重左工門
同 喜兵工
本栖村 渡辺勘左工門
同 同 文左工門
同 同 久左工門
同 清左工門
上大鳥居村 周吉
同 新左工門
古関村 勘左工門
中倉村 赤池甚左工門
同 赤池長右工門
三沢村 今福用右工門



No. 3 富士講碑

昭和四十七年（一九七二）

〔塔身〕

（正面）

三世善明院唯善上人

（背面）

昭和四十七壬子年九月三日

中興開基 日心

現董 日峯

〔基礎上段〕

（右面）

乾徳道場元世話人

小林峯次郎

石川利章

小林節一

渡辺豊利

渡辺幸俊

渡辺良一

小林直人

小林 亨

（左面）

現区长

山田正夫

副区长

小林二三男

全渡辺宗一

小林将英

渡辺菊儀

小林三平

渡辺宗幸

小林新吉

渡辺太吉

渡辺慶太郎

（背面）

石川房男

渡辺清政

山田義文

小林竹光

小林文平

渡辺益貴

精進区



No. 4 富士講碑

年未詳

〔塔身〕

〔右面〕

天下泰平国土安穩

石川伊左門

渡辺清藏

同苗七右門

同苗治左門

同苗萩右門

同苗斧右門

小林弥五兵衛

風雨隨時五穀成就

〔正面〕

御木立境神乘教道満足

臣御中道十度大願成就之攸

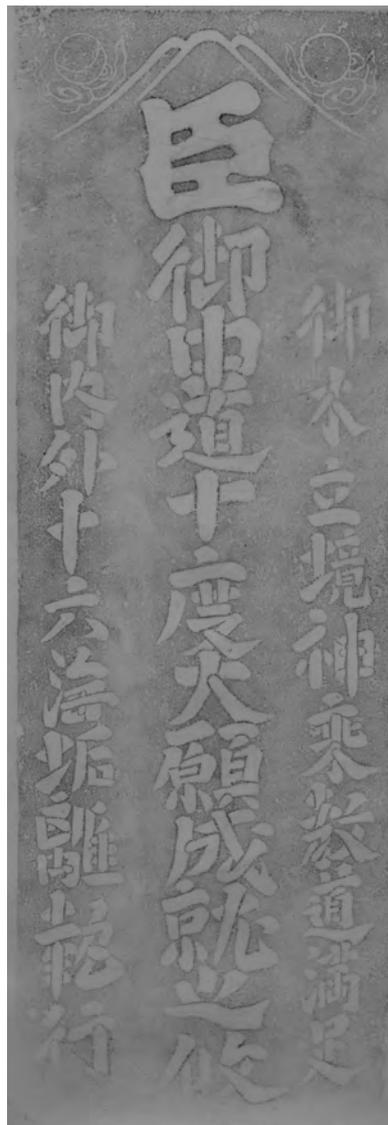
御内外十六海垢離執行

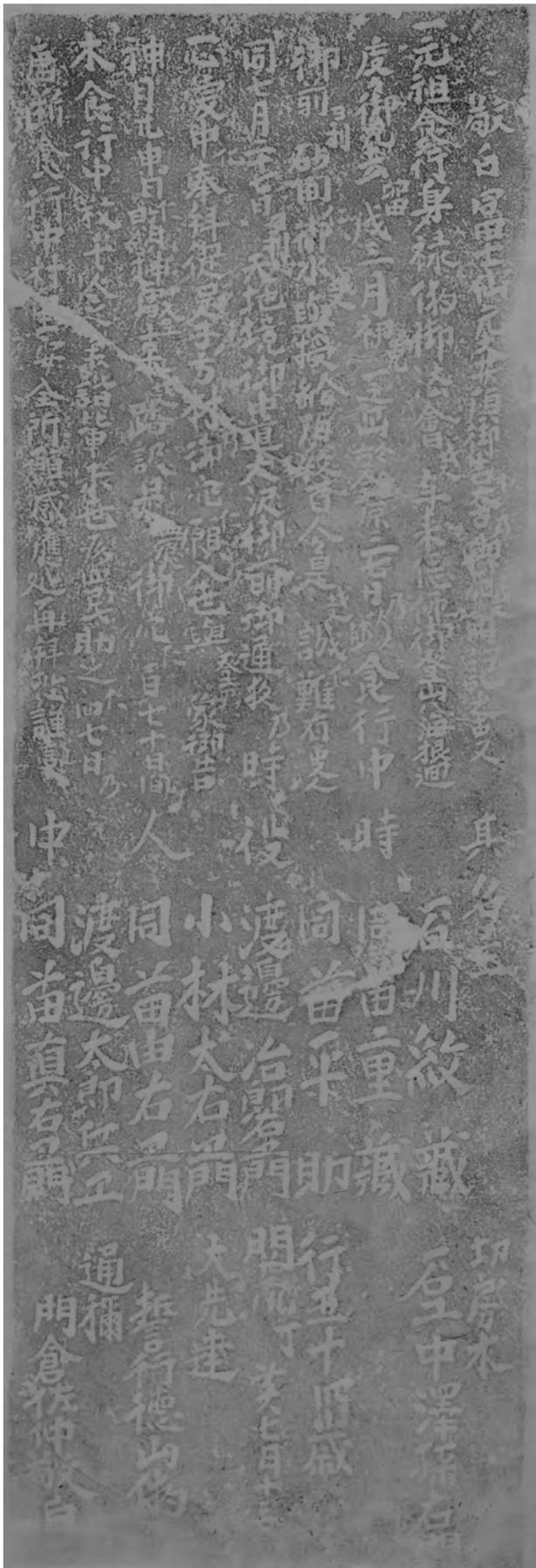
〔左面〕

富士 御内八海第六番生司

士

山 青木ヶ原之御胎内碑再建





(背面)

敬白富士仙元大菩薩頂御告越太古乃御穴旧記之事

名主

切房木

一元祖食行身祿御法会越年来徳師御登山八海根廻

石川紋蔵

石工中沢孫右門(子脱力)

度々御免去留戊三月初免一之山於鈴原三七日乃断食行中

其

同苗重蔵

御前ヨ利砂間仁御水越与授給頂数百人々是越誠仁難有事也

時

同苗平助

行五十四歳

同七月二十七日ヨ利天地境御中道大沢御前御通夜乃時

役

渡辺治郎右三門

開穴丁亥七月十三日(文政十年)

一心□中七奉拜□子ノ方林乃御穴仁願入世与登乃蒙御告

人

小林太右門

大先達

神月廿申日仁顯神慮登古木越踏訳是□御穴仁百七十日間

中

同苗由右三門

誓行徳山俯

木食行中数千人之參詣輩来世□民助之仁四七日乃

渡辺太郎兵三

通称

□断食行中村里安全所願感応处再拜恐謹言

同苗真右三門

門倉佐仲敬白

敬白 富士仙元大菩薩頂御告越太古乃御穴旧記之事

一元祖食行身祿御法会越年来徳師御登山八海根廻

度々御免去留戊三月初免一之山於鈴原三七日乃断食行中

御前ヨ利砂間仁御水越与授給頂数百人々是越誠仁難有事也

同七月二十七日ヨ利天地境御中道大沢御前御通夜乃時

一心□中七奉拜□子ノ方林乃御穴仁願入世与登乃蒙御告

神月廿申日仁顯神慮登古木越踏訳是□御穴仁百七十日間

木食行中数千人之參詣輩来世□民助之仁四七日乃

□断食行中村里安全所願感応处再拜恐謹言

同苗真右三門

門倉佐仲敬白

石川紋蔵
同苗重蔵
同苗平助
渡辺治郎右三門
小林太右門
同苗由右三門
渡辺太郎兵三
同苗真右三門

切房木
石工中沢孫右門

行五十四歳
開穴丁亥七月十三日

誓行徳山俯

大先達

通称

門倉佐仲敬白

同苗真右三門

門倉佐仲敬白

〔基礎〕

〔正面〕

御胎内惣同行中

〔右面〕

甲州八代郡九一色精進

渡邊吉左門

同苗惣左門

同助右門

小林武七

渡邊平藏

同庄左門

石川兵左門

小林定右門

同仙助

石川幸藏

渡邊与右門

信州諏訪

中川主水

〔左面〕



渡邊善左門

同苗勇助

同政右門

同幸助

同利助

同長藏

同弥右門

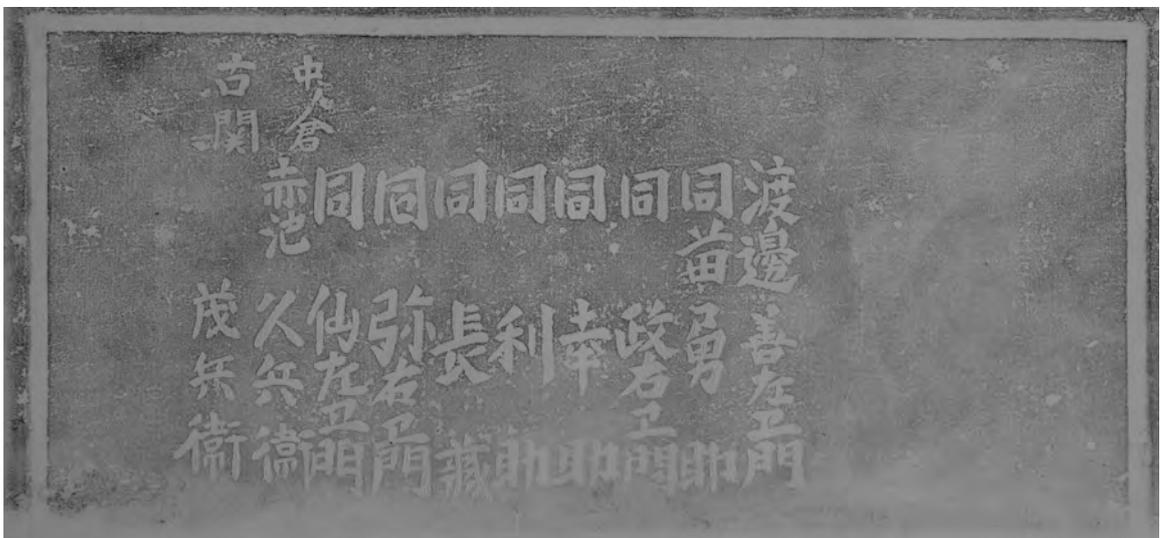
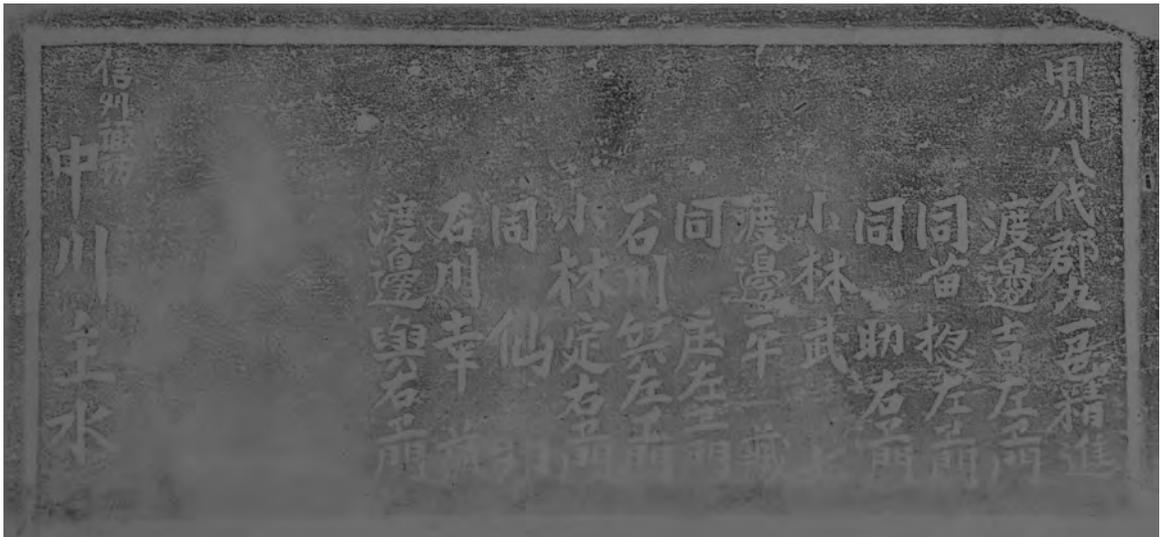
同仙左門

中ノ倉

赤池久兵衛

古関

茂兵衛



No. 5 富士講碑

嘉永元年（一八四八）

〔塔身〕

（右面）

弘化二乙巳六月

賢鏡行者

引導



（正面）



食行身祿孝

御中道修行 儂行

行年七十三才ノ時



（左面）

甲州九一色八坂村

大我孝 俗名今福孫右工門

嘉永元戊申五月建之



〔基礎〕

（正面）

三長村

権左工門

清助

根子村

重郎右工門



【山梨県富士山総合学術調査研究委員会】(敬称略)

委員長 萩原 三雄 (歴史考古民俗部会・考古班)

副委員長 紙谷 威廣 (歴史考古民俗部会・民俗班)

委員 石田 千尋 (文学部会)

内山 高 (自然環境部会)

北原 糸子 (歴史考古民俗部会・文献班)

清雲 俊元 (歴史考古民俗部会・宗教考古班)

濱田 隆 (有形文化財部会)

山下 孝司

○歴史考古民俗部会 (民俗班)

浅野 久枝、高橋 晶子、古屋 和久、

松田香代子、丸尾 依子

○歴史考古民俗部会 (建築班)

北川 直子、北川 洋

○有形文化財部会

井澤英理子、近藤 暁子、鈴木麻里子、

高橋 晶子、松田美沙子

山梨県富士山総合学術調査研究
平成三十年度活動記録

【委員会】

○第1回委員会

・開催日 平成三十年七月十九日(木)

・会場 山梨県立富士山世界遺産センター

・内容 平成三十年度総合学術調査研究の実施計画

について

【歴史考古民俗部会(考古班・宗教考古班)】

○資料調査

・実施日 平成三十年四月十三日(金)

・対象 船津胎内(富士河口湖町船津)ほか

・内容 巡礼路および石造物調査

○資料調査

・実施日 平成三十年八月二十八日(火)

・対象 光長寺(静岡県沼津市)ほか

・内容 寺院立地調査

○資料調査

・実施日 平成三十年九月二十八日(金)、十一月十六

日(金)

・対象 人穴(静岡県富士宮市)ほか

・内容 巡礼路および石造物調査

○資料調査

・実施日 平成三十一年二月十五日(金)

・対象 精進御穴(富士河口湖町精進)ほか

【山梨県富士山総合学術調査研究 調査員】(敬称略)

○自然環境部会

内山美恵子、北原 正彦、輿水 達司、

杉田 幹夫、中井 均、中野 隆志、

長谷川達也

○文学部会

石川 博、高室 有子、堀川 貴司

○歴史考古民俗部会 (文献班)

海老沼真治、菊池 邦彦、小宮佐知子、

中野 賢治、宮澤富美恵、山本 倫弘

【事務局】(山梨県立富士山世界遺産センター)

所長 秋道 智彌

副所長 小倉 良二

(調査研究スタッフ)

主幹 堀内 亨

学芸員 赤池 栄人

学芸員 堀内 眞

職員 芦沢 静枝

職員 根岸 崇典

○歴史考古民俗部会 (考古班・宗教考古班)

石神 孝子、出月 洋文、河西 学、

笠原みゆき、櫛原 功一、熊谷 晋祐、

篠原 武、杉本 悠樹、新津 健、

野代 恵子、畑 大介、平野 修、

深沢 広太、布施 光敏、保坂 和博、

保坂 康夫、宮澤 公雄、御山 亮済、

村石 眞澄、室伏 徹、望月 秀和、

望月 祐仁、森原 明廣、八巻與志夫、

・内容 巡礼路および石造物調査

○第一回部会

・開催日 平成三十一年二月二十一日(木)

・会場 帝京大学文化財研究所

・内容 富士北麓地域遺跡にかかわる分布調査について

【歴史考古民俗部会(民俗班)】

○第一回部会

・開催日 平成三十年十月六日(土)

・会場 山梨県立富士山世界遺産センター

・内容 河口御師住宅民具にかかわる調査方針について

○資料調査

・実施日 平成三十年十月六日(土)～八日(月)

・対象 河口御師・本庄家(富士河口湖町河口)

・内容 河口御師住宅の民具調査(目録作成、写真撮影ほか)

【歴史考古民俗部会(建築班)】

○資料調査

・実施日 平成三十年九月二十日(木)～九月二十六日(水)

・対象 吉田御師・横田家(富士吉田市上吉田)

・内容 吉田御師住宅の建築物の調査

【歴史考古民俗部会(民俗班・考古班)】

○合同資料調査

・実施日 平成三十年十一月七日(水)

・対象 精進御穴(富士河口湖町精進)

・内容 巡礼路および信仰関係石造物の調査

【歴史考古民俗部会(文献班)】

○資料調査

・実施日 平成三十年八月二十三日(木)

・対象 吉田御師・注連澤家(富士吉田市上吉田)

・内容 吉田御師にかかわる古文書調査

【文学部会】

○第一回部会

・開催日 平成三十年十月八日(月)

・会場 山梨県立文学館

・内容 今後の調査研究の進め方について
※部会に引き続き、同会場にて公開発表会を開催。

堀川貴司「林羅山と富士山―中世から近世へ―」
高室有子「山中湖畔の虚子山荘をめぐる俳人たち

―虚子の山中湖滞在と

周辺資料について―」

【総合学術調査研究公開発表会】

○「貞観の大噴火をめぐる」

・開催日 平成三十一年三月二日(土)

・会場 鳴沢村総合センター

・主催 山梨県立富士山世界遺産センター、鳴沢村教育委員会

・内容

【基調講演】

大隅清陽「文献からみた貞観噴火」

【報告】

馬場 章「古地磁気からわかる富士火山の歴史時代噴火」

新津 健「富士山の火山活動と考古資料

―青木ヶ原丸尾溶岩を中心にして―」

紙谷威廣「聖域としての富士山溶岩洞穴」

山梨県立富士山世界遺産センター研究紀要

世界遺産 富士山 第3集

平成三十一年三月二十九日発行

編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

電話 〇五五五―七二―二三一四

千四〇一―〇三〇一

山梨県南都留郡富士河口湖町船津六六六三一

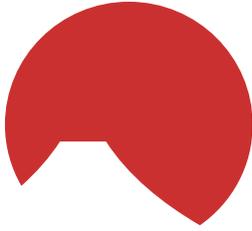
印刷・製本 株式会社 島田プロセス

電話 〇五五―二三三―八八二九

千四〇九―三八六七

山梨県中巨摩郡昭和町清水新居一五三四

無断転載・複製を禁じます。



Bulletin
of the Yamanashi Prefectural Fujisan World Heritage Center

World Heritage Fujisan

vol.3 2019